文學博士 桑原隲藏著

中等教育 東洋史教科書

株式會社東京開成館藏版

43058
教科書文庫
4
220
51-1921
20000
85174

資料室
教科書文庫
4
220
51-1921
2000085174

4A
220
大10

濟定檢省部文
用科史歷校學中校學範師　日六十月二十年十正大

中等教育

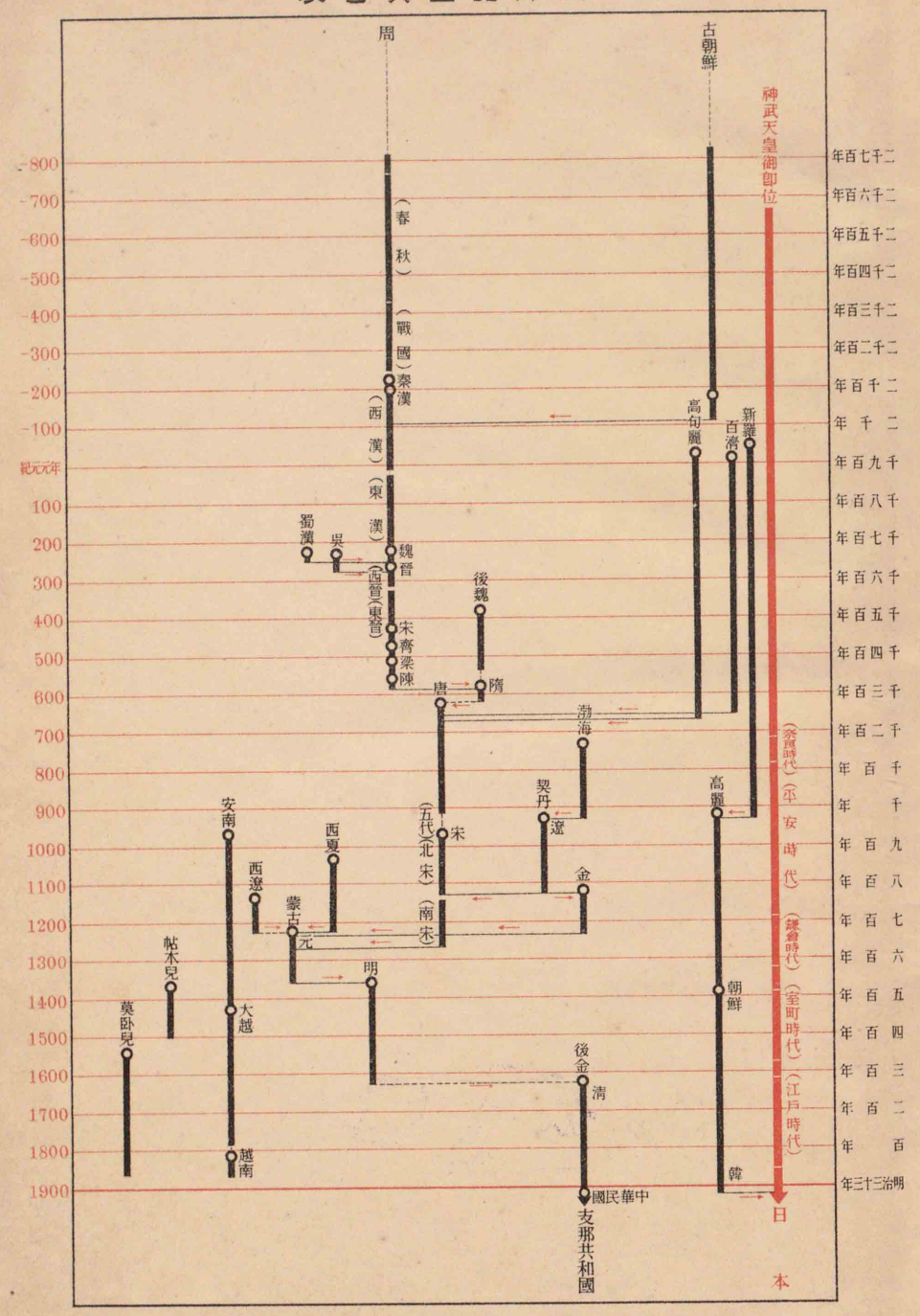
東洋史教科書

京都帝國大學教授
文學博士
桑原隲藏
著

株式會社
東京開成館
版藏

広島大学図書
2000085174

東洋諸國興亡表



広島大学
教
85174
図書

大改正の主意

本教科書發行以來幸に教育界の大歡迎を受けたれば、著者は愈その責任の重きを自覺し、爾來十餘星霜の間、年毎に小修正を加へ、二三年毎に大改正を施して、一日もその改善を忽にせしことなし。今茲の大改正は全般に渉りて、殆ど舊觀を一新せりと雖も、その主要なる點を列擧すれば左の如し。

(一)、新に日獨開戰及び日支交渉の二項を增加せしこと。

(二)、學術、文化に關する記事を增加せしこと。

(三)、章及び項の廢合移動を行ひて、體裁を整理せしこと。

(四)、記事中に若干の小地圖を挿み、また新に長安、洛陽、北京の古蹟圖を加へて說明の便宜を圖りしこと。

(五)、新に挿畫若干を增加せしこと。

(六)、新に東洋諸國興亡表を加へしこと。

(七)、塞外の事件にして比較的重要ならずと思はるゝものは、多少删除せしこと。

(八)、朝鮮に於ける日清の關係、日清戰役、日露戰役等に關する記事は國史との重複を避けんがために一層省略せしこと。

著者は固よりこの改正を以て十全なりと思惟するものにあらず。その過ぎたる所、その足らざる所は、一に實地教授の經驗に富まるゝ中等教員諸君の指摘を待つて更に一層の改善を期すべし。

なほ本書の教授に便せんがために、著者の特に著述したる『東洋史教授資料』一卷あり、參見せられんことを望む。

大正四年十月

前版發行後更に最近の事件を增補し、新に現代期の一篇を立て、修正二十版を發行せしむ。大正十年十月

例言

一、この書は新定教授要目に準據し、中等程度の學校に於て規定の時間内に支那を中心とせる東洋史を授くる目的を以て編纂せるものにして、著者は及ぶ限り平易簡明に記述することを力めたり。

一、紀事に連絡あると趣味あるとは教授上最も必要なる條件なれば、著者は十分この點に注意せり　書中多く逸話・文辭を挾み、重要なる民族の風俗を記ししも、亦この意に外ならず。

一、朝鮮の沿革は特に支那と關係ある事項及び東亞の大勢に關係ある事項のみを記載し、他は國史に讓りて多く省略に附せり。

一、紀年は、東洋史と相竝んで外國史の一半をなせる西洋史との對照のため及び實際の便宜のため一にキリスト紀元卽ち西紀を本とすれども、わが國に關係ある事項は特にその何天皇の御代若しくは何將軍の時代に當れ

るかを註して國史との連絡を保ち、わが維新以後に起れる事變は明治及び大正の年數を註して記憶に便ならしむ。

一、毎期の終にその期間の沿革の摘要と年表とを載せて、既得の知識の復習に充て、かねて時代と事實との關係を明かならしむ。生徒は必ず之を參照することを怠るべからず。

一、國史と東洋史との對照を要すべき事項は特に欄外に注意を與へ、また年表にも列記し、力めて兩者の連絡を圖れり。

一、卷尾に重要なる支那帝室及び舊韓帝室の略系を掲げたり。亦生徒の之を參照せんことを要す。

一、本書に插入せる圖畫は皆正確なる考據あるものにして、尋常の東洋史に掲載せるものと聊か其選を異にせるは著者の斷言して憚らざる所なり。

大正二年九月

著者識

目次

第一篇　上古期

第一章　支那の太古……一
第二章　西周　春秋時代……四
第三章　戰國時代……八
第四章　周代の制度及び學術……一一
【上古史摘要及び年表】

第二篇　中古期

第一章　秦の興亡……一七
第二章　漢楚の爭　西漢の初世……二一
第三章　武帝の功業……二三
第四章　西漢の衰微　東漢の興起……二八
第五章　佛教の弘通……三一
第六章　東漢の極盛……三五

第七章　東漢の末路……三八
第八章　三國及び西晉……四〇
第九章　五胡及び東晉……四三
第十章　南北朝の對立……四六
第十一章　隋の興亡及び唐の初世……五一
第十二章　唐の制度……五五
第十三章　唐の外國經略……五九
第十四章　唐の中世……六四
第十五章　唐の衰滅……六八
第十六章　唐の學術及び宗教……七一
【中古史摘要及び年表】

第三篇　近古期

第一章　契丹の興起　五代の紛爭……七七
第二章　宋の初世　遼の極盛……八〇
第三章　神宗の改革　女眞の興起……八四

第四章　金宋の關係　宋の學術……八九
第五章　蒙古の興起……九四
第六章　太宗及び憲宗の事業……九八
第七章　世祖の外征……一〇一
第八章　元の極盛……一〇五
第九章　元の衰微……一〇八
第十章　明の初世……一一一
第十一章　帖木兒帝國の興亡……一一五
第十二章　明の衰微……一一七
第十三章　歐人の東漸……一二一
【近古史摘要及び年表】

第四篇　近世期

第一章　清の興起……一二五
第二章　清の塞外征略……一二八
第三章　清の制度及び學術……一三三

第四章　莫臥兒帝國の興亡　英人の印度侵略……一三九
第五章　阿片戰役　長髮賊の亂……一四四
第六章　露國の東亞及び中亞侵略……一四九
第七章　佛國の印度支那侵略……一五四
【近世史摘要及び年表】
第五篇　現代期
第一章　日清戰役……一五九
第二章　義和團の亂……一六一
第三章　日露戰役……一六五
第四章　清の滅亡……一六九
第五章　中華民國(上)……一七一
第六章　中華民國(下)……一七六
【現代史摘要及び年表】

附錄　歷代世系

一　漢帝室の系圖　二　晉帝室の系圖
三　唐帝室の系圖　四　宋帝室の系圖
五　元(蒙古)帝室の系圖　六　明帝室の系圖
七　清帝室の系圖　八　朝鮮(韓)王家の系圖

中等教育

東洋史教科書

文學博士　桑原隲藏著

第一篇　上古期（太古より西紀前二二一年まで）

第一章　支那の太古

漢族

中原
字義は中央の平原の意ふれ共、東洋史とは共通なる中原を指す。

㊀東洋史。 東洋史とは支那を中心とせる東洋諸國の興亡及び諸民族の盛衰を敍述する一般歴史なり。

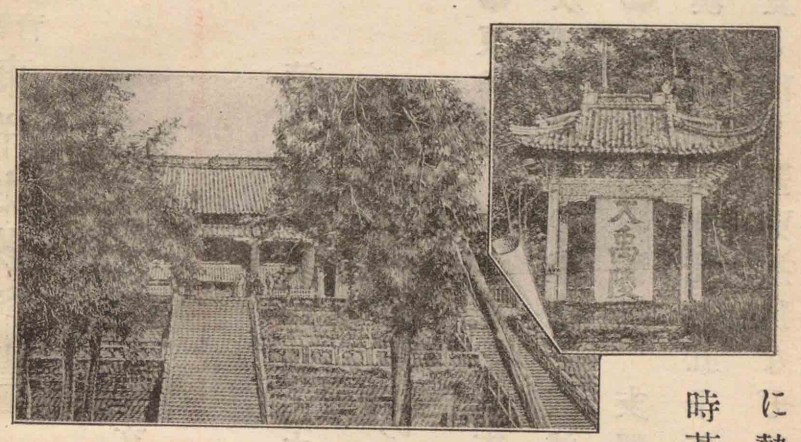
㊁支那文化の發端。 支那の文明を開きしものは漢族なり。漢族は今より凡そ五千年前に、黄河の沿岸に據りて、自ら中夏と稱し、蠻、夷、戎、狄など呼べる四圍の異族を征服して、次第

黄帝

諸種の發明

帝堯、帝舜

禹王の廟及びその陵（浙江省紹興縣城外に在り）



に勢力を增せり。古傳說によれば、當時黃帝といふ君ありて、多くの部落に分れし漢族を併せて一統の政治をなし、また舟、車、文字などを發明して、文化を進めたりといふ。黃帝の後に、帝堯、帝舜といふ君、相ついで位に卽けり。共によく國を治め、理想の君主として、後世に崇拜せらる。

㊂夏の時代。 帝堯の末に黃河溢れて、民苦しみしが、禹といふ人この洪水を治めし功によりて、帝舜の禪を受けて位に登り、安邑（山西）に都し、國を夏と號せり。禹王の死後も、國民はその功勞を憶ひ、禹王の子孫を推して王位を相續せしめたり。以前は禪讓とて、堯は舜に、舜は禹にと、有德の人に位を禪る例なりしが、これより王位世襲の制定まれり。後に桀王（禹王の十三世の孫）に至り、暴虐にして、人望を失ひしかば、商の湯王に滅されたり（西紀前一七〇〇年頃）。

王位世襲の制定まる

夏滅ぶ（約三千六百五十年前）

㊃殷の時代。 湯王は亳（河南）に都して、國を商と號せり。後に盤庚（湯王の九世の孫）の世に、殷（河南）に都せしかば、商はまた殷とも號す。殷は後に紂王（盤庚の八世の孫）に至り、暴虐にして、酒池、肉林の樂に耽りしかば、天下に王を怨む者多く、周の武王起りて、これを滅せり（前一二〇〇頃）。

殷滅ぶ（約三千年前）

殷は夏を滅し、周はまた殷を滅し、代りて天下の君となれり。これを革命と

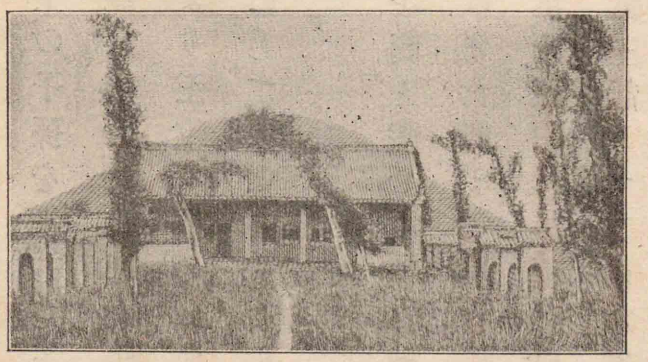
いふ。有德の人は不德の君に代りて民を治め、民は不德の君を捨てて有德に就くことを得べしとは、支那人一般の信念にして、「撫我則后、虐我則讎」といふ語は、尤も明白にこの思想を表せり。これわが國と支那との國體に根本的相違ある所以なり。

わが國と支那との國體の相違

第二章　西周　春秋時代

一 周の武王。 武王は殷を滅して、王位に卽き、鎬京（陝西省長安縣）に都して、國を周と號せり。

周の武王の陵（陝西省咸陽縣城の北に在り）



二 周公。 武王死して、子成王なほ幼かりしかば、叔父周公政を攝して、泰平を致し、また都を洛邑（河南省洛陽縣）に營みて、これを東都といへり。周公は聰明なる人にて、諸〻の制度を定めて、後世に模範を垂れたり。

東都

三 周室の東遷。 成王の後、久しからずして、王威漸く衰へ、幽王（成王の九世の孫）に至りて、政を怠りしかば、諸侯叛き、犬戎といふ種族、侵入して、幽王を攻め殺せり。その子平王は諸侯に擁立せられて天子となり、犬戎を避けて、都を洛邑に遷せり（前七七〇）。これを周室の東遷といひ、平王以後を東周の世と稱す。

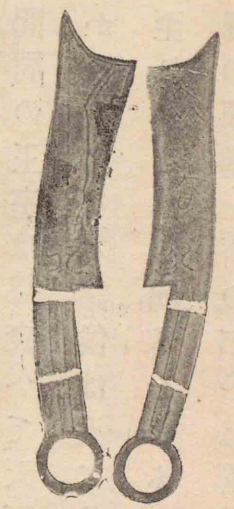
犬戎幽王を攻め殺す（約二千七百年前）

四 春秋の世。 平王以後、凡そ三百年間を春秋の世といふ。この間、周の王室は益〻衰へて、天下は殆ど無政府の有樣となりしかば、有力なる諸侯は王に代りて他の小諸侯に號令するに至れり。これを霸者といふ。

五 齊の霸業。 齊の桓公は管仲を用ゐて、富國、强兵の實を擧

齊の桓公

齊の貨幣



（形によりて刀貨と稱す。桓公の頃にも齊に行はれし貨幣なり。右方の貨幣の面には古文にて齊法貨の三字を刻せり）

管仲の功業

死するに及びて、内亂起りて、國衰へたり。

管仲、鮑叔と善く、その桓公に信任せらるゝに至りしも、鮑叔の力なり。されば今も世に管鮑の交と稱す。管仲は農業、殖産を治國の基礎とし、「倉廩實(チテ)而知禮節、衣食足(リテ)而知榮辱」といへり。かくて齊は國富み、兵強く、中國の諸侯を統一して戎狄を攘(ハラ)へり。漢族が戎狄の侵略を免るゝことを得しは、偏に管仲の力なれば、孔子も「微(ナカリセバ)管仲吾其被(レリ)髮左(ニセンヲ)衽矣」といへり。當時漢族は結髮して冠を戴き、衣は衽を右にしたり。されば被髮左衽とは戎狄の風に化するをいふ。

晉の文公

六 晉、楚の覇業。 晉の文公は齊の桓公の死後、間もなく中國に侵入せし戎狄を攘ひ、また周の王室のために力を盡くし、その功業儔(タグヒ)稀なりしが、管仲、桓公相つぎて

楚の莊王

吳王夫差

越王勾踐

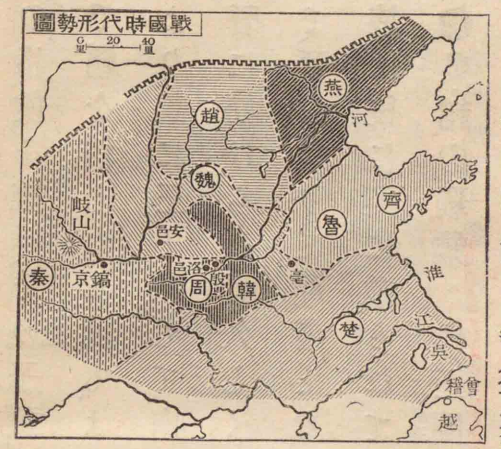
の諸侯を統べ、その子孫世々覇業を保ち、楚、吳、越等が相ついで覇を稱したる間も、よくこれに對抗せり。楚は春秋の初より既に王と稱して、南方の諸侯の間に勢を振ひしかど、齊、晉に妨げられて久しく志を中國に得ざりしが、莊王に至りて、晉を破りて覇者となり、中國の諸侯も多くこれに屬せり。楚は後に吳に破られて覇業一旦衰へたり。

七 吳、越の覇業。 吳王闔閭(カフリヨ)は楚を破りて國威を揚げしが、後に越王勾踐と戰ひて敗死せり。その子夫差、復讎の師(イクサ)を發して越を破り、勾踐を會稽(浙江)に圍みてこれを降し、遂に中國に入りて覇者となりしかど、やがて勾踐に襲はれて敗死せり。勾踐は吳を滅し、中國の諸侯を從へ、國勢強大を極めしが、その死後、次第に衰へ、遂に楚に征服せられたり。

第三章　戰國時代

一　戰國の世。　平王より凡そ三百年を經て威烈王（平王の十六世の孫）に至る。これより後、二百年の間を戰國の世といふ。この時代には、弱肉强食の爭益、烈しく、春秋時代の諸侯は略滅亡し、そのよく大諸侯たる面目を保てる者は、北に燕、南に楚、西に秦あるのみ。晉はその臣韓、魏、趙の三氏に分割せられ、齊もまたその臣田氏に簒はれ、これらの四氏は皆周の王室の命によりて諸侯となれり。この秦、楚、燕、田齊、韓、魏、趙を戰國の七雄と稱す。楚

戰國の七雄



以外の六國の君もやがて皆王と稱し、周の王室はたゞ洛邑附近を領する一小諸侯に過ぎざる有樣となれり。

二　秦の强盛。　秦は春秋時代より西戎の間に勢を振ひしが、戰國の初に、孝公立つに及びて、商鞅（シャウアフ）を用ゐて富國强兵の策を講ぜしより、國力日に强くなれり。かくて、秦の勢、他の六國を壓せんとするに至りしかば、こゝに合從（ガッショウ）の說起れり。

（人口を多くし、各人を多ましむる為土地の事業をすることを許す）（法令を四境内に徹ぜしむ）（衆人を大きす。衆の運命を考慮）

秦の孝公と商鞅

三　合從の說。　合從とは、六國同盟して秦に當ることにて、蘇秦は名高き雄辯家にて、燕より趙、趙より韓、魏、齊、楚と次第に合從の利を遊說して成功し、遂に同盟の長となりて、專ら秦を弱めんことを圖れり。されど間もなく秦の反間にかゝりて、合從破れたり。

（從は縱ぶり。縱に合して横に考るとふことをふり。）

蘇秦合從の說を唱ふ

蘇秦は洛邑の人なり。嘗て游學し、功名成らずして故鄕に歸りしに、一族頗

蘇秦の發憤

張儀連衡の說を唱ふ

るこれを侮辱せしかば、これより發憤して學を勵み、遂に合從の策を建て、六國の相となりて、また故郷に歸りしに、一族皆俯伏して敢へて仰ぎ視る者なかりき。是に於て蘇秦は人情の反覆を歎じて、「此一人之身、富貴則親戚畏懼之、貧賤則輕易之、況衆人乎。使我有洛陽負郭田二頃、豈能佩六國相印乎。」

（周の人）（肉は目鉞）

といへり。負郭の田とは城郭に近き耕作に便益ある田をいふなり。

四 連衡の說。 蘇秦の友に張儀といふ者あり。合從の解くるを見て、秦のために六國を服從せしめんとて、連衡の策を立て、得意の智辯を振ひて、まづ魏に說きて秦と和せしめ、ついで他の五國をも說服せしが、やがて張儀秦を去りしかば、連衡もまた破れたり。蘇秦、張儀の後、合從、連衡の說益、流行し、六國の君主は多くこれに惑ひて、方針一定せざりしかば、國勢次第に衰微せり。

衡は横ぶり。依て衡の字に横につくねよ。

五 秦の一統。 六國の方針一定せざるに乘じ、秦は范雎の勸

范雎の遠交近攻策

古代の戰士

（漢代の彫刻に據る。左手に盾を、右手に矛を持てり。戰國時代の戰士の有樣を想見し得べし）

に從ひ、遠交近攻の策を用ゐて益、諸侯を弱めしかば、周の赧王（威烈王の玄孫）大いに懼れ、竊に六國と秦を伐たんことを圖りしに、反りて秦に攻め滅されたり（前二五六）。ついで秦の始皇帝（孝公の五世の孫）は韓、趙、魏、楚、燕、齊を滅して、天下を一統せり（前二二一）。

第四章　周代の制度及び學術

一 周代の文物。 支那の文物は周時代より開け、後世多くこれを模範とせり。されば左にその大略を述ぶべし。

二 封建。 周は一族、功臣を四方に封じ、公、侯、伯（方三百里）、子（方二百里）、男（方一百里）の五爵を

置きて王室の藩屏となせり。

㊂官制。 中央政府には天長官は冢宰、地長官は大司徒、春長官は大宗伯、夏長官は大司馬、秋長官は大司寇、冬長官は大司空の六官を設く。天官は庶政を總べ、地官は民治、教育を掌り、春官は祭祀、禮儀を掌り、夏官は軍事を掌り、秋官は刑律を掌り、冬官は工藝を掌れり。

六官

㊃田制、稅法。 方一里、九百畝の地を九分して井田となし、その八分を私田とし、八家に授けてこれが收穫を私有せしめ、その一分を公田とし、八家に耕さしめ、これが收穫を官に納めて田租に充てしむ。その他に力役の征（人民を土木に使役す）、布縷（征は稅ぶり。）の征（絹布を貢せしむ）などありき。

井田の法

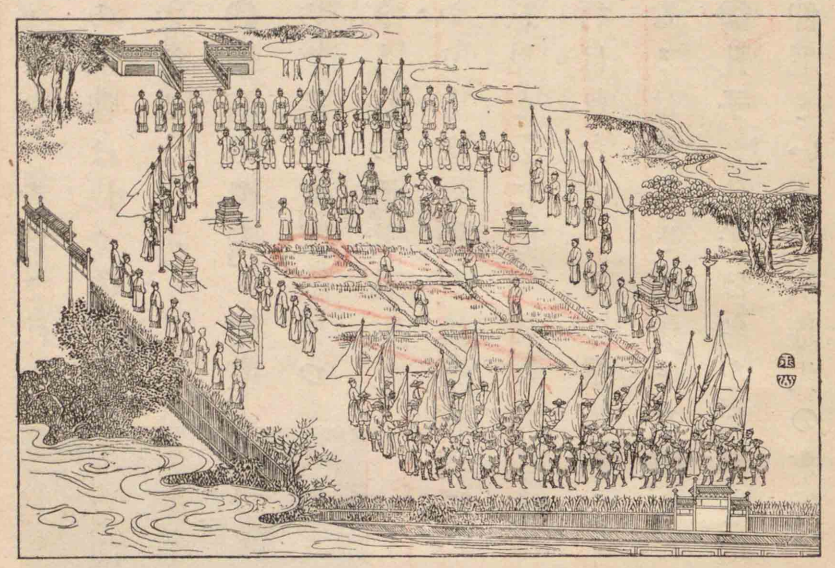
㊄學制。 學校を大學、小學に分ち、大學にては己を修め人を治むる道を教へ、小學にては洒掃、應對、進退の節を教ふ。而して禮、樂、射、御、書、數の六藝は最も重要なる學科をなせり。

六藝

㊅世態。 階級制度嚴重にして、天子、諸侯、大夫、士、庶民の身分に應じて衣、食、住に區別あり。男女の別は嚴にして、男子は三十歲、女子は二十歲を婚姻の期とす。男子は主として耕種に、女子は紡織に力め、かくて農蠶の業は最も重んぜられ、天子、皇后も親耕、躬桑の儀式を行ひて、國民を勵

清帝親耕の圖

（北京外城の先農壇に藉田あり、毎年陰曆三月に清帝この藉田にて親耕の禮を行へり。親耕の禮終りて觀耕臺に就き、扈從の官吏農夫の耕作を閲す。圖の左上にある臺は觀耕臺にして、臺前に井形をなせるは藉田なり。この藉田の收穫は上帝宗廟の祭に供す）



ませり。大抵これらの風習は、長く後世まで行はれたり。

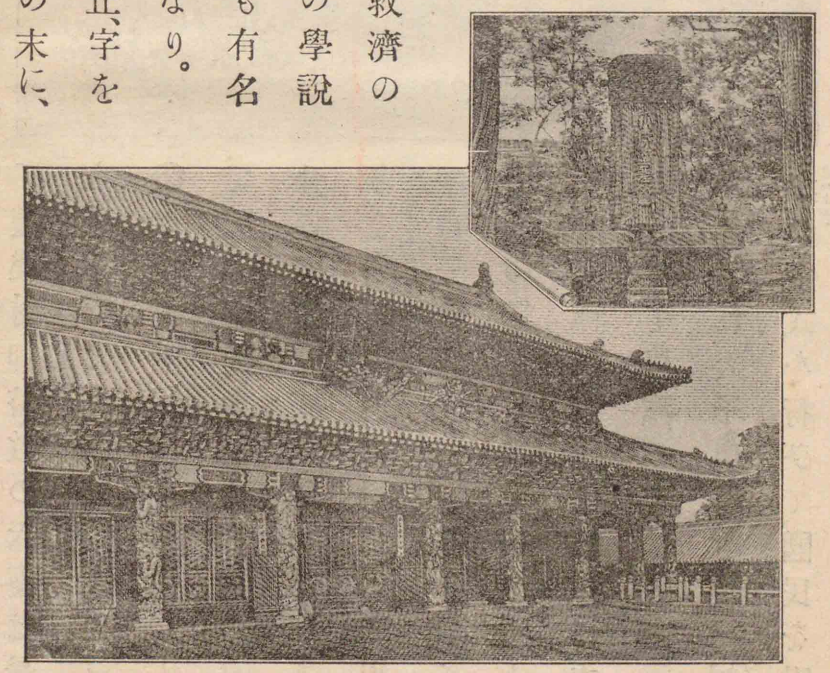
㊐學術の興隆。 周室の東遷以來、騷亂相つぎ、人民の困苦甚だしかりしかば、學者は各、救濟の意見を公にして、種々の學說行はれたり。その最も有名なるは孔子と老子となり。

㊑孔子。 孔子は名を丘、字を仲尼といふ。春秋時代の末に、

日末に學術の興隆せし原因

孔子の廟及びその墓

（廟は山東省曲阜縣城内に在り。本殿を大成殿といふ。墓は城外に在り）



儒教のわが國に傳來せしは應神天皇の御代にて、孔子の死後約七百六十年に當れり

孔子儒教を唱ふ（約二千四百年前）

子思
孟子
荀子

老莊の學

魯（山東）に生まれ（前五五二年、綏靖天皇の御代）、始めて儒教を唱へたり。儒教は孝悌を以て身を修め、仁を以て國を治むるを主とし、今日に至るまで、支那政教の基礎となれり。かくて孔子はその道を諸侯に說きしかど、用ゐられずして、世を終へたり（前四七九年、懿德天皇の御代）。その孫子思、中庸を著し、子思の後に孟子出でて性善說を唱へ、荀子は更にその後に出でて性惡說を唱へ、いづれも皆孔子の道を祖述せり。

㊒老子。 老子は孔子に稍先だちて出で、無爲自然の道を說きて、道德五千言を著し、後に列子と莊子と出でて老子の道を擴張せり。この學派を道家といひ、また老莊の學ともいふ。後世これに附會して道教起れり。

㊓諸子百家。 儒、道兩家の外に、楊子は自愛の說を立て、墨子

は兼愛の説を唱へ、商鞅と韓非とは法家として名高く、孫武と吳起とは兵家として名高し。世にこれらを總稱して諸子百家といふ。

上古史摘要及び年表

上古期は太古より秦の一統に至るまでを包括し、わが孝靈天皇以前に當る。この期の初に漢族は黃河沿岸の地を占領して、東洋文化の曙光を放てり。漢族の周圍には數多の蠻族ありしが、漢族は次第にこれを征服しまたは驅逐して、勢力を擴め、この期の最終に至りては、今の支那本部の大部を一統したり。要するに漢族膨脹の時代といふべし。この間に於ける漢族革命の大勢を示せば左の如し。

太古——夏四四〇——殷六四〇——周八六四——秦

年代		事蹟		年代		事蹟	
	皇紀頃	西紀頃	東洋史		皇紀	西紀	東洋史
	前一六八〇	前二三四〇	帝堯の卽位		一八二前	四七九前	孔子死す
	一六〇〇頃	二二六〇頃	帝舜の卽位	孝昭	一八八	四七三	越王勾踐吳を滅す
	一五四〇頃	二二〇〇頃	夏興る	同	二三六	四二五	周の威烈王の卽位
	一一〇〇頃	一七六〇頃	夏滅び殷興る	同	二五八	四〇三	韓魏趙三氏諸侯となる
	四六〇頃	一二二〇頃	殷滅び周興る	孝安	二七五	三八六	田氏齊侯となる
	一一〇	七七〇	周室の東遷	同	二九〇頃	三七一頃	孟子生まる
	二五	六八五	齊の桓公立つ	同	三〇〇	三六一	秦の孝公立ちて商鞅を任用す
神武後	一	六六〇		同	三一八	三三三	蘇秦合從を唱へて成功す
同	二五	六三六	晉の文公立つ	同	三五〇	三一一	張儀連衡を唱へて成功す
同	四八	六一三	楚の莊王立つ	孝靈	四〇五	二五六	周滅ぶ
綏靖	一〇九	五五二	孔子生まる	同	四四〇	二二一	秦支那を一統す

國史	國史
神武天皇御卽位	
懿德	懿德

わが國にて郡縣の制を布きしは孝德天皇の御代にて、始皇帝の郡縣の制を敍めし時より約八百六十年後なり

封建を廢して郡縣を興す

文字の一定

書體の變遷

第二篇　中古期（西紀前二二一年より九〇七年まで）

第一章　秦の興亡

一始皇帝の內治。 秦の始皇帝は六國を併せたる後、從來の封建を廢して郡縣となし、天下を三十六郡に分ち、各郡に守、尉、監を置きてこれを治め、中央政府には丞相、大尉、御史大夫を置きて天下を統べしめ、文字を一定し、地方の富豪十二萬戸を國都咸陽（鎬京の北）に徙して、禍亂の源を絶ち、また阿房宮以下の大宮殿を渭水の南に築きて壯麗を極め、以て天下の權力を中央に集めたり。

古文　篆書　隸書　楷書　行書　草書

黄帝の時より周末に至る間に、文字に數多の變遷ありしが、すべてこれを古文といふ。始皇帝、天下を一統して交通の區域廣まり、文字の必要增すに及びて、古文を省略して篆書と隸書とを制せしめ、これを天下に通用せしめたり。漢代以後に至りて隸書を省略して楷書とし、行草の二體もまたついで用ゐられたり。書寫の材料は、初は竹簡または木板に限り、後には帛を用ゐしが、木竹は重く、帛は貴くして、不便多かりしを、東漢の世（一〇五）に至りて蔡倫といふ者紙を發明して、始めてこの不便を除くことを得たり。

紙の發明

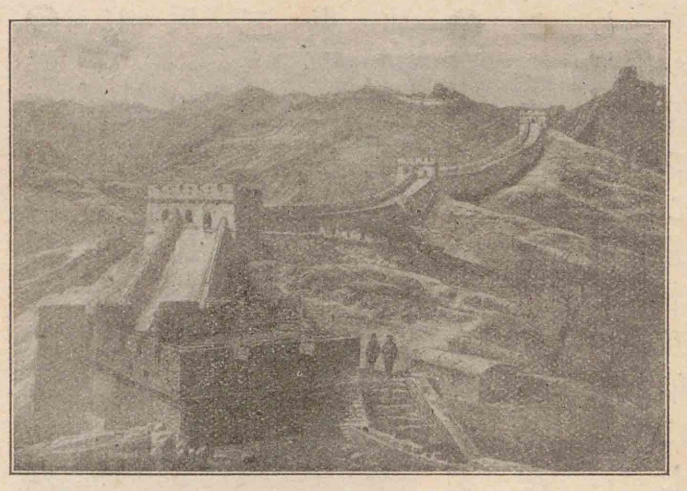
㊂始皇帝の外征。 戰國以來、匈奴（トルコ族の一種）といふ北狄、屢中國に入寇せしかば、始皇帝は將軍蒙恬をしてこれを擊退せしめ、北邊に長城を築きてその侵入を防ぎ、また南は南越を征して今の廣東、廣西以南の地を定めたり。

始皇帝長城を築く

㊃漢族の發展。 堯舜以來、漢族は次第に發展せしかど、その根據地たる中國は、周の時なほ黄河の左右に限られ、しかも

戎狄のその間に雜居するもの少からざりき。春秋、戰國の時、大諸侯の勢力の盛となるに從ひて、中國に雜居せし戎狄を併せ、且四方の異族を攘ひて土地を拓きしが、是に至りて漢族の勢力範圍は大いに廣まり、秦の國威遠く振ひしかば、諸外國は秦を訛りて支那と呼び、遂に今日の國名となれり。

㊃火坑の暴政。 されど、法令苛酷なるが上に、國民は土木と外征とに疲れて、漸く新政を厭ひ、學者もまた往々これを非議せり。是に於て、始皇帝は丞相



萬里の長城（北京の西北約二十里に在る八達嶺附近の長城なり。この長城は明代に修築せしものにて、秦時の舊にあらず）

支那の國名の起源

李斯の議を用ゐ、醫藥、卜筮、農業以外の一切の書を聚めて悉くこれを焚き、ついで書生四百六十餘人を坑殺せり。

宦者趙高

㊄群雄の蜂起。 始皇帝死して少子二世皇帝嗣ぎしが、暗愚にして、宦者趙高政權を恣にせり。是に於て、楚人陳勝まづ兵を起し、群雄これにつぎて蜂起せしが、中にも項羽、劉邦の二人最も勢力ありき。項羽は勇武なる軍人にして、兵を江東に起し、劉邦は寛仁なる長者にして、項羽と同時に兵を沛に起せり。

項羽と劉邦

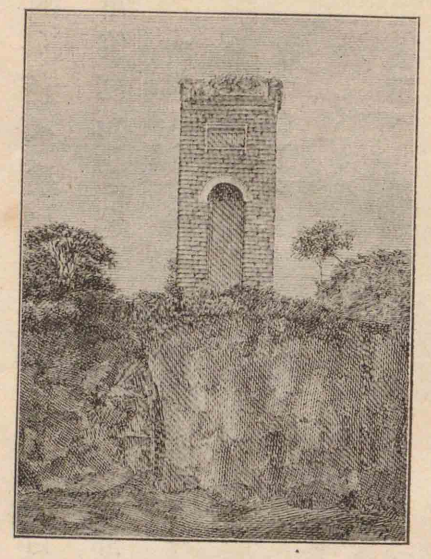
劉邦秦を降す

㊅秦の滅亡。 かくて項羽、劉邦の二人力を協せて秦を伐つ。この時、趙高は二世皇帝を弑して、その從子なる子嬰を立てしが、劉邦の軍まづ咸陽に迫りしかば、子嬰出で降り、秦は天下を保つこと十五年にして滅べり（前二〇六）。

第二章　漢楚の爭　西漢の初世

鴻門の會

㊀項羽の暴虐。 劉邦は咸陽に入り、秦の苛政を除きて民望を收めしに、項羽は後れ至りて、鴻門（咸陽の東）に陣し、劉邦の功を嫉みてこれを擊たんとせしが、劉邦はその臣張良の智と樊噲の勇とによりて、纔にその難を免れたり。項羽はやがて阿房宮を燒き拂ひ、子嬰を殺して東に歸れり。



鴻門の舊蹟（陝西省臨潼縣新豐店の東に在り。碑面に南原鴻門楚霸王宴漢皇帝處の十二字を刻す）

項羽西楚の霸王となる

㊁漢、楚の爭。 項羽は東歸の後、彭城（蘇江）に都して、西楚の霸王と稱し、天下の政權を握り、劉邦を漢中（陝西）、巴蜀（四川）の僻地に移

西漢の三傑

して、漢王となせり。劉邦、心平ならず、蕭何、張良、韓信の三傑と謀り、兵を擧げて、項羽と戰ふこと四年に及びしが、項羽の勢漸く衰へ、遂に烏江（揚子江の下流）にて自殺し、劉邦は天下を一統して帝位に卽き（前二〇二）、長安（周の鎬京）に都せり。これを漢の高祖とす。

劉邦天下を一統す（約二千百年前）

項羽は少き時、書を習ひ劍を學びしかど、皆上達せざりしかば、「書足レ記二姓名一而已、劍一人ノ敵不レ足レ學。」といひて、遂に兵法を講せり。その劉邦と爭ひて、遂に敗れて垓下（安徽）に圍まるゝや、漢軍中に楚歌する者多きを聞き、慷慨に堪へずして、「力拔レ山兮氣蓋レ世、時不レ利兮騅不レ逝、騅不レ逝兮可二奈何一、虞兮虞兮奈二若何一。」と歌へり。騅とは項羽の愛馬にして、虞とはその寵姫なり。

子弟を分封して藩屏に備ふ

㊂高祖の施政。 高祖は周の封建と秦の郡縣とを併せ用ゐ、初は遠隔の地に功臣を封ぜしが、後には多くこれを殺戮して、その子弟同族を以てこれに代へたり。されどこれら諸王の領土廣大に過ぎ、反りて後年の禍を遺せり。

漢の高祖及び漢代の長安の遺址

（高祖の像は元代の石刻に據る。漢の長安は陝西省長安縣城外に在り。圖は長安の西南隅に在りし未央宮の址なり）

諸王跋扈の弊やむ

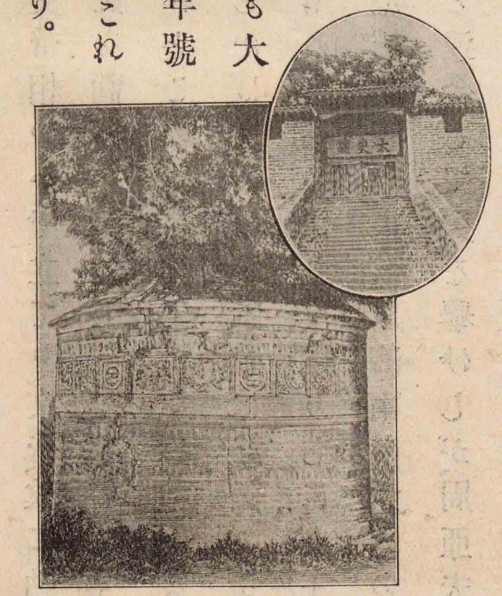
第三章　武帝の功業

㊃吳楚七國の亂。 高祖死して、子惠帝、文帝相ついで立てり。文帝、政に勤め、民を憫みしかば、天下無事なりき。されどこの間に諸王は愈專横となりしかば、文帝の子景帝は鼂錯の策を用ゐ、諸王の領土を削りしに、吳王は楚、趙、膠西、膠東、菑川、濟南の六國の王と連合して兵を擧げしが、周亞夫に平定せられ、これより諸王の勢衰へ、封建の制も次第に廢れたり。

わが國にて年號を建てしは孝德天皇の御代にて、建元元年の後約七百八十年に當れり

武帝儒學を興し文學を奬む

一文運の勃興。 秦の火坑以來、古書殆ど滅び盡くして、學術衰へしが、漢の興りてよりは、文敎漸く再興し來り、景帝の子武帝立つに及びて（前一四一）、大學を興し、五經（易、詩、書、禮、春秋）博士を置きて弟子を養成し、學術、德行ある者を登庸せしかば、學術再び盛となれり。この時、儒者には董仲舒、孔安國（孔子の十一世の孫）等あり、文人には司馬遷（史記の撰者）、司馬相如等出で、儒學も文學も大いに發達せり。武帝の時、年號を建てて建元といふ（前一四〇）。これ東洋に於ける年號の始なり。



司馬遷の墓及びその入口（陝西省韓城縣城の南芝川鎭に在り）

二武帝の雄圖。 されど武帝の大功業は外征にあり。帝は在

箕子古朝鮮の王となる

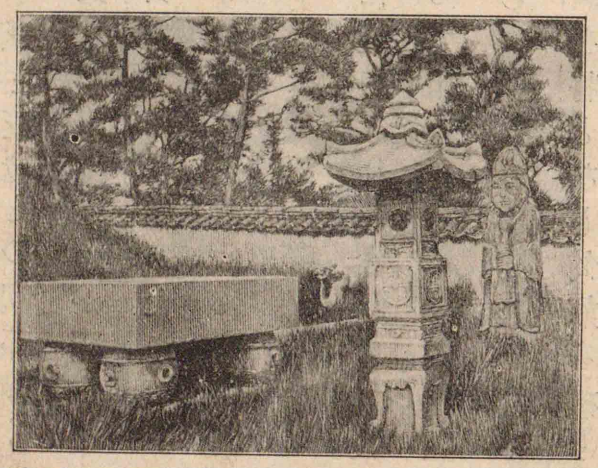
位五十餘年の間に匈奴を逐ひ、西域と通じ、朝鮮を滅し、また秦末の亂に獨立せし南越を擊ちて、その地を併せたり。

三古朝鮮。 曩に殷の滅びし時、王族箕子は朝鮮に往き、推されてその王となりて、王險（平安南道平壤府）に都せり。箕子の子孫相繼ぎてこゝに君臨せしが、箕準（箕子四十一世の孫）の世に、燕人衞滿といふ者來り、箕準を逐ひて、自立して王となれり（前一九四）。武帝の時、その孫衞右渠は漢に反抗せしかば、武帝はこれを滅して郡縣を置けり。當時、朝鮮半島の南部は馬韓、辰韓、弁韓の三大部

箕子の墓（朝鮮平安南道平壤府城の北、兎山の上に在り）

武帝古朝鮮を滅す

わが國及び三韓と漢との交通開く



漢委奴國王の印

（わが天明四年（一七八四）に筑前國志賀島にて發掘せられしもの、九州地方の酋長が漢に交通して授けられしものなるべし）

に分れしが、これより漢と三韓との關係漸く繁く、從ひて三韓と交通し來りしわが國人と漢との交通も、この頃より開け始めたり。

㊃ 匈奴。 匈奴は一時秦に逐ひ攘はれしが、漢初に冒頓（バハツール）といふ者單于（サンウ）（匈奴の天子）となり、東は東胡（蒙古の東に居りし蒙古族）を滅し、西は月氏（甘肅地方に居りしチベット族）を逐ひ、勢甚だ盛となれり。高祖曾て親征せしかど、反りて平城（山西）に圍まれて、和親を請へり。匈奴はこれより漢を侮り、連年入寇せしかば、武帝はこれを攘ひて國辱を雪がんと欲し、衞青、霍去病（クワクキヨヘイ）を將となし、匈奴を破りて、內蒙古の地を取れり。

匈奴の冒頓單于

武帝匈奴を征す

匈奴は文字なく、耕作を營まず。老者を輕んじ、殉死の風行はれ、父兄死すれば、子弟はその妻を娶る等、その風習極めて野蠻なり。されど政治、軍隊の組織はやゝ備り、單于の下に二十四人の大臣あり、またその下に千長、百長、什長あり。兵士は騎射に熟して、戰鬪力強し。

㊄ 張騫の遠征。 これより先き、月氏は匈奴に逐はれて中央亞細亞に大月氏國を建てしかば、武帝はこれと同盟して、匈奴を夾擊することを計畫し、張騫（ケン）を使者としてその國に遣はせり。張騫は途にて匈奴に捕へられ、後に逃れて大月氏に往きしかど、目的を達せず（十三年にして歸國せり（前一二六））。

張騫始めて中央亞細亞に往く（約二千五十年前）

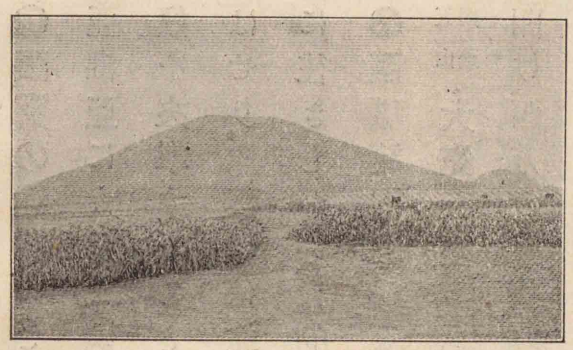
㊅ 西域諸國との交通。 されどこの遠征によりて、漢と于闐（ウテン）（天山南路）、大宛（ダイエン）、大夏（カラ）（共に中央亞細亞）、安息（アルサク）（波斯）等の西域諸國との交通始めて開け、西方の產物（葡萄、苜蓿、胡麻、柘榴等）は漸く漢土に輸入せられたり。

西域の產物の輸入

武帝また張騫の勸に從ひて、匈奴の西なる烏孫（伊犂地方に居りしトルコ種族）と婚を通じ、同盟を結びて匈奴に備へたり。

漢の高祖始めて婚を通じて匈奴と和親を圖り、後の支那の君主多くこれに倣へり。かく政略のために塞外に嫁する者を和蕃公主といふ。武帝の時に烏孫に嫁せしは、漢の王女なりしが、異域に在るを悲しみて、「吾家嫁我兮天一方、遠託異國兮烏孫王、穹廬爲室兮旃爲牆、以肉爲食兮酪爲漿、居常土思兮心內傷、願爲黃鵠兮歸故鄉。」といふ歌を作れり。（漢書外傳）

和蕃公主



漢の武帝の陵（陝西省咸陽縣城の西に在り）

第四章　西漢の衰微　東漢の興起

㊐武帝の晩年。 武帝はかく遠征を事とし、また頻に土木を起して、國費多くなりしかば、終に課稅を重くし、また鹽、酒、鐵等の專賣を行ひしが故に、晩年には天下漸く亂れんとするに至れり。

霍光の攝政

㊐宣帝の中興。 武帝死して、子昭帝なほ幼なりしかば、霍光政を攝し、務めて民力の休養を計れり。昭帝の後、宣帝立ち、意を政治に用ゐしかば、良吏多く出で、天下頗る泰平なりき。

鄭吉始めて西域都護となる（約二千年前）

㊁匈奴の衰微。 宣帝はまた烏孫と協力して大いに匈奴を破りしかば、もと匈奴に屬せし西域三十餘國は皆漢に降り、漢は鄭吉を西域都護に任じ、烏壘城（天山南路）に居りて、これを統べしめたり（前六〇）。これより匈奴全く衰へ、加ふるに內亂起り、郅支、呼韓邪の二單于に分れて、相爭へり。呼韓邪は漢に來降せしが、郅支は後に漢兵と戰ひて敗死せり（前三六）。

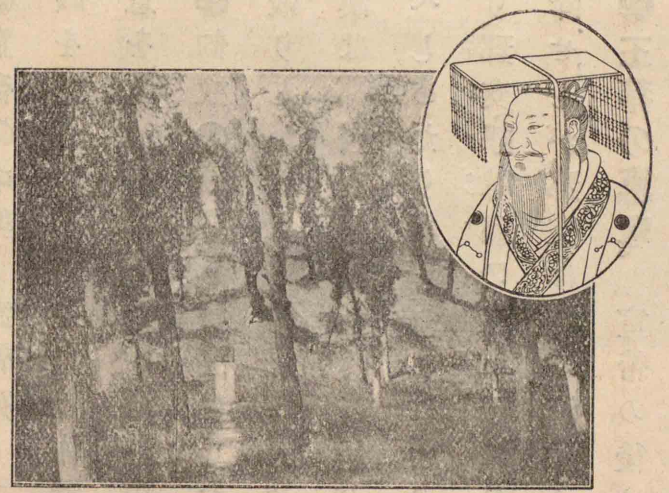
匈奴の二分

外戚の專橫

㊂王莽の簒奪。 宣帝の後は概ね暗君にして、漢業衰へたり。平帝（宣帝の曾孫）の世に外戚王莽政を攝し、表に恭儉を裝ひて、次第に人望を收め、遂に平帝を弑して、自ら帝位に卽き、國を新と

漢の中絶（約千九百年前）

號せり(八)。されど法令煩はしく、租稅重かりしかば、間もなく叛亂四方に起りて遂に王莽を斃せり。新は僅に十五年にして滅べり。



東漢の光武帝及びその陵（像は元代の石刻に據る。陵は河南省孟津縣鐵謝傳に在り）

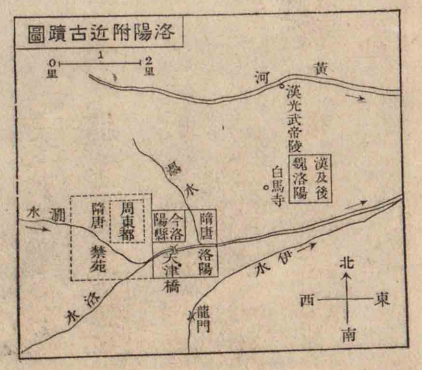
光武帝の一統

四 漢の再興。 時に漢の皇族劉秀もまた兵を春陵（シヨウリヨウ）湖北に起ししが、王莽の大軍を昆陽河南に破りてより、威名高く、遂に衆に推されて帝位に卽き、都を洛陽周の洛邑に奠めたり(二五)。これを東漢の光武帝といふ。ついで諸將を遣り、所在の群雄を征服して、天下を一統せり(二六)。

五 光武の施政。 光武帝は卽位の後、專ら意を內治に用ゐ、國政を親らして政權の外戚に移るを防ぎ、また王莽の時に、諂諛（ナンユ）（ツラヒ）風をなしたれば、教化を盛にして名節を勵ませり。その子明帝の時に、佛教は大月氏より支那に傳れり。

第五章　佛教の弘通

一 印度の古代。 今より四千餘年前に、アリヤン族の一派は中央亞細亞より南下して印度に入り、先住のドラーヴィダ種族を南方に逐ひ、次第にその北半部を占領して、こゝに文化を扶植せり。その後、國民中に僧族、士族、平民、奴隸の四種姓



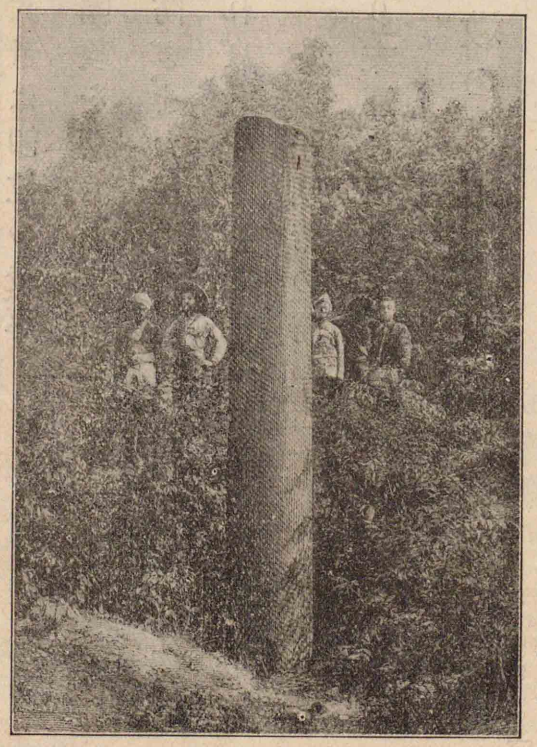
印度の四種姓

佛教は波羅門教から生ずる。王は釋迦が佛陀を師事した。佛教は東に傳播し、大月氏が多くの東に佛教を傳へ、支那は勿論、支那から朝鮮、更に日本に傳る。

を生じ、士族は政治、軍事に、平民は實業に、奴隷は諸種の賤役に從ひ、僧族は最高位を占めて、宗教と學術とを掌れり。

㊁僧族の專横。 當時の宗教は波羅門教にして、全く四種姓の差別を基礎とせるものなれば、僧族は次第に宗教を私して專横を極め、他の三種姓の者はその壓制に苦しめり。

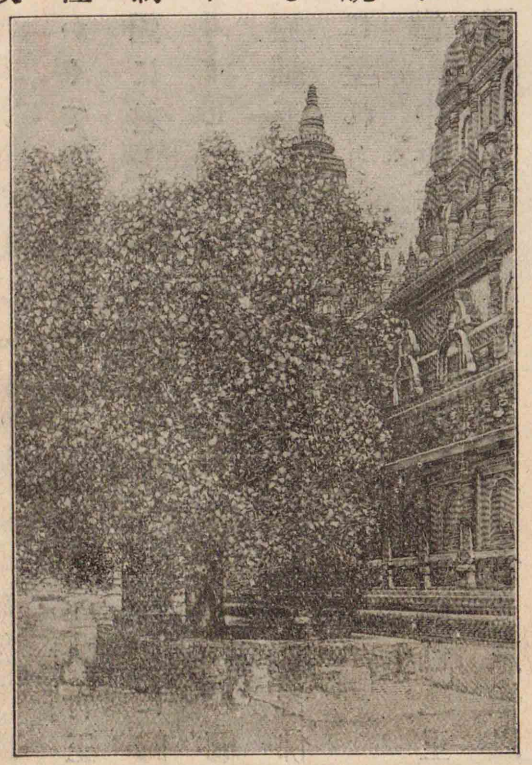
㊂釋迦。 この時、中印度の迦毘羅城（カピラバストー）主の子に悉達（シッダルタ）といふ人生まれ（前五六五頃）、社會の腐敗と人



阿育王の建てし釋迦降誕記念碑

生の無常とに感じて、衆生濟度（シユジヤウサイド）の念を起し、遂に宮を棄てて山に入り、解脱（ゲダツ）の法を求めて佛陀（ブダー）となれり。所謂釋迦（シヤカ）これなり。

㊃佛教の興起。 是に於て釋迦は佛教を開きて、平等主義を唱へ、一切の衆生は種姓の差別なく、皆正道を行ひて、解脱することを得べしと教へたり。されば從來僧族の壓制に苦しみたる諸種姓は、皆この新宗教



佛陀伽耶の菩提樹

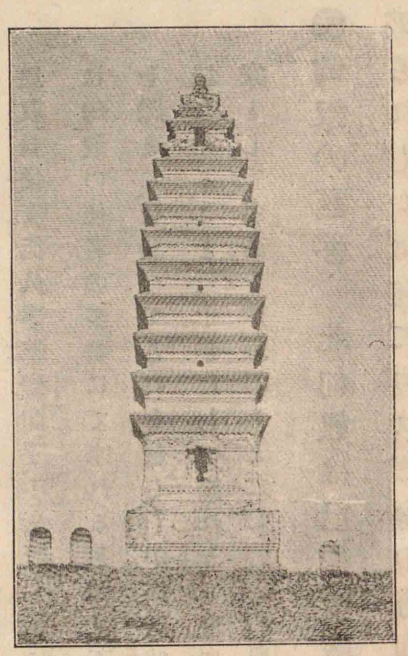
（釋迦はその三十五歳の時、佛陀伽耶（ブダガヤ）附近の菩提樹の下にて覺を聞きて佛陀となれり。今もその地に菩提樹ありて、佛教徒はこれを崇拜す）

を歡迎せり。

㊄阿育王の出世。 かくて佛教は次第に行はれしが、阿育王が中印度の摩揭陀國に君となるに及びて(前二七二頃)、佛教に歸依し、その弘通に盡力せしかば、西はシリヤより東は今の緬甸に至り、北は中央亞細亞より南は錫蘭島に至るまで、皆佛教の感化を受くるに至れり

㊅迦膩色迦王の出世。 中央亞細亞の大月氏は、迦膩色迦王の時(東漢の初)に至りて國勢頗る強く、北、西兩印度を併せ、葱嶺以東をも領せしが、王もまた佛教の弘通に力を用ゐしかば、大月氏國は佛教流行の中心となれり。

㊆佛教の傳來。 この時、東漢の明帝は蔡愔を大月氏に遣りて、佛教を求めしめ、大月氏より佛經と高僧迦葉摩騰とを得て、始めて洛陽に白馬寺を建てたり(六七頃)。これより後、外國僧侶の支那に來りて布教するもの多く、佛教は次第に隆盛に赴けり。



白馬寺の塔
(河南省洛陽縣城の東に在り。後世に修築せしものにて、漢代の舊にあらず)

佛教の支那に傳來せしは釋迦の成道後約六百年に當れり

第六章　東漢の極盛

㊀南北匈奴。 曩に漢に歸服せし匈奴は、漢の中絶すると共に、また北邊を擾せり。當時、匈奴は南北の二部に分れ、南匈奴は早く東漢に歸服せしかど、北匈奴は西域諸國を從へて屢入寇せしかば、明帝は竇固等をして北匈奴を征せしめ(七三、

班超の西域都護に任ぜられしは西漢の鄭吉の後百五十年に當る

また班超を遣りて、西域諸國を經營せしめたり。

㈢班超の遠征。 班超は首尾よく西域諸國を威服し、やがて西域都護に任ぜられて、龜茲（天山南路）に鎮せり（九）。されど班超の後は、都護その人を得ずして、西域また叛きしかば、漢は遂に西域都護府を廢せり（一〇七）。

班超西域都護となる

班超もと家貧しくして、筆耕を業とせしが、筆を投じて、「大丈夫當立功異域、以取封侯、安能久事筆硯間乎。」と奮慨し、遂に使者となりて西域に往けり。途に匈奴の使者の多勢にて來れるを聞き、「不入虎穴、不得虎子」といひて、從者を勵まし、夜襲ひてこれを殺ししかば、西域諸國は皆その勇猛に服せり。西域に在ること三十年にして歸れり。班超の兄班固は歴史家（漢書の撰者）、文章家として名高く、妹班昭もまた婦德と文學とを以て世に重んぜらる。

班固及び班昭

㈣匈奴の西移。 北匈奴は已に西域諸國を失ひ、また屢漢に破られしかば、遂にカスピ海の方面に遁れ去り、後にフン

匈奴の羅馬帝國に侵入せしは第五世紀の中頃にて、東漢の時の西方移轉より約三百五十年後に當れり

大秦王安敦

大秦商人の通商（約千七百五十年前）

ハンスといふとして西洋史上に現る。匈奴の移轉と共に、東胡の一種なる鮮卑は、東より移りてその地を占領し、次第に強大となれり。

㈣大秦との交通。 班超の西域にありしとき、大秦國（羅馬）の強大なるを知りてこれと交通せんことを望めり。されど兩國の間に介在せる安息國に妨げられて、久しく目的を達せざりしが、後に東漢の末に至り、大秦王安敦は使を發して海路より東漢に通ぜり（一六六）。爾來三國、西晉の頃まで、大秦の商人等は今の東京地方に來りて、貿易に從事せり。

當時大秦との貿易に於ける重要品は、支那の絹なりき。絹は上古より波斯

養蠶術支那より歐洲に傳る

印度等を經て、歐洲に傳り、大いに希臘羅馬の富民の嗜好に投じ、一時は黄金と絹と同一の重量を以て交易せりといふ。後に五五〇年の頃、養蠶の業始めて支那より歐洲に傳り、次第に隆盛に赴けり。

第七章　東漢の末路

東漢の衰微

㊀外戚の專横。 光武帝は特に外戚の禍を防ぐに注意せしが、その曾孫和帝幼にして即位し、竇太后政を攝するに及びて、外戚始めて勢を得、和帝の後も幼主多くして、外戚愈專横を極めたり。その後、桓帝宦者の力を借りて、外戚梁氏を誅せしより、宦者は功を負ひ、外戚に代りて政權を握れり。

黨錮

㊁宦者の跋扈。 然るに名節を尚べる當時の學者等、盛に宦者に反抗せしかば、宦者怒りて、これらの學者を指して黨人となし、皆これを禁錮せり(一六七)。これを東漢の黨錮といふ。かくて宦者の跋扈愈甚だしかりしかば、袁紹といふ人遂に悉く宦者を誅戮せり(一八九)。この時董卓も宦者を誅するを名として洛陽に來り、獻帝を脅して西の方長安に據りしが(一九〇)、間もなく殺されたり。

宦者の誅戮
袁紹と董卓

㊂群雄の割據。 獻帝西に移りてより、天下殆ど無政府の有樣となり、群雄四方に割據せしが、中にも曹操最も智略に富み、獻帝を許(河南)に迎へ、これを擁して次第に群雄を征服し、遂に江北を平げて江南に向へり。漢の景帝の裔に劉備といふ人あり、曹操に追はれて、江南に入り、孫權の保護を求めたるに、孫權これを納れ、力を協せて曹操の軍を赤壁(湖北)に破りしかば、曹操は遂に北に歸れり(二〇八)。

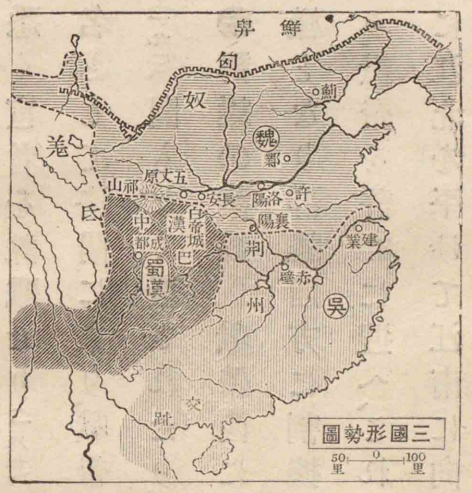
曹操獻帝を擁して四方を征服す

赤壁の戰

天下の三分

曹丕東漢を簒ふ（約千七百年前）

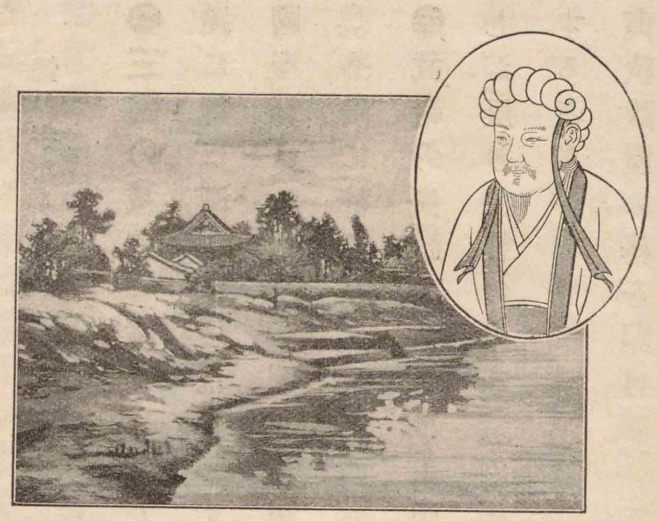
四 東漢の滅亡。 その後、劉備はまた孫權の助を得て、巴蜀、漢中の地を定めしかば、揚子江以北は曹操に、江南は孫權に、西方一帶は劉備に歸し、天下三分の形勢成れり。この時、獻帝は曹操の子魏國を洛陽に建てたり（三二〇）。漢は曹丕（ヒ）迫りて位を己れに禪らしめ、東西を併せて四百六年にして滅べり。是に於て劉備は蜀漢國を成都（四川）に建て、ついで孫權もまた吳國を建業（江蘇省江寧縣）に建てたり。



第八章　三國及び西晉

一 三國の攻爭。 蜀漢の劉備は一時吳と荆州（湖北、湖南の兩省の地）の地を爭ひしが、その子劉禪（ゼン）嗣ぐに及びて、諸葛亮（孔明）これを輔け、まづ吳と和し、力を專らにして魏を伐つこと、前後七年。魏將司馬懿（イ）よく防ぎしかば、諸葛亮は志を遂げずして死せり（三三四）。

諸葛亮はもと亂世を避けて山野に遯（ノガ）れしが、有爲の材なりしかば、時人これを臥龍と呼べり。劉備その名を聞き、三度その廬を訪ひてこれを臣とすることを得たり。蜀漢が西方に偏在しながら、よく魏、吳と對立し得たりしは、一に諸葛亮の力なり。その魏を征伐する際、劉禪に上りし前後二回の出師（スイ）表



諸葛亮及びその祠（像は元代の石刻による。祠は陝西省沔縣城の東に在り。諸葛亮の魏を伐ちし時久しく駐軍したる處といふ）

表の如きは、至誠忠烈、讀者を感泣せしむ。諸葛亮の死せし時、魏軍これを擊たんとせしが、蜀漢軍は諸葛亮のなほ生存せるが如く裝ひしかば、魏軍畏れて退却せり。されば時人語りて「死諸葛走生仲達」といへり。仲達は司馬懿の字なり。

西晉の武帝天下を一統す（約千六百三十年前）

㈡三國の滅亡。 諸葛亮死してより、蜀漢は次第に衰微して、遂に魏に滅され（三六三）、魏もまたついで司馬懿の孫司馬炎に國を簒はれたり。司馬炎更に吳を併せて天下を一統し（三八〇）、洛陽に都せり。これを西晉の武帝といふ。

武帝夷狄跋扈の基を開く

㈢武帝の失政。 武帝は、天下一統の後、子弟を要地に分封せしが、反りて後の患を遺し、また當時塞外種族の內地に雜居する者多かりしに、武帝はこれが豫防を怠りしかば、やがて夷狄跋扈の基を開けり。

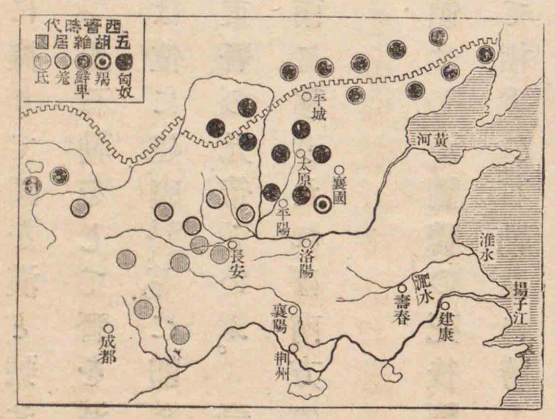
八王の亂

清談の流行

㈣西晉の衰亂。 武帝死し、子惠帝暗愚なりしかば、趙王、齊王等の八王、政權を握らんとて代る〳〵爭へり。この內亂に加へて、當時老莊の學行はれ、天下の人士は清談（世務以外の哲理を談ずるをいふ）に耽りて、國事を顧みざりしかば、內地に雜居せる夷狄はこれに乘じて蜂起し、遂に西晉を滅すに至れり。

第九章　五胡及び東晉

㈠晉の南渡。 兩漢三國、西晉の間、塞外種族の支那內地に移住する者多く、中にも匈奴、鮮卑、氐（テイ）、羌（キヤウ）（氐羌ともにチベット族）最も强大なりき。晉の衰ふるに及びて



匈奴の興起

西晉の滅亡（約千六百年前）

南方文化の開發

劉曜と石勒

氐の興起

前秦の苻堅江北を一統す

匈奴の酋、劉淵まづ亂を起し、平陽（山西）に據りて國を漢と號せり。子劉聰の時、一族劉曜及び羯（匈奴の別種）の人石勒（ロク）をして晉を滅さしめしかば、司馬懿の曾孫司馬睿（エイ）は位に建康（もとの建業）に卽き（三一七）、僅に江南の地を保てり。これを東晉の元帝といふ。晉の南渡と共に、中國の名族もまた江南に移りたれば、南方の文化は、これより大いに開發せり。

㈡ 前秦の興隆。 漢は一時江北を占領せしが、劉聰の死後、劉曜は前趙國を、石勒は後趙國を建てて相爭ひ、石勒遂に勝ちて江北を一統せしかど、その死後、間もなく領土分裂せり。後趙の亂れし時、氐酋苻健は關中に據りて、前秦王と稱せり。その從子苻堅に至り、王猛を用ゐて鮮卑、匈奴、羌の諸種族を降し、塞外の六十餘國をも朝貢せしめ、遂に江南を併呑せんと欲して、九十萬の大軍を起して東晉に侵入せり。

南渡後の東晉

謝安（像は元代の石刻による）

晉將謝玄大いに苻堅を破る

後魏の太武帝江北を一統す

㈢ 淝水の戰。 東晉は南渡の後、內亂多くして、國勢振はず、苻堅の來侵するに及びて、舉國震駭（シンガイ）（オドロキサワグ）せしが、その相謝安は從子謝玄をして兵八萬を率ゐて淝水（ヒ）（安徽）に逆擊し、大いにこれを破らしめしかば、苻堅は纔に身を以て逃れ還れり（三八三）。

㈣ 後魏の興起。 かくて前秦は、淝水の敗後、久しからずして衰滅し、鮮卑、匈奴、氐、羌の諸族、各一方に割據して、國を建てしが、鮮卑の拓跋（タクバツ）珪（クイ）もまた後魏國を建て、平城（山西）に都せり（三九八）。これを道武帝といふ。後魏の勢日に强大となり、道武帝の孫なる太武帝の時、遂に江北諸國を一統せり（四三九）。

支那南北兩大國に分る（約千五百年前）

㊄東晉の滅亡。東晉も、淝水の戰後、內亂相つぎしが、その相劉裕遂に國を簒ひて、帝位に建康に卽けり（四二〇）。これを宋の武帝といふ。後魏の江北一統の後は、支那は南北兩大國に分れ、江北を北朝、江南を南朝と稱す。南朝と北朝とは、風尙を異にし、學術、文藝にもおのづから南北の相違を生ぜり。

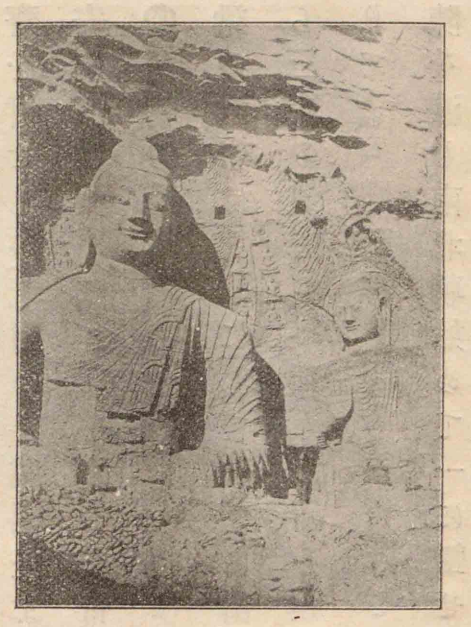
㊅五胡十六國。西晉の末より、塞外種族が江北の地に相攻爭すること百三十年に餘り、その間に興亡せし列國十六（漢前趙もこれに合す）、成（また漢といふ）、後趙、前涼、前燕、前秦、後燕、後秦、西秦、後涼、南燕、西涼、南涼、北涼、大夏、北燕、胡族五（匈奴、羯、鮮卑、氐、羌）さればこれを總稱して五胡十六國といふ。

第十章　南北朝の對立

㊀後魏の極盛。三國以來、西域諸國の支那に通ずるもの稀

雲岡の石佛（山西省大同縣城の西、雲岡の石窟寺に在り。石佛は皆後魏時代の作に係る）

後魏と柔然との關係



なりしが、後魏の太武帝は略江北を一統するに及びて、西域諸國と通じ、また大舉して柔然を擊ち破れり。柔然は匈奴の別種にして、漠北に據り、道武帝の時より屢後魏と爭ひしが、是に至りて太武帝に破られ、その勢衰へたり。太武帝はまた宋を擊ちて地を拓き、後魏の國勢益〻强大となれり。

㊁孝文帝の改革。後魏はもと夷狄より起り、國俗野鄙なりしかば、太武帝の玄孫孝文帝は、これが改良を企て、都を洛陽に遷し（四九四）、辮髮、胡服、胡語（鮮卑語）を禁じ、その他、朝廷の儀式、制

後魏の國力漸く衰ふ

度等すべて漢風を摸せり。されば學藝、文化は進歩せしかど、同時に華奢、柔弱の風行はれて、國力漸く衰へたり。

後魏東西に分る

㊂北朝の沿革、隋の興起。 北朝は孝文帝の後、内亂相つぎ、後魏遂に分れて東魏、西魏となれり(五三四)。東魏はやがて北齊に簒はれ、西魏もまた北周(鮮卑)に簒はれたり。北周は後に北齊を併せしが、北周の外戚楊堅また北周を簒ひて、帝位に長安に卽けり(五八一)。これを隋の文帝とす。

梁の武帝

南北朝の合一(約千三百三十年前)

㊃南朝の沿革、隋の一統。 南朝は宋滅び、齊を經て、梁に至る。梁の武帝は博學にして、仁慈に富みしが、佛教に心醉して、自ら三寶の奴とさへ稱し、武備を顧みざりしかば、後に内亂起りて(五四八)、國瓦解し、間もなく陳これに代りしが、隋の文帝は陳を滅し、南北朝始めて一に歸せり(五八九)。

梁の武帝及び同泰寺の趾

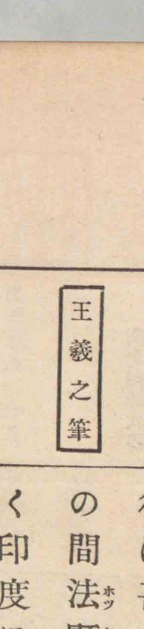
(像は元代の石刻に據る。同泰寺は武帝の建立せし所、武帝の三たび捨身せしはこの寺なり。江蘇省江寧縣城内に在り。今雞鳴寺と稱す)

南北朝時代の君主の悲境

㊄南北朝時代の大勢。 南北朝の對立すること百五十一年。この間、兩朝いづれも二十餘君を出ししが、その大半は廢弑に遭へり。以て當時の紛亂の一端を察すべし。

東漢の末に曹丕が獻帝に迫りて位を禪らしめ、堯舜の禪讓を假りて天下の耳目を蔽ひしより、魏、晉南北朝を經て、北宋に至るまで、約八百年の間、簒奪する者概ねこの方法に倣へり。されば干戈を動かさずして革命行はれ、その表面は無事なれど、内實には迫害毒弑等の罪惡多く、南朝の宋の順帝(武帝の曾孫)の如きは「願後身世々勿復生天王家」とさへいへり。以て當時の支那の君主の境遇を察すべし。

㊅佛教の流行。 されど東晉より南北朝にかけて、佛教の流行は甚だ盛にして、この間法顯、宋雲等は遠く印度に往きて法を求め、羅什、達磨等は外國より來りて教を說けり。かく佛教の流行したる結果として、繪畫、彫刻等は大いに進歩せり。書道の神と呼ばるゝ王羲之、畫家の聖といはるる顧愷之の如き、皆東晉時代の人なり。



王羲之筆

顧愷之筆神女（宋時代の原圖を摸寫せしものなるべしといふ）

㊆高句麗、百濟、新羅。 西漢の末に鴨綠江の上流地に高句麗（また高麗）といふ國起りて（前三七）、次第に古朝鮮の地を略し、これと前後して百濟は馬韓の地を統べ、新羅は辰韓、弁韓を併せたり。かくて三國鼎立の姿をなしし、神功皇后の時、わが國は新羅を征服し（三〇〇）、百濟を保護國とし、ついで故（モト）の弁韓（即ち任那）の地に日本府を建てて朝鮮半島を統治せり。

高句麗の建國

三國鼎立

佛教百濟を經てわが國に來る（約千三百五十年前）

㊇佛教の東漸。 高句麗は始めて佛教を前秦より受け（三七二）、更にこれを新羅に傳へ、百濟は佛教を東晉より受け（三八四）、更にこれをわが國に傳へたり（五五二年、欽明天皇の御代）。佛教の傳來と共に、支那の文化は朝鮮半島を經て、次第にわが國に輸入せられたり。

佛教は漢に入りてより三百年餘を經て朝鮮に傳り、更に百七八十年を經て百濟よりわが國に來れり

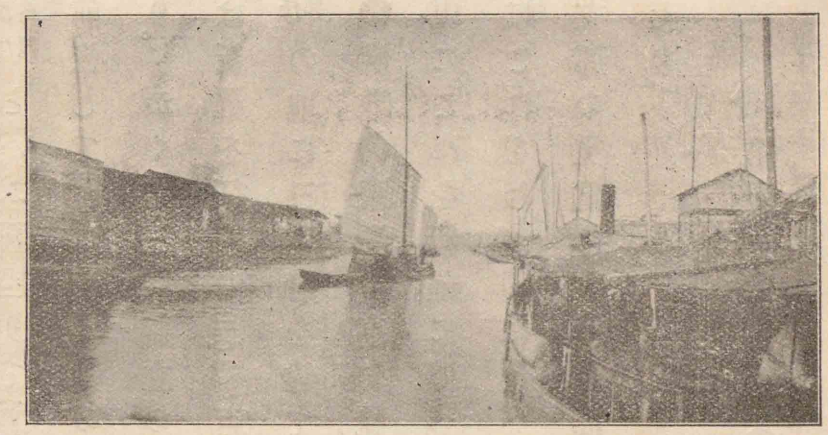
第十一章　隋の興亡及び唐の初世

煬帝大いに土木を興す

運河

（江蘇省江都縣城附近の現景にして、煬帝の多く游幸せし處、この運河は蓋し當時盛に利用せられしものなるべし）

運河

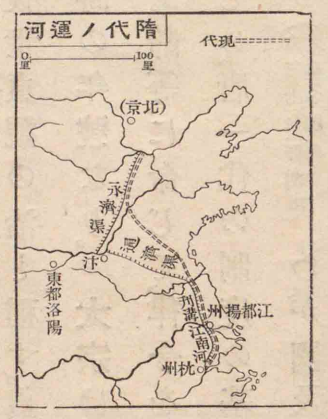


㊀煬帝の豪奢。 隋の文帝は、天下を一統せし後、力を政治に用ゐて國民を愛養せしが、その子煬帝に弑せられたり（六〇四）。煬帝は性豪奢を好み、盛に土木を興し、所在に離宮を築きて遊觀に備へ、運河を開きて江南と河北との水路を通ぜり。されば後には丁男不足して、婦人を使役するに至れり。

運河は文帝の時より已に幾分開鑿せられたり。もと運漕を目的とせしが、煬帝は遊觀の便宜をも圖りしなり。煬帝の時に通濟渠（黃河、淮水間）、刊溝（江、淮間）永濟渠（黃河以北）、南運河（揚子江以南等）を開きしが、大抵故の水道を利用せしものにして、その水道も今の運河と異なる所多し。

わが國始めて隋と修交す（約千三百年前）

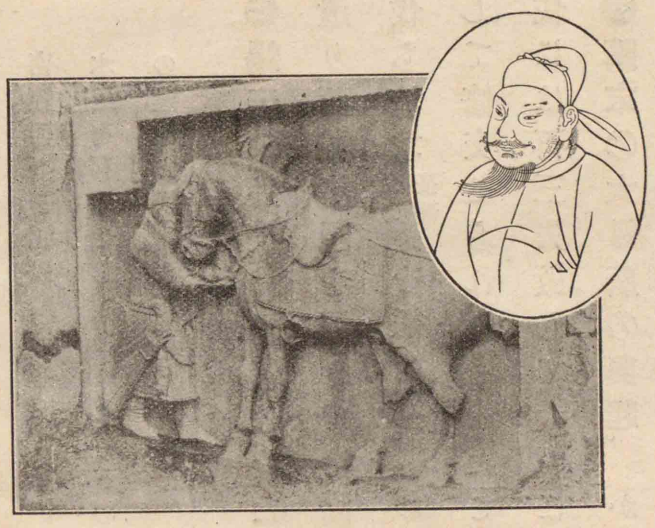
㊁煬帝の外征。 煬帝はまた使者を遣り、西域諸國を招きて、洛陽に互市を開かしめ、林邑（今の柴棍附近）を伐ち、流求（今の臺灣）を征せり。わが推古天皇の御代に、國使を派して修交せられしも、またこの時なり（六〇七）。たゞ高句麗征伐には再三失敗して、大いに國力を疲弊せしめたり。



㊂隋末の大亂、唐の興起。 かねて苦役に惱める國民は、この失敗を機として、四方に亂を起せり。李淵もその子李世民と共に兵を擧げ、長安に入りて帝位に卽けり（六一八）。これを唐の

高祖とす。この時煬帝は既に江都（蘇江）にてその下に弑せられ、李世民は四方を平定して天下を一統し、ついで高祖の禪を受けたり。これを太宗とす。

李世民天下を一統す（約千三百年前）



唐の太宗及びその陵前の遺物

（像は元代の石刻に据れり。陵は陝西省醴泉縣城の北に在りて、その享殿の兩廡に太宗の乘用せし六駿馬の石像を置く。皆唐代初期の刻に係る。こゝに掲ぐるはその石像の一つなり）

四 貞觀の治。 太宗は非常の英主にして、房玄齡、杜如晦（クワイ）等の賢相、李靖（セイ）、李勣（セキ）等の名將を用ゐしかば、國内泰平にして、國威外に輝けり。後世貞觀（ヂャウグワン）の治と稱す。貞觀は當時の年號なり。太宗はまた房玄齡等に命じて、律令を撰定せしめ、唐一代の制度の基を置けり（六三七年、舒明天皇の御代）。わが國及び朝鮮の古代の制度は、多く唐を學びしものなれば、次に當時の制度の大要を述ぶべし。

わが國にて大寶の律令を撰定せしは、文武天皇の御代にて、太宗の時より六十餘年後なり

第十二章　唐の制度

中央政府の官制

三省、六部

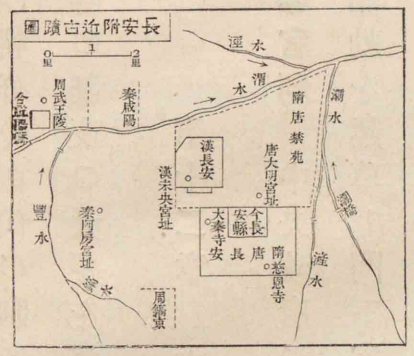
地方の官制

一 官制。 中央政府には、尚書、中書、門下の三省あり。中書省は詔勅を起草し、門下省は詔勅を審査し、尚書省にて詔勅を施行す。天下の大政は三省の長官（中書令、門下侍中、尚書令）會同してこれを定む。尚書省の下に吏（官吏の進退を掌る）、戶（戶口の調査と租稅の徵收とを掌る）、禮（禮儀及び教育を掌る）、兵（軍事を掌る）、刑（刑律を掌る）、工（工藝を掌る）の六部を置き、各部に尚書ありて、天下の行政事務を分擔す。地方には、天下を十道に分ち、道の下に州と縣とあり。州には刺史、縣には令を置きて、各その地方を治めしむ。

㈡田制、稅法。 周代井田の法は、戰國の頃より次第に壞れ、富豪の兼併日に盛となり、貧民困窮せしかば、西漢より南北朝にかけて歷代これが救濟策に苦心せしが、唐の時には均田法を用ゐ、丁男には、官田百畝を授け、その收穫中より粟二斛を上納せしむ。これを租といふ。その他、丁男はその土地の物産を獻じ、また毎年二十日間、國家のために力役に服し、若しくはその代償として絹を納む。前者を調といひ、後者を庸といふ。租、庸、調の三種は國庫のおもなる財源なりき。

均田の法

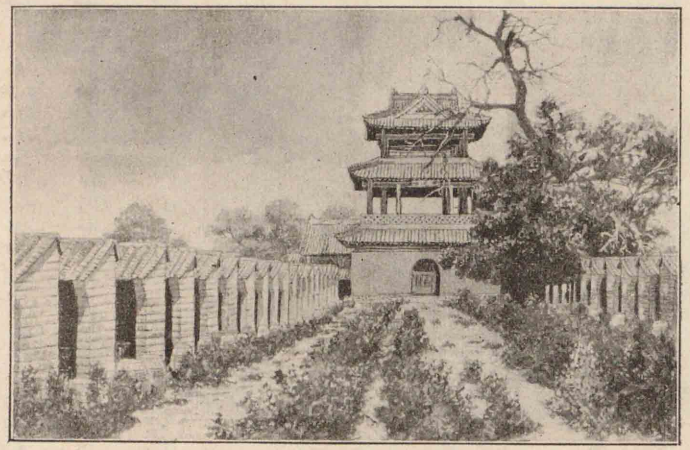
租、庸、調



㈢兵制。 天下に六百三十四府を置き、毎府大抵千人の常備兵を置く。天下の丁男の三分の一以内を府兵に充つ。

府兵はその租、庸、調を免ぜらるゝ代に、毎年冬期に武藝を練習し、また衞士として番上し、宮城の守護に當る者とす。

唐代の官吏登庸法



清時代の官吏登用試驗場

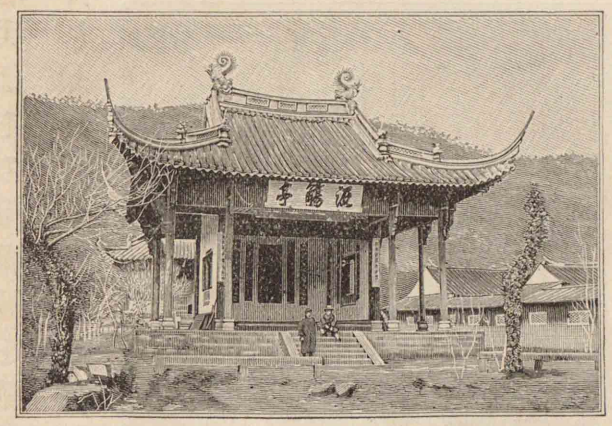
（北京の內城に在り。正面を明遠樓といひ、試驗を監視する處なり。その左右に列せるは受驗者を收容すべき試驗室にて、すべて一萬人を收容するを得べしといふ）

㈣學制。 京師に國子學、大學、四門學等の學校を置き、地方にも各州、縣に學校を置く。この學校出身者を生徒といひ、別に州、縣の檢定試驗の及第者を鄕貢といふ。歲毎に生徒、鄕貢を尙書省に會してこれを考試し、合格者を官吏となす。その科目は、經學を主とする明經には經書（易、詩、書、三禮、三傳等）の義理を問ひ、文學を主とする進士には詩賦の制

作を試む。當時日本、高句麗、百濟、新羅、吐蕃の諸國より唐に來り學ぶ者多く、學校の盛なること前古無比と稱せらる。

官吏登庸の法は唐代より明、清時代まで大差なし。明、清時代には子、卯、午、酉に當る年毎に各省にて鄉試を行ひ、その合格者を擧人といふ。その翌年に全國の擧人を北京に會して、省試と殿試とを行ひ、殿試の合格者を進士といふ。されど清末に外國の新學歡迎せらるゝに至りて、この登庸法は漸く廢止せられたり。

㊄年中行事。 正月元旦には屠蘇酒を酌みて新年を迎へ、その七日は人日と稱して七菜を食し、三月三日は上巳と稱して曲水流觴の遊を催し、



蘭亭の流觴亭
（蘭亭は浙江省紹興縣城の西南三里許にあり、東晉の永和九年（三五三）に名士王羲之謝安等こゝに會して曲水流觴の遊をなししより名勝の區となれり。今その遺蹟について一亭を構へ、流觴亭といふ）

官吏登庸法

四月八日には灌佛の式あり。五月五日の端午には艾糕を食し、香草湯に浴す。七月七日の七夕には婦人は乞巧として裁縫、手藝の上達を天に祈り、その十五日は中元と稱し、盂蘭盆を行ひて諸佛に供養し、九月九日の重陽には、山に登りて菊酒または茱萸酒を飲み、歲終の除夕には追儺を行ひて、疫癘を攘ふ。これらの年中行事は秦漢時代より漸く發達し、唐代に完成して、現時にも行はれ、またわが國、朝鮮にも傳れり。

第十三章　唐の外國經略

突厥の勃興（約千三百五十年前）

㊀突厥。 突厥はもと金山（阿爾泰山）附近を占領して柔然に屬せしが、南北朝の末に獨立して柔然を滅し、都斤山（外蒙古）を根據地とし、次第に今の內外蒙古、新疆、中央亞細亞等を併せ、また

北周、北齊より歳幣を貪り、當時亞細亞第一の強國となれり。後に國は東西に分れ、その東突厥は唐初に内亂ありて、所屬の部落漸く離叛せしかば、太宗は李靖、李勣を遣りてこれを滅せり(六三〇)。

唐の太宗東突厥を滅す

突厥の風俗

突厥は君主を可汗(カカン)といひ、その妻を可敦(カトン)といふ。野蠻にして文字なく、法律備らず、可汗に背き、または人を殺しし者は死刑に處し、人を傷つけし者にはその輕重に應じて、婦女もしくは馬を以て辨償せしめ、盗せし者には十倍の辨償を命ず、父兄死すれば子弟その妻に配すること、匈奴に同じ。

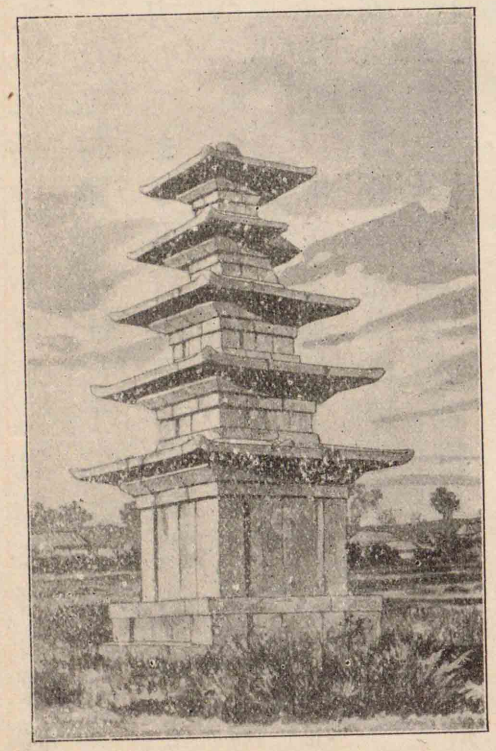
唐の高宗西突厥を滅す

(二)西突厥。 西突厥は、千泉(センセン)(中央亞細亞)を根據地とし、東羅馬と力を協せて波斯(ペルシヤ)を侵し、國勢強盛なりしが、唐の高宗(太宗の子)の時、蘇定方を遣りてこれを平定せしめたり(六五七)。

(三)波斯、大食。 波斯は曩に安息國を滅して(三二六)興り、一時強大なりしが、後に西突厥に苦しめられ、ついで大食(タージ)國に攻め滅されたり。その王族は唐の保護を求めて恢復を志せしが、やがて長安に客死せり。大食は唐の初に阿剌比亞(アラビヤ)の摩訶(マホ)末(メット)の興ししサラセン國にて、宗教の力に依りて四方を攻略し、遂に波斯を併せ、高宗の時、始めて使を唐に通ぜり(六五一)。

大食波斯を併す

(四)新羅の一統。 朝鮮半島には高句麗、百濟、新羅の三國鼎立せしが、後に新羅の勢漸く強大となり、日本府を陷れ、百濟を侵せり。百濟は



大唐平百濟國碑塔
(朝鮮忠清南道扶餘郡に在り。六六〇年に建てたるもの)

百濟及び高句麗滅ぶ（約千二百五十年前）

高句麗と同盟してこれに當りしかば、新羅は頻に唐の保護を請へり。唐の太宗は高句麗を親征して失敗せしが（六四五）、高宗の時、新羅と協力してまづ百濟を平げ（六六〇年、齊明天皇の御代）、ついで高句麗を滅せり（六六八）。かくて唐は平壤に安東都護府を開きて、その地を統べしが、間もなく新羅叛きて平壤以南の地を略せしかば、唐は安東都護府を遼東に移せり（六七六）。

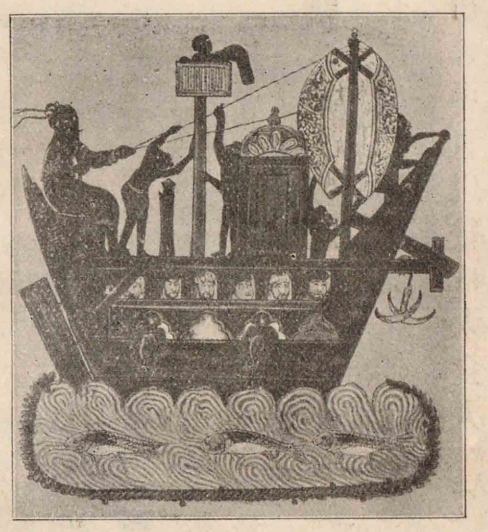
わが國と唐との交通（約千三百年前）

㊄日本。 わが國は已に隋と修交せしが、唐興るに及びて、舒明天皇の御代（六三〇）に國使を太宗の廷に派し、これより歷代遣唐使を置き、盛に使聘を通じて、その制度、文物を將來し、後に唐の末、宇多天皇の御代（八九四）に、遣唐使を停めしまで、僧侶、學生の唐に留學する者頗る多かりき。

㊅六都護府の設立。 唐の太宗、高宗は主として東、北、西の三方面を經營し、南方に兵を用ゐざりしが、國威加るに從ひ、今の印度支那、南海の諸國皆來貢し、政令の及ぶ所頗る廣大となりしかば、唐は左の六都護府を建ててこれを統治せり。

都護府	所在地	所轄區域
一安東	初め朝鮮の平壤に治し、後、遼東城に移る。	滿洲及び朝鮮
二安北	初め都斤山の邊に治し、後、陰山の麓に移る。	外蒙古
三單于	山西省大同縣の西北なる雲中城に治す。	內蒙古
四北庭	天山北路の庭州に治す。今の迪化縣なり。	天山北路
五安西	初め高昌に治し、後、龜茲に移る。今の庫車縣なり。	天山南路及び中央亞細亞
六安南	嶺南の交州に治す。今の佛領東京の河內なり。	南海諸國

㊆大食人の通商。 かくて唐の國威の張ると共に、外國との交通は發達し、支那の商船、時に印度洋、波斯灣に往來せしが、唐の中世以後は、大食人（アラビヤ人）の來航多く、彼等は南海を經て、



大食の商船
西紀十世紀の頃に南海を往來せし商船にして、當時のイスラム教徒の描きしもの

外商多く廣府に來る

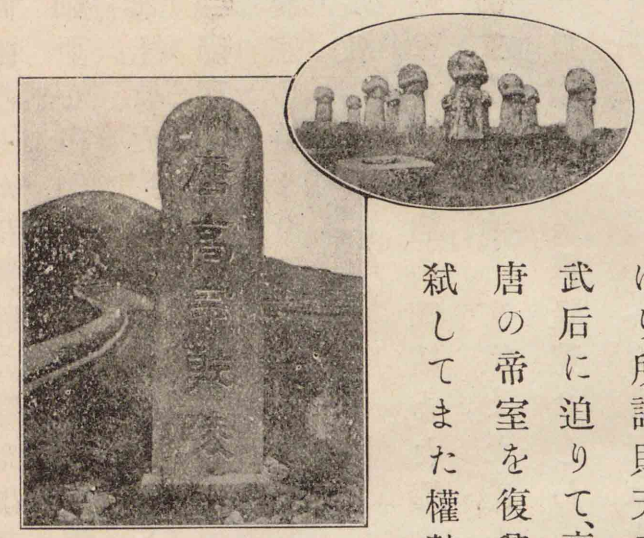
交州（東京）、廣州（廣東）の諸港に犀角、象牙、胡椒、香料等を輸入し、唐は市舶使を置きて、これら外國商船を取締れり。大食人は、この後歐人東漸の頃まで、久しく南海貿易の主權を握れり。

廣州はまた廣府と稱せしかば、外國人はカンフと呼べり。當時この地に滯在せし外商、大食人、波斯人、猶太（ユダヤ）人、耶蘇教徒を併せて十二萬人に及びきといふ。唐末の騷亂にて、廣府の貿易は一時衰微せしが、宋時代には復活して、一層盛大を極めたり。

第十四章　唐の中世

則天武后

唐の高宗の陵及び陵前の諸蕃酋
（陝西省乾縣城の北梁山に在り。高宗の死せし時諸蕃酋の來り會するもの六十餘人。その石像を作りて陵前に置けり。圖に示すは東側に立てる諸蕃酋の石像にして、もとその背に誌しきといふ蕃酋の名は今知るに由なし）



㈠武韋の內亂。 高宗常に疾多くして、國政を皇后武氏に委ねしかば、大權その手に歸し、高宗の死後、武氏自ら帝位に卽けり。所謂則天武后なり。已にして張柬之（カンシ）は武后に迫りて、高宗の子中宗を位に卽かしめ、唐の帝室を復興せしが、その皇后韋氏中宗を弑してまた權勢を擅にせしかば、中宗の從子李隆基は韋氏を誅し、父睿（エイ）宗を迎へて位に卽かしめ、ついでその禪を受けたり（七一二）。これを玄宗とす。

㈡外國の侵入。 この內亂二十年に餘り、その間に唐の邊

備弛（ユル）みしかば、突厥の餘衆は蒙古地方を擾（ミダ）し、大食は中央亞細亞を占領して、更に今の新疆地方に侵入し、契丹（キタン）（東蒙古に居りし蒙古族）、吐蕃（ベフト）もまた東西の邊境を掠めたり。

十節度使

㊂節度使の設置。 この外國の侵入を防がんがために、唐は睿宗の時より節度使を設けしが、玄宗は四邊の要地に十節度使（平盧、范陽、河東、朔方、河西、隴右、安西、北庭、劍南、嶺南）を置き、兵馬の大權を委ねて、四方を經略せしかば、唐の國威また振へり。

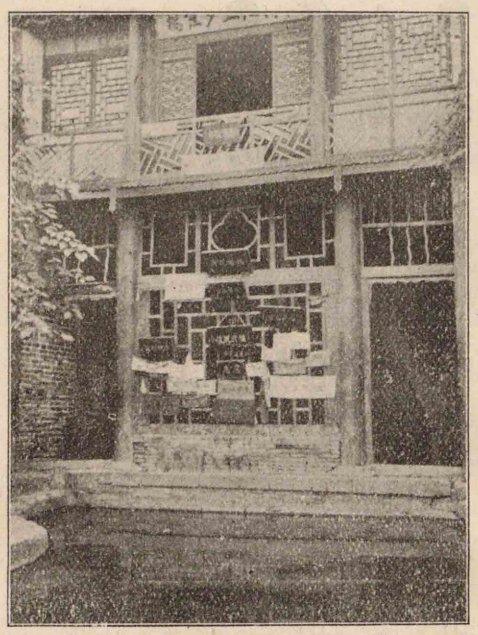
開元の治

㊃玄宗の內治。 玄宗また意を內治に用ゐ、天下泰平にして戶口增加し、文藝隆興せしかば、後世これを貞觀の治に比して、開元の治といへり。開元は當時の年號なり。わが吉備眞備（キビノマキビ）、阿倍仲麻呂（アベノナカマロ）等の唐に留學せしは、玄宗の時代なり。

㊄安祿山の亂。 玄宗は在位四十五年に亙りしが、晚年には

塞外種族の入仕

楊貴妃を寵して國政を顧みず、この時、塞外種族の唐に仕へて軍人となるもの頗る多かりしが、中にも安祿山は平盧范陽、河東の節度使を兼ねて尤も勢力强く、遂に唐の政の亂れしに乘じて兵を擧げ（七五五）、直に洛陽を取り、更に長安に迫りしかば、玄宗は蜀に出奔し、位を子肅宗に讓れり。安祿山の死後、史思明（突厥人）その衆を統べしが、肅宗及びその子代宗は郭子儀、李光弼（契丹人）等の名將に任じ、回紇（ウイグル）、大食等の援兵を得て、遂に反亂を平定せり（七六三）。



驪山の溫泉（陝西省臨潼縣城の南郊に在り、唐代に華淸宮を置きたる處。玄宗楊貴妃と屢ここに幸して宴遊に耽れり）

玄宗時代に於ける財政の困難及び兵備の弛廢

張巡、顔眞卿、顔杲卿の勤王

當時玄宗は宴遊の濫費多きがために、賦稅を重くせしかば、國民頗る疲弊せり。詩人杜甫の「朱門酒肉臭、路有凍死骨。」といへるにても知るべし。加ふるに泰平久しくして、府兵の制全く壞れしかば、安祿山の軍は無人の境を行くが如く、たゞその間に張巡、顔眞卿、顔杲卿等ありて、聊か賊勢を支へしのみ。張巡は睢陽を守り、顔杲卿は常山を守りしが、共に敗死せり。

第十五章　唐の衰滅

㊀亂後の國勢。 唐は安祿山の亂の後、國勢頓に衰へ、外國の侵入、節度使の跋扈、宦者の專横等相つぎ、財政の困難さへ加りて、遂に滅亡するに至れり。

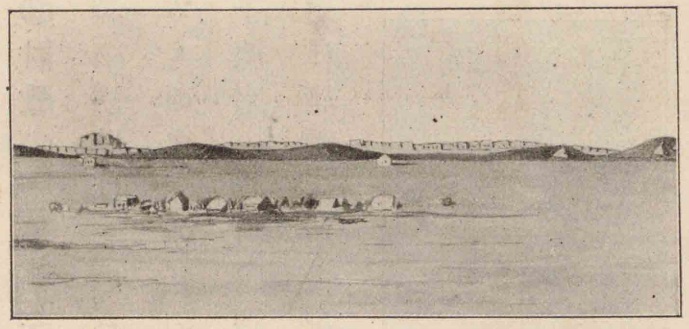
㊁回紇。 回紇は娑陵河（外蒙古）畔を根據とせし土耳古族にして、もと東突厥に屬せしが、東突厥の滅亡したる後これに代り、漠北を占領して唐に歸服せり　安祿山の亂に唐を救ひしより、頗る尊大となり、歲幣を貪り、また屢北邊に入寇して、唐を苦しめしが、後に黠戛斯といふ北狄に破られて、天山の方に移轉せり。

回紇人は漠北諸種族の中にて早く中央亞細亞より文字の使用を傳へて、回紇文字を作れり、現時の蒙古文字及び滿洲文字はこの回紇文字より分派したるものなりといふ。西方移轉の後、宋の初頃、回紇人はイスラム教に歸依せしが故に、支那人はイスラム教を回教と呼べり。

回紇の入寇

回紇の根據地の遺蹟

（外蒙古カルコン河の西岸に在る回紇君主の宮城の遺址にして、その前面に見ゆるは唐代の石碑の破損散亂せるものなり）



回紇文字と回教

㊂節度使の跋扈。 玄宗の時、邊要の地に節度使を置きしが、安祿山の亂後、內外多事なると共に、その數次第に增加せり。これらの節度使はその管內の文武の

大權を握りて勢日に強く、後には朝廷より獨立せる姿をなす者あるに至れり。

㊃財政の困難。 安祿山の亂後は、人民の流離甚だしく、租庸調の法壞れしのみならず、節度使のその管内の租稅を私するもの多く、朝廷の歲入大いに減じたり。是に於て代宗の子德宗の時、租庸調の法を廢して新に兩稅の法を行ひ(七八〇)、更に諸種の新稅を起ししかど、反りて民心の離叛を招けり。

租庸調の法壞れ兩稅の法行はる

唐の憲宗陵前の石人
(陵は陝西省浦城縣の南に在り。石人は當時の文官の裝飾をなせり)

㊄宦者の專横。 德宗の孫憲宗は一時節度使を壓服せしかど、間もなく宦者に弑せられたり(八二〇)。玄宗の宴遊に耽りし頃より、宦者次第に信任せられて、勢力を增し、安祿山の亂後は政權を握り、憲宗を弑してより、天子の廢立もまた全くその手に歸するに至りしが、憲宗の曾孫昭宗位に卽くに及びて、汴(ベン)(河南省開封縣)の節度使朱全忠を招きて、悉く宦者を誅戮せり(九〇三)。

朱全忠宦者を誅戮す

㊅唐の滅亡。 朱全忠これより權勢を專らにし、昭宗を弑して遂に唐を簒ひ(九〇七年、醍醐天皇の御代)、都を開封(卽ち汴)に奠めたり。これを後梁の太祖とす。されどその勢力の及ぶ所は僅に中原に過ぎず。各地の節度使は多くこれに從はずして、各一方に割據して相攻爭せり。

朱全忠唐を簒ふ(約千年前)

わが國が遣唐使を停めたる後十三年にして唐滅ぶ

第十六章　唐の學術及び宗教

㊀儒學。 西漢の武帝以來、儒學盛となりしが、當時の學者は

訓詁の學

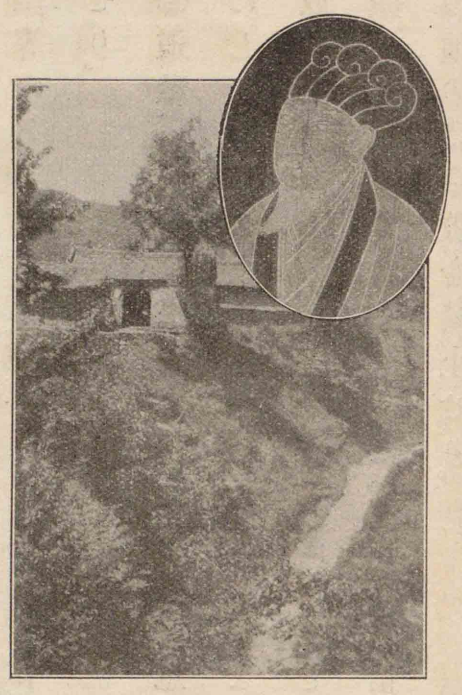
文學の隆盛

李白、杜甫、韓愈、柳宗元

専ら經書の字句の解釋に力を用ゐたり。これを訓詁の學といふ。唐の太宗の時、孔穎達等に命じて、兩漢、魏、晉の學者の經解に更に註釋を加へて、五經（易、詩、書、禮記、左傳）正義を作らしめ、學校の教科も官吏の試驗も皆この正義の解釋に據らしめしかば、唐の學者は、正義を諳誦するのみにて、儒學は振はざりき。

(二)文學。 唐代の官吏の試驗には、明經と進士とありしかど、文學を主とする進士の方、立身容易なりしかば、志望者多く、儒學の不振に反して、文學は隆盛を極めたり。玄宗の時に、李白（太白）、杜甫（子美）の二詩聖出で、その後、五十年にして、韓愈（退之）、柳宗元（子厚）の二文豪出でたり。韓愈の文と杜甫の詩とは支那第一と稱せらる。

韓愈はまた唐代有數の儒者にして、力めて佛教を排し、憲宗の佛骨を迎へしとき、上書してこれを諫めしかば、罪を獲て潮州（廣東）に謫せられたり。かの有名なる「雲横秦嶺家何在、雪擁藍關馬不前」の句はこの時の作にて、藍關も秦嶺も長安より潮州に至る途中の地名なり。



韓愈及び秦嶺にあるその祠（像は元代の石刻に據る。秦嶺は陝西省關中道の南邊に亙れる山嶺にして、長安より潮州に至るにはまづ經由せざるべからず。藍關はその東南に在り）

玄奘及び義淨の渡天

美術工藝の發達

(三)佛教。 佛教は南北朝を經て唐代に至りて益〻流行せり。太宗の時、玄奘、高宗の時、義淨等、前後して印度に往き、遺經を求めて盛にこれを譯出せり。唐一代の間、わが國及び新羅の僧侶の來り學ぶ者多く、かの最澄（傳教）、空海（弘法）等の入唐せしは、德宗の時のことなり。佛教の流通と共に、印刷、繪畫、彫刻、建

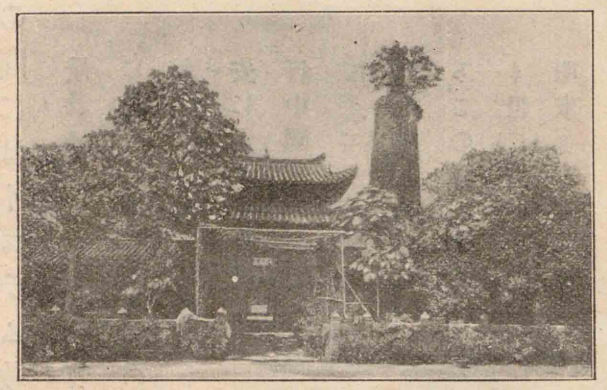
築等は頗る發達し、殊に繪畫には吳道玄（道子）を始め、南宗畫の祖王維、北宗畫の祖李思訓等の名手輩出せり。

玄奘渡天の圖（宋代の畫像に據る）

四 道教。 道教は道家の說に佛教の意を加へし一種の宗教にして、東漢の末に出でたる張道陵より創り、南北朝時代に成立せり。唐の皇室は老子を祖先と定めしが故に、道教を崇ぶこと厚く、武宗（德宗の玄孫）は道教を尊信する餘り、一時佛教その他の諸宗教を禁止せり。

祆教

摩尼教、景教



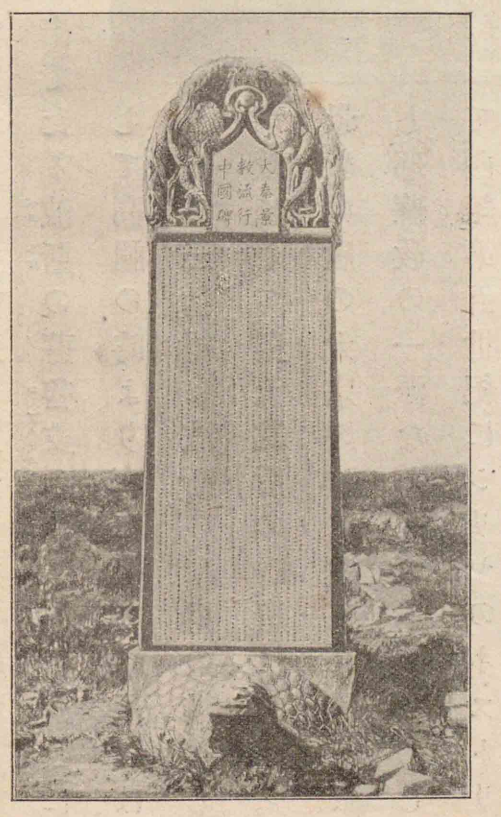
懷聖寺及び光塔（廣東省南海縣城內にあり。傳へて唐代支那に來りし大食人の建てしイスラム教の寺院となす。光塔の構造は全く大食式にて、支那普通の塔と異なるを注意すべし）

イスラム教

五 諸外教。 道、佛二教の外、當時、中央亞細亞に流行せし祆教（ゾロアスター）、摩尼教（マニ）、景教等の諸外教は前後支那に東漸せり。祆教は西紀前第七世紀に出でたる波斯（ペルシヤ）の蘇魯支（ゾロアスター）の創めし拜火教にして、高祖の時より唐に傳り、摩尼教は西紀第三世紀に波斯の摩尼の唱へし宗教にして、則天武后の時、唐に來れり。景教は唐の太宗の時に支那に渡來せし耶蘇教の一派なるネストル教にして、西紀第五世紀にシリヤのネストリウスの唱へしものなり。當時これら諸外教の寺院をすべて三夷寺と稱せり。この他、支那の諸港に來住せし大食人

の間にはイスラム教行はれたり。

景教は阿羅本（パン）といふ者始めて唐に來り（六三五）、太宗の尊信を得てより次第に流行し、所在に寺院の建立を見るに至れり。これを大秦寺といふ。景教は大秦に起源すれば、かく名づけたるなり。德宗の時、大秦寺の僧景淨は、長安に大秦景教流行中國碑を建てて（七八一）、その教派の由來を述べたり。この碑は久しく世に佚せしが、明末（一六三）に至りて發見せられたり。



大秦景教流行中國碑
（もと陝西省長安縣城外に在りしが、一九〇七年城内の碑林に移せり）

中古史摘要及び年表

中古期は、西紀前二二一年より西紀九〇七年に至る約千百年間に亙り、わが孝靈天皇より醍醐天皇に至る時代に當れり。支那にては、秦の一統より唐の滅亡に至る間をいふ。前期以來膨脹し來りし漢族は、勢力の塞外に擴がると共に、塞外諸族と衝突し、匈奴、鮮卑、柔然、突厥、回紇等の諸族、前後塞外より起りて、漢族と勢力を爭へり。されば、この時代は、漢族塞外族競爭時代ともいふべし。この期に佛教は始めて印度以外に傳播し、塞外を經て、次第に支那、朝鮮、日本に東漸せしが故に、これを佛教東漸時代ともいふべし。また東西兩洋の交通始めて開け、前には大秦人、後には大食人等支那に來り、南海諸國及び朝鮮、日本等もこの期に盛に支那と交通して、その文化を傳へたり。この間、漢族革命の大勢とこれに關係せる塞外諸族の盛衰とを示せば、左の如し。

秦(一五)—西漢(二一〇)—新(一五)—東漢(一九六)—三國(四六)—西晉(五二)—東晉(一〇四)—南朝(一五一)—隋(三〇)—唐(二九〇)—五代

匈奴

鮮卑

五胡—北朝(一五一)

柔然

突厥

回紇

年代	事蹟	東洋史	國史
東周	綏靖	皇紀九六頃 西紀前五六五頃 釋迦生まる	
同	懿德	一七六頃 四八五頃 釋迦死す	
同	孝靈	三八九頃 二七二頃 阿育王摩揭陀王となる	
始皇帝	同	四四六 二一五 蒙恬匈奴を征す	
秦 同	孝元	四四八 二一三 秦書を焚く	
同	同	四四九 二一二 秦書生を坑殺す	
同	同	四五二 二〇九 陳勝兵を起す	
同	同	四五五 二〇六 秦滅ぶ	
高祖	同	四五九 二〇二 劉邦漢の皇帝となる	
西 景帝	同	四六七 一九四 衛滿古朝鮮王となる	

年代	事蹟	東洋史	國史
晉	仁德	一〇四三 三八三 淝水の戰	
北	同	一〇四四 三八四 佛教百濟に入る	
南	履仲	一〇六〇 四〇〇 僧法顯印度に往く	
同	允恭	一〇八〇 四一〇 東晉滅び宋興る	
同	同	一〇九九 四三九 南北朝の對立	
同	雄略	一一三九 四七九 宋滅ぶ	
同	仁賢	一一五四 四九四 後魏都を洛陽に遷す	
同	武烈	一一六二 五〇二 齊滅ぶ	
同	安閑	一一九四 五三四 後魏東西に分る	
同	欽明	一二二二 五五二	百濟より佛教を傳ふ

同	四五二	二〇九	陳勝兵を起す	
同	四五五	二〇六	秦滅ぶ	
同	四九九	二〇二	劉邦漢の皇帝となる	
同	四六七	一九四	衞滿古朝鮮王となる	
高祖	五〇七	一五四	吳楚七國の亂	
同	五三五	一三六	張騫西域より還る	
景帝	五五三	一〇八	漢古朝鮮を平ぐ	
開化	五〇七	一五四	吳楚七國の亂	
同	五二一	一四〇	始めて年號を建つ	
武帝	五一三頃	一三八頃	中央亞細亞に於ける大月氏の建國	
同	五三五	一三六	張騫西域より還る	
同	五五三	一〇八	漢古朝鮮を平ぐ	
宣帝	六〇一	六〇	鄭吉西域都護となる	
同	六〇四	五七	新羅の建國	
同	六二四	三七	高句麗の建國	
同	六二八	三三		
垂仁	六四三	一八	百濟の建國	任那始めて入貢す
同	六六八後	八	王莽の簒立	
同	六八五	二五	漢の再興	
同	七〇〇頃	四〇頃	大月氏の迦膩色迦王出づ	
明帝	七二七頃	六七頃	蔡愔佛教を傳ふ	
同	七五一	九一	班超西域都護となる	
和帝	八一九	一五九	宦者始めて政權を握る	
桓帝	八二六	一六六	羅馬と支那との交通開く	
同	八二七	一六七	東漢の黨錮	
同	八四四	一八四	黃巾の賊起る	
仲哀	八六〇	二〇〇		神功皇后新羅を征す
應神	八六八	二〇八	赤壁の戰	
同	八八〇	二二〇	魏の曹丕漢を簒ふ	
同	八八一	二二一	蜀漢の劉備帝を稱す	
同	八八六	二二六	安息滅び波斯興る	
同	八八九	二二九	吳の孫權帝を稱す	
同	八九四	二三四	蜀漢の諸葛亮死す	
同	九二三	二六三	蜀漢滅ぶ	
同	九二五	二六五	魏滅ぶ	
同	九四〇	二八〇	晉天下を一統す	
同	九四五	二八五		王仁來朝し論語千字文を獻ず
同	九六四	三〇四	漢の劉淵帝を稱す	
仁德	九七六	三一六	西晉滅ぶ	
同	九七七	三一七	東晉興る	
同	一〇三二	三七二	佛教高句麗に入る	

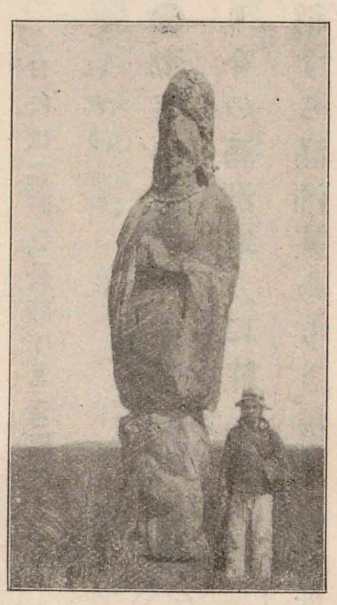
同	一一五四	四九四	後魏都を洛陽に遷す	
武烈	一一六二	五〇二	齊滅ぶ	
安閑	一一九四	五三四	後魏東西に分る	
欽明	一二一二	五五二		
同	一二二五	五五五	突厥柔然を滅す	百濟より佛教を傳ふ
同	一二三二	五六二		
同	一二三〇	五七〇	摩訶末阿剌比亞に生まる	新羅日本府を陷る
崇峻	一二四九	五八九	隋天下を一統す	
推古	一二六七	六〇七	日本始めて支那と通す	小野妹子隋に使す
同	一二六八	六〇八		始めて留學生を隋に遣はす
同	一二七八	六一八	隋滅び唐興る	
同	一二八六	六二六	唐の太宗の卽位	
舒明	一二八九	六二九	僧玄奘印度に往く	
同	一二九〇	六三〇	東突厥滅ぶ	
同	一二九二	六三二	摩訶末死す	
同	一二九五	六三五	景教唐に入る	
同	一二九七	六三七	律令を定む	
同	一三〇一	六四一	吐蕃唐と和す	
皇極	一三〇二頃	六四二頃	大食波斯を占領す	
孝德	一三〇五	六四五		始めて年號を建つ
同	一三一七	六五七	西突厥滅ぶ	
同	一三二〇	六六〇	唐百濟を平ぐ	
天智	一三三三	六六三		百濟を助け唐と戰ひて敗る
同	一三三八	六六八	高句麗滅ぶ	
同	一三三一	六七一	僧義淨印度に往く	
持統	一三五〇	六九〇	武后帝位に卽く	
文武	一三六一	七〇一		大寶の律令成る
同	一三六五	七〇五	武后の亂平ぐ	
玄宗	元明	一三七二	七一二	唐の玄宗の卽位
同	元正	一三七六	七一六	
同	孝謙	一四一五	七五五	安祿山反す
同	淳仁	一四二三	七六三	唐の內亂平ぐ
德宗	光仁	一四四〇	七八〇	兩稅の法を行ふ
同	桓武	一四六二	八〇二	最澄入唐す
同	同	一四六四	八〇四	空海入唐す
同	仁明	一五〇五	八四五	武宗諸外教を禁ず
同	宇多	一五五四	八九四	遣唐使の停止
同	醍醐	一五六七	九〇七	朱全忠唐を簒ふ

第三篇　近古期（九〇七年より一六一六年まで）

第一章　契丹の興起　五代の紛爭

㊀ 契丹の太祖。

契丹（キタン）は南北朝の頃より潢河附近（遼河の上流地）を占領して、もと唐に歸服せしが、唐の末に耶律阿保機（エルアボキ）その主となるに及びて、遂に皇帝を稱し（九一六）、臨潢（潢河の北）に都せり。これを契丹の太祖とす。太祖は悉く回紇の故地を併せ、更に東の方渤海國を擊てり。



契丹の耶律阿保機皇帝を稱す（約千年前）

臨潢城址の遺物（石佛にして、臨潢の南門内に在り）

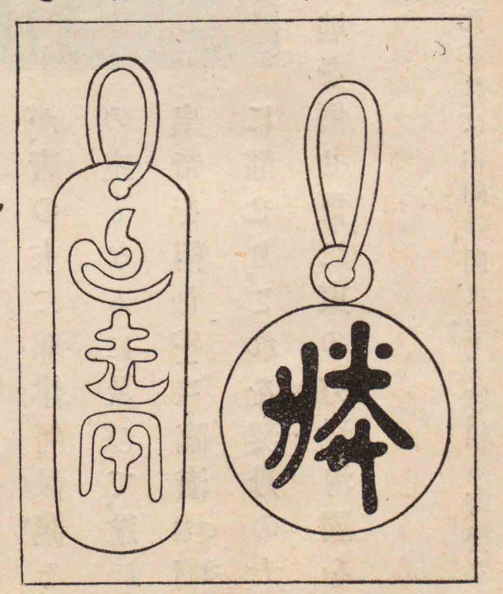
契丹の風俗

契丹はもと文字なく、貨幣なく、人死すれば山樹の間に曝（サラ）す等、頗る野蠻な

りしが、太祖は漢人を招きて文化の輸入に力め、契丹文字を作り、佛教を傳へ、官制を定めて、面目を一新せり。されどなほ毎年一定の時日には盗賊を公許する奇風行はれたり。

渤海國の始めてわが國に朝貢せしは聖武天皇の御代にてその建國後十五年に當れり

㊁渤海の興亡。 東晉の頃より今の滿洲地方に靺鞨部と稱する滿洲族ありき。唐の中世に大祚榮といふ者その間に起り、靺鞨部を統べて渤海國を建て（七一三年、元明天皇の御代）、國勢日に強く、盛にわが國及び唐と交通せしが、契丹の太祖はその國都忽汗城（吉林）を取りて、これを滅せり（九二六年頃、醍醐天皇の御代）。かくて契丹は南下して支那内地を侵略せんことを圖れり。



契丹の銀牌及び長牌

（銀牌は兵馬徴發等の緊急事件ある時使者これを項に掛けて馬を飛ばす。牌中の字は契丹文字にて朕の字なり。長牌は物資徴發等の時使者これを腰に帶びて馬を走らす。牌中の字は契丹文字にて敕走馬の義なり）

契丹の太祖渤海を滅す

㊂契丹の南侵。 朱全忠の建てし後梁は、十數年にして後唐に滅され、後唐の節度使石敬塘はまた間もなく後唐を滅して後晉を起せり。後晉の天下を得たるは契丹の後援の力なれば、北邊の十六州を割き與へしが、その後不和を生じ、契丹の太祖の子太宗は、大擧南下して後晉を滅し（九四六）、開封に據りて、國を遼と號せり。されど漢人服せずして、叛亂起りしかば、太宗は遂に北に歸れり。

契丹國を遼と號す

㊃宋の興起。 是に於て、もとの後晉の節度使劉知遠は開封に入りて後漢國を建てしが、僅に四年にして後周これに代り、ついでその節度使趙匡胤（キヤウイン）はまた後周の禪を受けて帝位に開封に卽けり。これを宋の太祖とす（九六〇）。唐の滅亡よりこゝに至る五十餘年の間に、中原を占領せしもの後梁、後唐、

宋の太祖（約九百五十年前）

五代

五代時代に於ける士風の墮落

後晉、後漢、後周の五國あり。されぼこれを五代といふ。

五代の時は僅に五十餘年の間に十三君を易へしが如き紛亂の世なりしかば、世道人心頗る頽れて、節義廉恥全く滅べり。馮道の如きは唐晉遼漢、周の五朝十一君に歷事し、敗を去り勝に就きて、巧に將相の位を失はざりき。しかも世人はこの無節操漢を寛厚の長者として推重せり。以て當時の士風を察知すべし。

第二章　宋の初世　遼の極盛

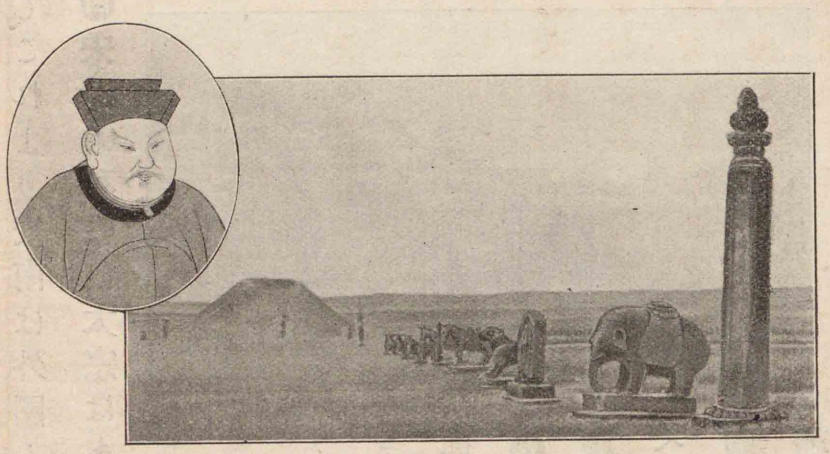
宋の太祖節度使の權威を削る

㊀太祖の事業。 唐末以來、節度使の跋扈益甚だしく、五代の革命は多く節度使の簒奪より起れり。されば宋の太祖は、機會ある毎に文臣を以て節度使を補缺し、かくの如くして中央集權を行ひ、多年の宿弊を一掃せり。

㊁宋の一統。 朱全忠の唐を滅ぼしし時、節度使のこれに從はざる者、所在に獨立國を建て、宋初に至りてもなほ七國（楚、荆南、後蜀、南漢、南唐、吳越、北漢）存在せしが、太祖及びその弟太宗は前後これを征服して、遂に天下を一統せり（九七九）。

宋の太祖及びその陵

（像は元代の石刻に據る。陵は河南省鞏縣の南に在り）



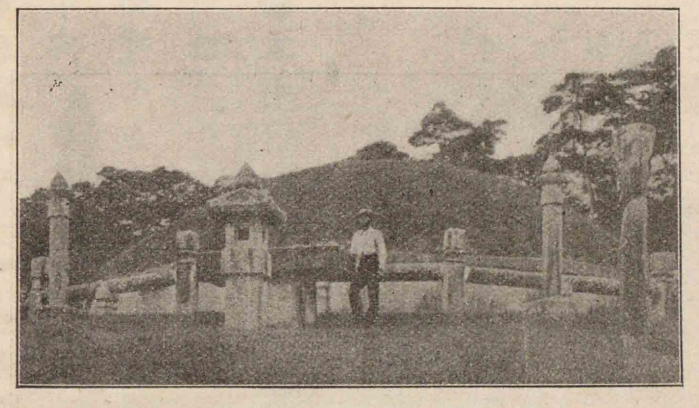
宋と安南との關係

㊂安南の獨立。 交趾は唐の安南都護府の所在地なりしが故に、また安南といふ。秦、漢以來支那の一部をなしが、五代の末、支那の擾亂せるに乘じて獨立せり。太宗は天下一統の後、これが恢復を圖りしかど（九八〇）、炎熱のために失敗

し、これより安南は外國となれり。

四 宋、遼の和戰。 太宗はまた北邊を恢復せんとて、遼を伐つこと十年に餘りしかど、終に成功せざりき。その子眞宗の時、遼軍大擧して入寇し、眞宗これを澶州（セン）（直隸）に防ぎしが、遂に歳幣、銀十萬兩、絹二十萬匹を遼に與へて和を結べり（一〇〇四）。

澶州の役（約九百年前）



高麗の太祖の墓（朝鮮京畿道開城郡に在り）

五 高麗の興起。 曩に朝鮮半島を一統せし新羅は、唐末に至りて國威衰へ、王建といふ者、松嶽（京畿道開城郡）に據りて國を高麗（カウリ）と號し、遂に新羅に代りて朝鮮半島を一統せり（九三六）。これを高麗の太祖といふ。宋、遼交戰の際、高麗は宋と通ぜしかば、遼軍來り攻め、高麗は遂に遼の朝貢國となれり（九九四）。

高麗の王建（約千年前）

高麗と遼との關係

六 遼の極盛。 遼はこの時、太祖の玄孫聖宗位にあり。賢明にして、國政に勤め、外は宋と和し、また高麗を征服し、その領土は東は日本海に臨み、西は天山に至り、内外蒙古を包み、これに朝貢するもの高麗、吐蕃（チベット）、回紇（キルギス）、黠戛斯（キルギス）等六十國に及び、當時、東亞に於ける最强國となれり。されど聖宗死して（一〇三一）より國威漸く衰微せり。

遼の聖宗

聖宗時代に於ける遼の領土

遼はかく一時東亞に威を振ひしかば、その名は遠く西域に響けり。今日に至るまで露西亞人及び中央亞細亞の諸種族が北支那をさしてキタイまたはカタイといふは、遼の原名なる契丹の名殘なりとぞ。

七 西夏の興起。 唐の中世より吐蕃族の別種なる黨項（タングート）部は

西夏の李元昊

夏州（陝西省の北邊）に據りしが、李元昊（カウ）その部長となるに及びて（一〇三二）勢強大となり、河西（黄河以西の甘肅）を併せ、都を興慶（甘肅省寧夏縣）に奠め、國を西夏と號し、皇帝を稱し、西夏文字を作り、ついで宋の西邊に侵入せり。眞宗の子仁宗は、これを防戰すること數年、遂に歲賜、銀、絹併せて二十五萬兩匹を與へてこれと和し（一〇四四）、爾後、西夏は、名義上、宋と遼とに臣屬せり。この西夏の難あるに乘じて、遼は宋に迫りて歲幣、銀、絹各、十萬を增さしめたり。

西夏の貨幣

（錢文は西夏文字にて、大安寶錢といふ。上より右へ右より下へ下より左へ讀むなり。大安とは西夏の年號（一〇七六―一〇八五）なり）

第三章　神宗の改革　女眞の興起

㊀宋の國辱。 宋は唐末五代の弊に懲りて、建國以來、軍人の勢を抑へしかば、その極、兵力を弱くし、安南、遼、西夏等の諸外國に對して、失敗を重ねたり。されば年少、氣鋭の神宗（太宗の四世の孫）位に卽くに及びて（一〇六七）、この國辱を雪がんと志し、まづ財政を治めんとして、王安石を擧げて國庫の充實を圖らしめたり。

宋の神宗王安石を登庸す（約八百五十年前）

王安石の富國策及び强兵策

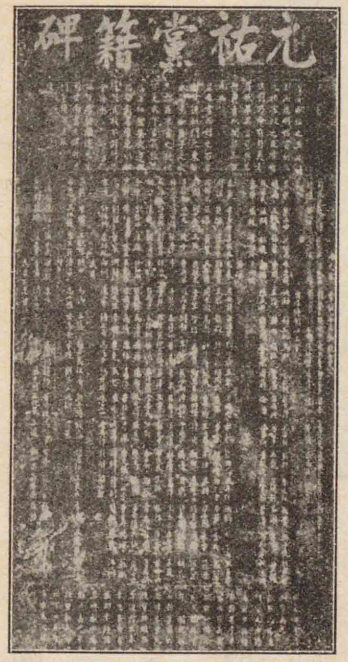
㊁王安石の新法。 王安石は、曩に仁宗の時、制度改革に關する萬言の書を上り、經世家として當時に聞えたり。是に於て富國、强兵の二策を建て、富國策としては、均輸、青苗、募役、市易等の新法を行ひ、强兵策として、保甲、保馬の新法を行へり。

王安石（清人の描きたる肖像による）

㊂外征の失敗。 神宗は國內の改革を圖ると共に、まづ西夏を

滅し、安南を降し、さて後に遼を伐たんと企てしが、西夏、安南の征伐皆意の如くならずして、敗亡多かりしのみならず、遼は宋が西夏と爭ふに乘じて、反りて北邊を侵略せり。

四 新法黨及び舊法黨。 宋はかく外征に失敗せしに加へて、國内にも黨爭起れり。王安石の新法は、もと國庫の充實を目的とせしかば、國民固よりこれを悅ばず。殊に司馬光（溫公）以下の保守的政治家は、その祖宗の制に背くを非難して、これに反對し、かくて政治家中に新法、舊法の二派を生じて、政權を爭奪すること三十餘年に及べり。



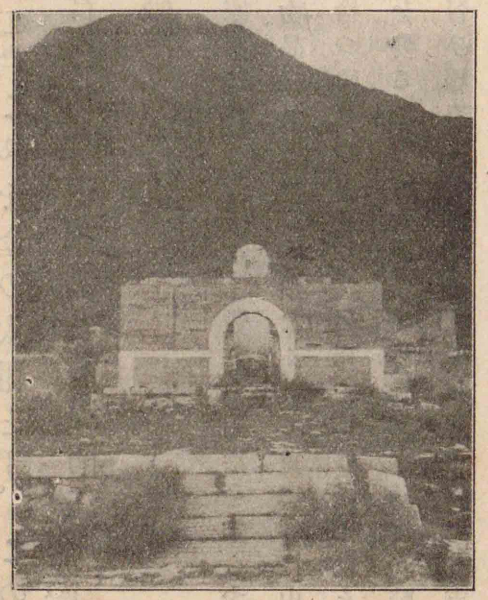
元祐黨籍碑
（徽宗の崇寧四年（一一〇五）に新法黨の首領蔡京は徽宗に請ひ、舊法黨の司馬光以下を指して姦黨となし、自らその黨三百餘人の名を書して石に勒し、天下に頒てり。元祐は司馬光等舊法黨の執政の年號なり。この碑は南宋時代の覆刻にて、今廣西省融縣に在り）

新舊兩派の軋轢

宣和時代

五 徽宗の奢侈。 神宗の後、哲宗を經て徽宗位に卽けり。徽宗は性奢侈を好み、大いに宮殿を飾り、美術品を集め、畫院を設けて繪畫を奬めしかば、美術は頗る發達せり。後世宣和時代といふ。宣和は當時の年號なり。されど失費多かりしかば、新法黨の蔡京を擧げて國庫の充實を圖らしめたり。

六 金の太祖。 もと靺鞨の裔に女眞（デユルチン）といふ部族あり、渤海國の滅亡の後、遼に屬せしが、その一部なる完顏（ワニヤン）部の長阿骨打（アクダ）は、遼の衰微を機として、女眞部を一統して皇帝を稱し、都を會寧



金の太祖の陵
（直隸省房山縣の西に在り。廟古乃の時會寧よりこゝに改葬せしを、清初に修理せしもの）

女眞の阿骨打皇帝を稱す（約八百年前）

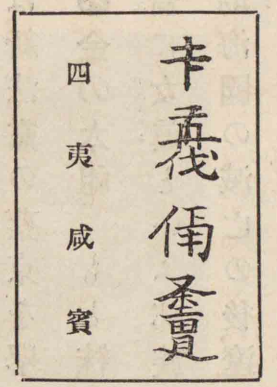
吉林に奠め、國を金と號せり(一一一五)。これを金の太祖とす。この時、聖宗の玄孫天祚帝、遼に君たり。金を親征して混同江(今の松花江)に至りしが、大いに金軍に破られたり。

女眞の風俗

女眞人は半ば地下を掘りたる家屋に住し、文字なく、貨幣の用法を知らず、野に捨つ。殉死の風盛に、父兄死すれば、子弟はその妻を娶ること匈奴等に同じ。されど幼より騎射を習ひ、艱苦に慣る、が故に、戰鬪力强し。支那の北半を占領したる後は、その文化を傳へて面目を一新し、女眞文字等も用ゐられたり。

女眞文字及びその對譯

（明代に書經の旅獒の篇の一部を女眞文字に譯せしものに據る）



宋金と同盟す

⑦遼の滅亡。 宋の徽宗は遼を擊ちて、建國以來の宿望を遂げんとて、海路より使を發して金と同盟し(一一二〇)、宋軍は南より遼に迫れり。遼の天祚帝は西夏に遁れんとして、遂に金軍に獲られ、遼は建國より二百十年にして滅べり(一一二五)。遼の皇族耶律大石(エルタシ)は餘衆と共に中央亞細亞に遁れて、その地に西遼國を建てたり。

耶律大石西遼國を建つ

第四章　金宋の關係　宋の學術

金宋の二帝を擒にす（約八百年前）

㊀金軍の南下。 遼は滅びしかど、その領地は殆ど全く金の有となり、宋は僅に燕京(今の北京)附近數州を得たるのみ。殊に宋の虛弱なるを觀破せる金軍は、間もなく大擧して南下せり。徽宗は位を子欽宗に讓り、勤王の兵を募りてこれを防ぎしかど、金軍は遂に國都開封を陷れ、欽宗、徽宗以下皇族を執らへ、掠奪を恣にして北に歸れり(一一二七)。

この時太后、皇后以下皇族、宮人の擒(とりこ)となりし者すべて千二百人。その待遇

刻薄を極めたり。金人後に徽宗、欽宗等を北滿洲の地に移し、耕作して自活せしめたり。この地にて徽宗の作れる詩に「徽夜西風撼(カス)破扉(ヲ)、蕭條(タル)孤屋一燈微(カスカナリ)、家山回首(セバヲ)三千里、目斷天南無(シ)雁飛(ブ)」といへるにて、その悲境を想ふべし。

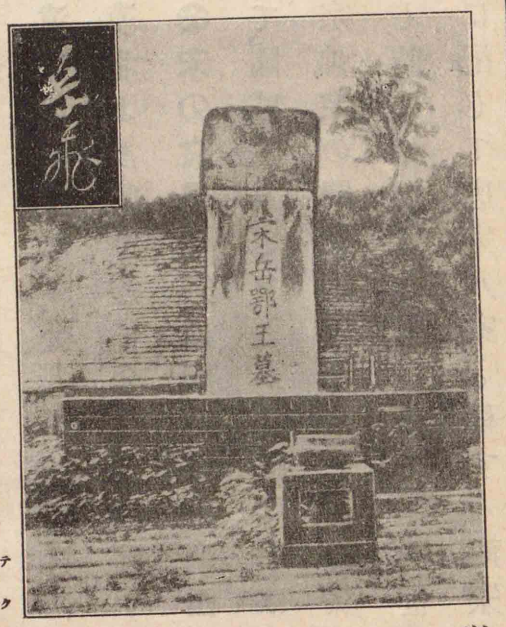
宋金と和す

二 宋の南渡。 金軍北に去るや、欽宗の弟高宗は位に應天（河南）に卽きしが、ついで金軍を避けて江南に移り、都を臨安（浙江省杭縣）に奠め（一一三八）、これを行在（アンザイ）といふ。宋南渡してより、河南、關中、淮北の地は皆金の有となり、宋の國勢益〻衰へたり。

三 秦檜の專横。 南渡の後、宋の軍人、學者は多く金に復讎せんことを唱へしかど、高宗はその生母韋氏の擒となりて徽宗と共に金に在るが故に、和睦を望めり。宰相秦檜は帝意を迎へて遂に金と和し、歲貢として銀、絹各〻二十五萬を納め、臣と稱して金の封册を受け、金より韋氏と當時已に死せし

岳飛の墓及びその書

（墓は浙江省杭縣城の西に在り。墓前に秦檜夫婦の像あり。墓に饗するもの必ずこの像を唾罵して過ぐ。鄂王とは岳飛の死後に贈られたる爵なり）



四 采石の戰。 金は、太祖の孫廸古乃（ナイ）、都を燕京に遷し、ついで江南を併せんとて、六十萬の大軍を起して、采石（安徽）に迫りしが、宋將虞允文（イン）に破られ、間もなく內亂のために死せり。

廸古乃は性殘忍なりしかど、文才に富み、大志を抱けり。曾て畫工をして宋都臨安及びその附近の吳山、西湖の圖を寫さしめ、自ら詩を題して、「萬里車

書盍混同江南豈有別疆封提兵百萬西湖上立馬吳山第一峰」といへり。

㊄金の世宗。 廸古乃の從弟世宗、内亂中に推されて帝位に卽き、まづ宋と和し、專ら内治の改革に力を用ゐたり。遷都以來奢侈、文弱の漢風大いに流行したれば、世宗これを抑へ、力めてその國風を保守せしめたり。されど世宗の死後また遠慮の明主なく、金人の氣力日に衰へ、蒙古はこれに乘じて漠北より興り、遂に金、宋を併呑するに至れり。

金の世宗國風を保守す

㊅宋の文學。 宋は國初以來遼、西夏、金等に連敗するのみにて、國威揚らざりしが、文學、儒學は頗る發達せり。北宋の仁宗、神宗の間、歐陽脩、曾鞏、王安石、蘇洵、蘇軾（東坡と號す、蘇洵の子）、蘇轍（蘇軾の弟）同じ時に出で、皆文學を以て聞ゆ。世に彼等を唐の韓愈、柳宗元に配して唐宋八家と稱す。南宋に至りて儒學の流行する

唐宋八家

蘇軾及びその書（像は元代の石刻に據る）

朱熹及びその書（像は元代の石刻に據る）

に隨ひて、文學は漸く衰へたり。

㊆宋の儒學。 漢、唐の儒者はたゞ訓詁を主とせしが、宋の學者は道教と佛教、殊に當時最も流行せし禪宗とを參酌して、儒教の哲理を考へ、天理と人性との研究に重きを置けり。世にこれを宋學といひ、また性理の學といふ。宋學の開祖は北宋の周敦頤（濂溪）にして、程顥（明道）、程頤（伊川）の兄弟、その說を繼ぎ、南宋の朱熹（晦菴）に至りてこれを大成せり。程朱の學說は爾來儒學の

わが藤原惺窩の程朱學を唱へしは朱熹の死後約四百年に當る

程朱の學

正統となり、また元代より早くわが國に傳りて、德川時代に至りて大いに流行せり。

八 書籍の普及。 古代の書籍は皆手寫なりしが、隋、唐の頃より佛書の印行始り、五代、北宋の間に一般の書籍も次第に印刷せられ、南宋の頃には、坊間に書肆現れたり。北宋の仁宗の時、畢昇といふ者活字を發明し、これより書籍の印行一層容易となれり。活字は後に朝鮮を經て、わが國に傳れり。

活字の發明

第五章　蒙古の興起

一 成吉思汗。 蒙古部は外蒙古の斡難河の上流地を占領して、遼、金に屬せしが、鐵木眞その部長となるに及びて、勢日に強く、當時漠北に雄視せし乃滿部長太陽罕を斃して內外蒙

鐵木眞の成吉思汗となりしは、弘安元寇前約七十五年なり

蒙古の鐵木眞（約七百年前）

古の地を併せ、遂に大汗の位に卽き、成吉思汗（強盛なる君主の義）と號せり（一二〇六）。卽ち蒙古の太祖なり。

蒙古の風俗

蒙古人は帳幕に住し、狩獵を業とす。もと文字なかりしが、成吉思汗の頃より回紇文字を用ゐ、後に元の世祖の時、喇嘛の八思巴命を受けて蒙古文字を作れり。一夫多妻の風行はれ、父兄死すれば子弟はその妻を娶る。男子は辮髮してこれを兩耳の邊に垂れ、女子は前頭を剃り、後頭に束髮して一種の冠を戴く。蒙古の兵は騎馬に長じ、饑渴に耐へ、殊に君主に對して最も忠實なれば、戰鬪力頗る强し。

蒙古の貨幣（錢文は八思巴蒙古文字にて大元通寶といふ。上より下へ、右より左へと讀むなり）

蒙古西夏を降し金を侵す

二 成吉思汗の南下。 成吉思汗は既に塞外を一統し、次に南下して西夏を降し、更に金を侵ししかば、金は河北を割きて和を請ひ、都を汴京（卽ち開封）に遷せり。成吉思汗は更にその鋒を轉じて西域に向へり。

セルジュック王家の強盛

乃滿の屈出律西遼を滅す

㊂西域の狀態。 曩に摩訶末の建設せし大食國の領土は、一時亞細亞、阿弗利加、歐羅巴に跨りしが、唐末の頃より次第に衰微し、西突厥の餘衆のその地に住せる者勢を得、中にも突厥族の建てたるセルジュック王家は亞細亞の西半を一統せしが、北宋の末、その勢漸く衰へたる頃、遼の耶律大石來りて中央亞細亞を占領せり。

㊃西遼の盛衰。 耶律大石は中央亞細亞を占領して、西遼國を建て、都を虎思斡耳朶（吹河の上流）に奠め（一一三〇頃）、なほ今の新疆の大部をも服從せしめ、勢強大なりしが、その孫直魯克の時、乃滿の太陽罕の子屈出律は蒙古に逐はれて來奔し、ついで西遼を奪へり。屈出律は間もなく成吉思汗に破られて死し（一二八）、かくて蒙古は花剌子摸と境を接するに至れり。

蒙古時代の戰士（當時の畫像に本づく）

花剌子摸の滅亡

蒙古軍阿羅思に侵入す

㊄花剌子摸の強盛。 花剌子摸の王家は突厥族にして、もとセルジュック王家に屬せしが、後に獨立してこれを倒し、また西遼を奪ひし屈出律を助け、その報酬として中央亞細亞を領せり。かくて花剌子摸の勢益〻強大となりしが、その王マホメットは蒙古より來りし隊商を殺せり。

㊅成吉思汗の西征。 是に於て成吉思汗はその四子、朮赤、察合台、窩闊台、拖雷と共に花剌子摸を擊ち滅せり。蒙古の將、哲別、速不台等は、更に太和嶺（今のコーカサス山脈）を踰えて阿羅思（今の露西亞）を侵略せしが、成吉思汗の東歸するに及びて軍を還せり（一二四）。

元の太祖

元の太宗

喀喇和林奠都

第六章　太宗及び憲宗の事業

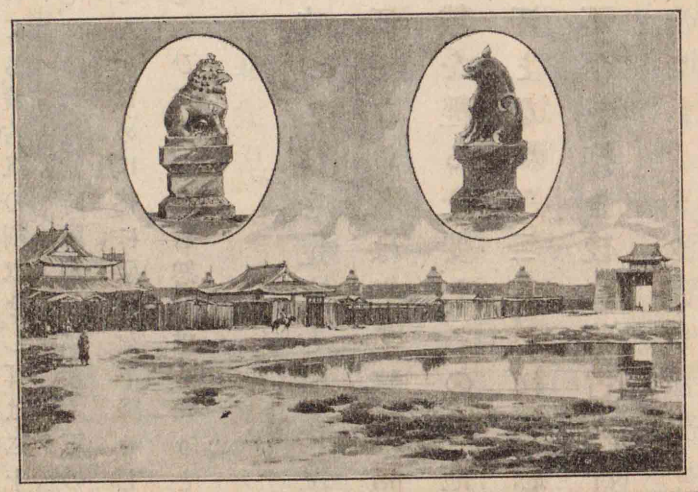
㊀金の滅亡。 成吉思汗の第三子窩闊台嗣ぎて大汗となれり。これを太宗といふ。太宗は都を喀喇和林（カラコルム）（蒙古外オルコン河の畔）に奠め、また父の志を紹（ツ）ぎて金を侵ししかば、金の哀宗（世宗の曾孫）は蔡州（河南）に出奔せしが、蒙古は宋と力を協せ、金を夾撃してこれを滅せり（一二三四）。金は建國よりこの時まで百二十年なり。

㊁拔都の西征。 この時、高麗もまた蒙古に降り、東方稍事なかりしかば、太宗は西方侵略を企て、朮赤の子拔都（バツ）を元帥とし、太宗の子貴由（ユク）、拖雷の子蒙哥（モンケ）等と共に歐洲に侵入せしめたり（一二三六）。蒙古軍はまづ阿羅思を蹂躙し、遂に歐洲内地に迫り、一軍は波蘭（ポーランド）土に入り、一軍は匈牙利（ホンガリヤ）に入りて、殺掠を恣にせしが、曾（タヾ）太宗死せ

現時の喀喇和林及びその附近の元代の遺物

（圖中に見ゆる建物は額兒迭尼招（エルドニチャオ）といふ喇嘛寺にて、明末に元の喀喇和林城址に建立せしものなり）

蒙古軍歐洲内地に侵入す



しかば、東に還れり(一二四二)。

蒙古の軍法は、一旦抵抗せし者は必ずこれを殺して、その一耳を割取するを常とす。かくて南露西亞侵略中のみにても、蒙古軍の割取せし耳は二十七萬に達せりといふ。その殘虐想ふべし。されば當時歐洲人は蒙古軍の來侵を以て、上帝が人間の罪惡を懲罰せんがために特に惡魔を下降せしめたるものと信じ、各寺院は盛に祈禱を行ひて、上帝の宥恕を求めたりといふ。

蒙古の大汗と大集會

(三)憲宗の卽位。 太宗の後、子貴由立つ。これを定宗とす。在位三年にして死せり。蒙古の法、大汗となる者は必ず諸王、諸將等を以て組織せる大集會の推戴を經るを要し、この時、拖雷の子蒙哥、大集會に推されて大汗となれり(一二五一)。これを憲宗とす。是に於て太宗の一族は不平を抱き、後に蒙古大汗國の分裂を起せり。

蒙古大汗國分裂の遠因

(四)旭烈兀と忽必烈。 憲宗は弟忽必烈をして、南方を經略せしめ忽必烈は四川、雲南地方を定め、吐蕃を服し、更にその別軍は交趾に侵入せり。是に於て憲宗は親ら忽必烈を助けて宋を擊ちしが、中途にして死せり(一二五九)。忽必烈の弟旭烈兀も曩に憲宗の命によりて西亞細亞に向ひ、バグダッド(八吉打)を陷れてサラセン國を滅し(一二五八)、更にシリヤ地方をも征服せしが、憲宗の死すると共に兵を收めたり。

第七章　世祖の外征

(一)世祖の卽位。 この時、蒙古の諸王中に大汗とならんと企つる者ありしかば、忽必烈は宋と和議を約し、開平(察哈爾多倫縣城の西北)に至りて、蒙古の大汗となれり(一二六〇年、亀山天皇の御代)。これを世祖とす。

蒙古國號を建てて元といふ

元の上都の遺址

世祖は都を燕京に遷してこれを大都と名づけ、開平を上都となす。夏は上都に居り、冬は大都に居る。ついで國號を建てて元といふ。世祖は漢人の儒者を任用して、文化を輸入するに力め、また一般の制度を定めたり。

㈡宋の滅亡。 世祖の北に歸るや、宋は和議の約に背きしかば、世祖は伯顏等を遣りて、大擧して南征せしめたり。宋の文天祥等勤王の兵を起ししかど、皆敗れ、國都臨安遂に陷り(一二七六)、宋は建國より三百十七年にして滅べり。

文天祥は學に富み、文を能くし、忠義の心厚く、終身、宋を復興するを以て己

文天祥の精忠

文天祥の像及びその廟

(廟は北京內城に在りて、文天祥の死處に當るといふ。像は廟中に安置せるものなり)

元と高麗との關係

れの任とせり。曾て元軍に破られて零丁洋を過ぎし時、「辛苦遭逢起一經、干戈落落四周星、山河破碎水漂絮、身世浮沈風打萍、惶恐灘頭說惶恐、零丁洋裏歎零丁、人生自古誰無死、留取丹心照汗青。」と詠せり。零丁洋と惶恐灘とは共に廣東地方の地名なり。文天祥は後に元軍に捕へられ、大都にて殺されたり。その獄中にて作りし正氣歌は最も有名なり。

㈢高麗の降服。 高麗は早く蒙古に降りしかど、その

後、反覆常ならざりしが、世祖の時遂に全く蒙古に臣服し、高麗の忠烈王（太祖の十一世の孫）は世祖の女を迎へて妃となせり。これより、高麗王は歴代元と婚を通じ、内治、外交一切元の命を奉ぜり。

四 日本侵略の失敗。 世祖はまた高麗王に命じて、わが國を招致せしめしが、その文辭無禮なりしかば、鎌倉の執權北條時宗、これを斥(シリゾ)けたり（一二六八年、亀山天皇の御代）。是に於て世祖は、蒙古及び高麗の兵を發して、前後二度わが國に入寇せしかど、皆失敗せり。

五 南洋諸國の征服。 世祖は日本侵略に失敗せしかど、緬(メン)（今のビルマ國）、交趾(チヤンバ)、占城(ゴンボジヤ)（今の柴棍附近）、眞臘(カンボジヤ)（今の東蒲塞）等の印度支那諸國を征服し、爪哇(ジヤヴヤ)、蘇木都剌(スマトラ)以下の南洋諸國もまた皆元に朝貢せり。

元寇

元初に於ける蒙古の版圖

元の世祖

（當時の肖像畫による。原畫は山東省なる孔子廟の府庫にあり。身には支那風の衮龍の服を著け頭は蒙古風の辮髪をなし、その上に鈸笠を戴けり）

第八章　元の極盛

一 四汗國及び大汗國。 太祖の興起以來、僅に八十年の間に、東は日本海より西は地中海に至れる亞細亞大陸の大部分と歐洲東部とは、擧げて蒙古の領土に歸せり。蒙古の諸王はこの大帝國内に皆幾分の私領地を有し、世祖は元の皇帝として遼東、内外蒙古、支那本部、中央亞細亞を直領し、高麗、吐蕃、印度支那諸國を羈絆(キバン)し、また蒙古の大汗として、これら諸王の私領地をも統治せり。諸王の中にて、左の四部最も強大なり。

蒙古の四汗國

國名	始祖	首都	領土
察合台汗國	察合台	阿力麻里（アルマリク）天山北路	西遼の故土
窩闊台汗國	窩闊台	也迷里（エミル）外蒙古の西北部	乃滿の故土
欽察（キプチャク）汗國	拔都	サライ　歐羅巴露西亞の東南部	西伯利亞の西半部及び歐洲の東部
伊兒（イル）汗國	旭烈兀	マラグア　波斯の西北部	西方亞細亞一帶

マルコ＝ポーロ

マルコ＝ポーロ及びイブン＝バツータの遠遊

㈡東西の交通。

かく蒙古の領土は歐、亞二大陸に跨りしより、海陸に於ける東西兩洋の交通大いに開け、殊に泉州（福建）の如きは、當時世界第一の貿易港となり、外國商人の來住するもの數萬に及べり。伊太利（イタリヤ）のマルコ＝ポーロ、モロッコのイブン＝バツータ等が支那に遠遊せしも、またこの時代なり。

マルコ＝ポーロは十七歳の時、父と共にヴェニスを出で、元に滯在すること十七年、頗る世祖に親愛せられたり。四十一歳の時、故郷に歸りしに、親戚故舊多く死亡して、殆ど知人なかりきといふ。マルコ＝ポーロは後にその見聞錄を公にせしが、その書中に蒙古がわが國を侵して大敗せしことを記し、これよりジパン（日本）の國名は始めて歐洲に知られたり。イブン＝バツータは一生に七萬五千英里（マイル）を旅行せし人にして、元の順帝の時に海路支那に來れり。

日本始めて歐洲に知らる

マルコ＝ポーロの見聞錄の成りしは、わが伏見天皇の御代なり

㈢外國人の任用。

かく東西の交通開けしに加へて、歷代の蒙古大汗は、人種の差別なく才能ある者を登庸せしかば、中央亞細亞、波斯（ペルシヤ）は固より、遠く歐洲あたりの人々もまた來り仕へたり。

㈣耶蘇教徒の布教。

蒙古の國威の揚るに從ひて、定宗、憲宗の頃より羅馬教皇、佛蘭西王等は使僧を蒙古に派して耶蘇教を傳へんと試みたり。ついで世祖の末年より耶蘇教徒

蒙古と耶蘇教國との關係

の支那に來るもの多く、遂に寺院を大都に建立して(一二九九)、盛に布教に從事せしが、元の滅ぶると共に衰微せり。

第九章　元の衰微

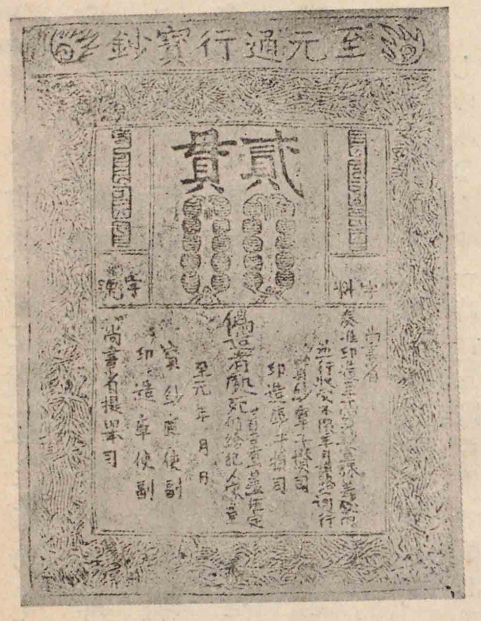
海都蒙古の大汗を稱す(約六百五十年前)

㊀海都の反亂。 曩に憲宗が蒙古の大汗となりしより、太宗の子孫たる窩闊台汗國の諸王は常に不平を抱きしが、世祖が宋の經略に暇なきを機として、太宗の孫海都は反旗を揚げ(一二六八)、察合台汗國及び欽察汗國の諸王を誘ひて、大汗の直隷地たる中央亞細亞を占領せり。かくて三汗國の諸王は遂に海都を擁して蒙古の大汗となし(一二六九)、世祖と戰ひて、互に勝敗ありき。世祖死し(一二九四)、孫成宗嗣ぐに及びて、海都なほ入寇せしが、海都の死後、間もなく、察合台汗は元に降り、元

の援兵を得て、窩闊台汗國を滅し、その地を併せ、かくて内亂始めて鎮定せり(一三〇六頃)。この約四十年の内亂によりて蒙古の諸汗國と元との關係殆ど絶え、諸汗國は次第に獨立の姿をなすに至れり。

交鈔の濫發

至元寶鈔(元の世祖の時代一二八七年頃に發行せしもの。實物は縱八寸七分横六寸五分に及ぶ)



㊁財政の困難。 元は連年の戰爭にて財政頗る亂れしかば、交鈔(今の紙幣)を發行せしが、濫發の結果、價次第に下落して通用せず。從ひて物價騰貴し、國民困難せり。

喇嘛教

㊂喇嘛の尊信。 吐蕃(チベット)には唐の中頃より佛教の一派なる喇嘛(ラーマ)教行はれて、喇嘛(ラーマ)

喇嘛教の僧侶の勢力次第に強盛となりしかば、曩に世祖が吐蕃を平定せし時、喇嘛八思巴を帝師に拜して、吐蕃を治めしめたり。これより、元の歷代の君主は皆喇嘛を尊信し、佛事供養の費多くして、國民の負擔頗る增加せり。

西僧の横暴

元の諸帝は卽位の初、必ず帝師より佛戒を受けてその弟子となれり。されば喇嘛の横暴譬ふるにものなく、甚だしきは南宋の諸陵を發きてその遺骸を侮辱し、その財寶を盜むに至れり。然るに朝廷はこれを不問に附せしのみならず、一時は「凡毆西僧者截其手、詈者斷其舌。」といふ布令を發せしことあり。されば史家は「元之天下半亡於僧。」とさへ評せり。

四 元の滅亡。 かく財政の困難甚だしきに、順帝（世祖の五世の孫）は宴樂に耽りて政を顧みざりしかば、かねて蒙古の虐待に不滿を懷きし漢人は、この機に乘じて四方に競ひ起れり。中にも朱元璋の勢日に强く、遂に帝位に金陵（江蘇省江寧縣）に卽きたり。これを明の太祖（洪武帝）といふ。明軍は連に元を破りて大都に迫りしかば、順帝は開平に奔り、元は世祖が國號を建てて（明の時）より九十八年にして滅べり（一三六八年、わが足利義滿の時）。

明の興起（約五百五十年前）

金陵の故宮（宮城の南門卽ち洪武門附近の現時の狀態）

第十章　明の初世

一 太祖の政策。 明の太祖は元末の諸弊を革め、更に兵を遣りて、元の餘衆を開平附近に擊破せしめて、漠南、滿洲の地を收めたり。是に於て太祖は遼東（奉天）、大寧（直隸）、大同（山西）、洮（タウ）洲（甘肅）等の邊要の地に行都指揮使司を置きて國防を嚴にし、ま

諸王の強大

北京及び南京

た多く功臣、老將を殺戮して簒奪の憂を絶ち、諸子を要地に分封して帝室の藩屏となせり。

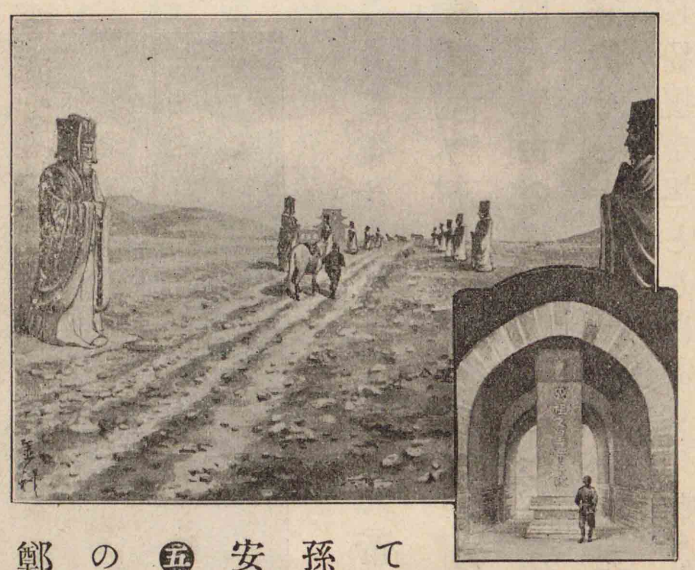
㊁成祖の簒立。 太祖死して(一三九八)、孫惠帝(建文帝)嗣げり。この時、諸王の勢強大に過ぎしかば、惠帝はその抑壓に著手したるに、燕王朱棣(惠帝の叔父)は兵を燕京に擧げ、諸王を誘ひて南下す。金陵の宦者等燕王に内通せしかば、惠帝遂に出奔し、燕王代りて帝位に卽けり(一四〇二)。これを成祖(永樂帝)とす。成祖は燕京を北京と改め、後に都をこゝに遷し、舊都金陵を南京とせり。

㊂塞外親征。 成祖は武略に長じて遠圖を好み、元の餘衆の北邊を擾したるとき、親征してこれを斡難河に擊ち破り(一四一〇)、ついで蒙古の屬部なる瓦剌部を親征して、土拉河に至れり(一四一四)。

大越の建國

明の成祖の陵及び陵前の石人(直隸省昌平縣城の北に在り)

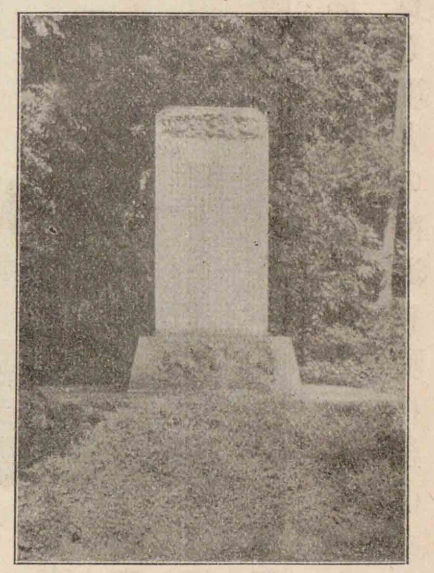
鄭和南海諸國を經略す(約五百年前)



㊃安南の併呑。 成祖はまた安南に内亂ありしに乘じて、これを併せたり(一四〇七)。されど間もなく國人獨立を謀りて、屢明軍を破りしかば、成祖の孫宣宗は遂に安南を棄て(一四二七)、安南人は大越國を建てたり。

㊄南海經略。 成祖は曩に惠帝の海外に逃亡せしを疑ひ、宦者鄭和をして、海軍を率ゐて南海諸國を歷訪し、國威を示さしめしかば、南海諸國は皆明に來貢し、明人の南海諸國に通商する者もこれより多くなれり。

鄭和は一四〇五年に成祖の命を奉じ、宦者王景弘と共に六十二艘の巨船を率ゐて南海に航せしより、二十五年間に海外に航すること前後七回にして、遠く阿弗利加の東海岸に至れり。その間蘇門答剌等の酋長を擒にすること三回、大いに明の國威を南洋に輝かせり。



王景弘記念碑（爪哇島サマラン市支那人居留地大覺寺境内に在り。一八七九年に建てたるもの）

第十一章　帖木兒帝國の興亡

蒙古諸汗國衰微の原因

察合台汗國の分裂

一蒙古諸汗國の衰微、帖木兒の興起。 元の東方に滅亡する間に蒙古の諸汗國もまた西方に衰微せり。これら諸汗國の衰微せし大原因は、相續法不完全にして、王位繼承の際に常に紛擾を起ししにあり。察合台汗國の如きは遂にこれが

帖木兒西察合台汗國を併せ東察合台汗を降す（約五百五十年前）

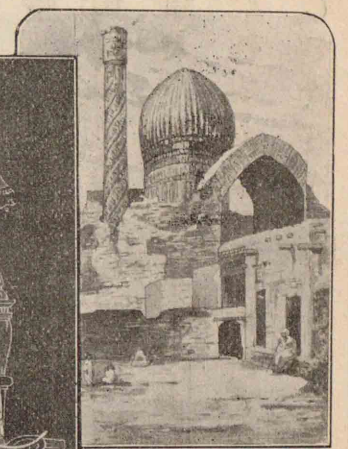
帖木兒伊兒汗國を滅す

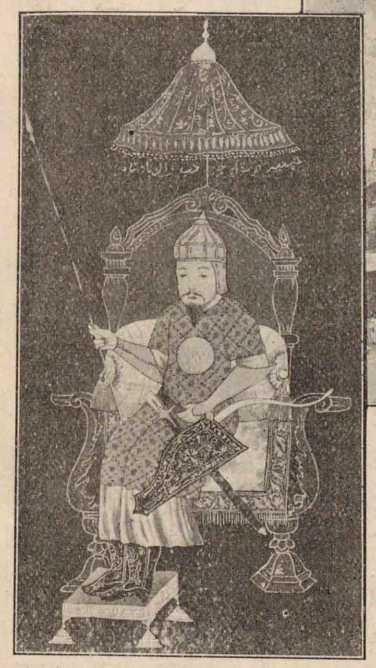
帖木兒欽察汗を降す

ために東西に分裂して、相攻爭せしが、この時、蒙古の疎族帖木兒（ムール）は碣石（ケシュ）撒馬兒罕（サマルカンド）の南より起り、西察合台汗國を併せて都を撒馬兒罕（サマルカンド）に奠め（一三六九）、また東察合台汗を降せり。

二伊兒汗國の滅亡。 伊兒汗國は旭烈兀（フラグ）の曾孫合贊（ガザン）汗の時、憲法を制定し、歐洲諸國の文物を輸入して、國運隆盛なりしが、その死後、間もなく、内訌起り、また欽察汗の侵入を受けて、國力頗る衰へしかば、帖木兒は容易にこれを併せたり。

三欽察汗國の盛衰。 欽察汗國は拔都の玄孫月卽別（ウズベク）、その子札尼別（ヂャニベク）の時、伊兒汗國を侵略して領土を開き、また伊太利の商人を招きて黑海の貿易を盛にし、國運盛大なりき。されどその後、篡相繼ぎしが、帖木兒は伊兒汗國平定の後、親征して欽察汗を降せり（一三九五）。





帖木兒及びその廟

（廟は中央亞細亞のサマルカンドに在り。普通にゲル＝アミルといふ。アミルの墓の義なり。アミルとは帖木兒の慣用せし稱號なれば、やがて帖木兒の墓といふに同じ。この廟中に帖木兒の靈柩を安置す）

㊃帖大兒の東征。 帖木兒はついで印度を侵略し、更に小亞細亞に向ひて土耳古（トルコ）帝バヂャシッドを擒にせり。かくて亞細亞の西半を平定したれば、帖木兒は更に明を滅して世界統一の實を擧げんと欲し、東征の軍を起ししが、中途にして病死し（一四〇五年、明の成祖の時）、明は幸にその侵略を免れたり。帖木兒の死後は内亂起りて、國威衰へたり。

帖木兒、人となり意志鞏固にして、曾て目的を變更せしことなし。好んで英傑の傳記を讀み、また深く意を外國の地理政治に留め、その記憶力は非常なりき。常に「天に二日なし。地に二王あるべからず。世界は大なれど、わが大望に比するに足らず。」といへり。

第十二章　明の衰微

明代宦者專横の由來

㊀宦者の專横。 初め明の太祖は歷代の成敗に鑑み、宦者の政事に預ることを禁ぜしが、成祖の簒立せし時、宦者の内應せしを德としてこれに信任せしかば、宦者次第に勢力を得て、成祖の曾孫英宗以來、政權を專らにせり。かくて中央政府の腐敗せしに乘じて、南倭、北虜の外寇起れり。

也先瓦剌部長となる

土木の變

㊁瓦剌部の强盛。 この時、瓦剌部の勢漸く强く、天山北路及び外蒙古の西半を併せ、その部長也先（イセン）は元の遺族を擁して明に入寇せり。英宗親征して土木（直隸）に至りしが、大敗して虜

となり(一四四九)、纔に和議によりて放還せらるゝことを得たり。されど間もなく、也先は内亂に斃れ、瓦剌部は衰微せり。

㊂韃靼部の入寇。　元滅びてより、元の子孫は韃靼(タタール)の可汗(カカン)の號を稱せしかど、諸部を統一する實力なく、蒙古の勢久しく振はざりしが、達延(ダヤン)元の順帝七世の孫が韃靼の可汗となるに及びて(一四七〇)、内外蒙古を一統して大元大可汗と稱し、また明に來寇して、河套(タウ)今の鄂(オ)爾多斯(ルドス)を略し、孫俺答(アルタン)の時益〻明の北邊を攻掠せり。

韃靼の達延汗蒙古を一統す(約四百五十年前)

㊃倭寇の侵害。　かく北邊の綏(ヤス)からざる間に、明の東南海は倭寇の侵害を蒙れり。元の中頃より、わが邊民は海賊となりて、高麗及び元の沿海を侵掠し、明初に至りて止まず、これを倭寇といふ。その後、わが足利義滿、好を明に通ぜし(一四〇一年、明の惠帝の時)以來、一時その害やみたれど、足利氏の衰ふるに及びて、倭寇また起り、明の奸民これに加りて、大いに沿岸を荒せり。明の世宗(嘉靖帝)の時、俞大猷倭寇を福建に破りてより(一五六三)、その勢衰へたれど、餘黨はなほ近海に出沒せり。

八幡賊

倭寇(明末の支那書に載せたる畫像による)

當時わが國の海賊は八幡大菩薩の幟を建てたる小船に乘りしかば、明にてはこれを八幡(バハン)賊ともいへり。大抵輕裝して日本刀を携へ、進退の合圖(アヒヅ)には法螺(ホラ)を吹き、動作極めて敏捷なりしかば、諸外國皆これを恐れたり。明人の記錄に「每戰輒(チ)赤體、提三尺刀舞而前、無能(ク)捍者、其用兵善埋伏(シ)、數(クリナ)遠出我軍後、兩面夾攻(ヨリシ)、每以寡勝衆(ムル)。」といへるにて、その大樣を察知すべし。

㊄朝鮮の興起。　曩に倭寇の高麗沿岸を掠めし時、高麗の將李成桂はこれを擊退して、民心を收め、遂に簒立して王位に卽き(一三九二年、明の太祖の時)、京城(京畿道)に都せり。これを朝鮮の太祖とす。

朝鮮明の外藩となる

明軍朝鮮を援けて大敗す

明末の内憂外患

太祖はついで明の封册を受けて、その外藩となれり。

㈥朝鮮の役。 朝鮮の太祖八世の孫宣祖（李昭）の時、わが豐臣秀吉はこれに命じて、明を伐つ嚮導をなさしめんとせしかど、命を拒みしかば、秀吉はまづ朝鮮を征伐す（一五九二年、後陽成天皇の御代）。宣祖連に敗れ、援兵を明に請へり。明の神宗（萬曆帝）は兵を發して朝鮮を援け、わが軍を防ぎしが、功なくして、反りて多くの軍費を失へり。この財政の困難を救はんとて、增稅を行ひしかば、民心離れて、やがて流賊起りしに加へて、外には滿洲族勃興し來りしかば、國運愈傾けり。

㈦明の儒學。 元の時より程朱の學一般に流行せしが、明の成祖の時、程朱派の諸學者の說を集めて四書、五經の大全を作り、官吏登庸の試驗は一に大全の說に據らしめしより、程朱の學益、流行せり。初め南宋の時に陸九淵（象山）ありて、朱熹に對して異說を立て、當時甚だ行はれざりしが、明の中世に至りて王守仁（陽明）出で、陸九淵の說に本づきて良知說を唱へ、學界を風靡して、程朱の學と相爭へり。陽明學はやがてわが國に傳りて、德川時代に流行せり。

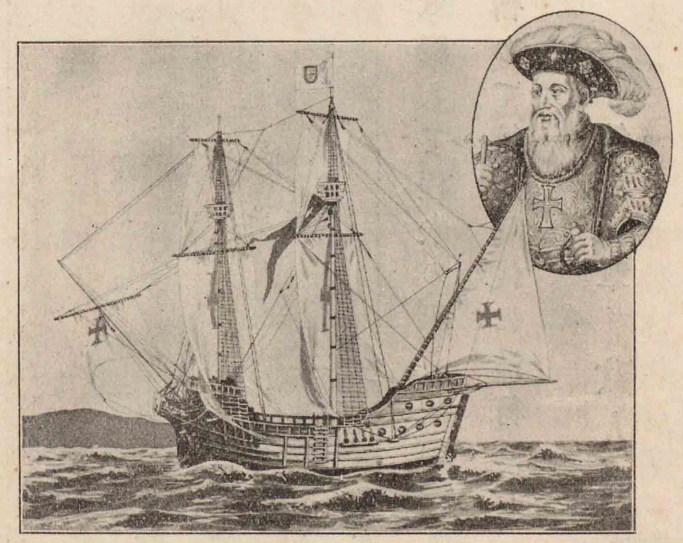
わが中江藤樹の陽明學を奉ぜしは王守仁の死後百餘年に當れり

王守仁（明代の書籍に載せたる畫像による）

第十三章　歐人の東漸

㈠歐人東漸の由來。 元代に東西の交通開け、歐人の東亞に來るもの多く、これらの旅行者の紀行によりて、歐人の東亞

遠征に志すもの漸く多きを加へたり。當時の交通路は黑海より陸路中央亞細亞を經て東洋に來るか、若しくは埃及より海路印度洋を經て東洋に來るを普通とせしが、土耳古帝國起りてより、この二交通路共に不便多かりしかば、明の中頃より歐洲一般に東洋に到達すべき新航路の發見を奬勵せり。かくて、葡萄牙人、西班牙人まづ東洋に來り、和蘭人これに續けり。



ヴァスコ＝ダ＝ガマ及びその乘船

㈡葡萄牙人。 葡萄牙人は國

葡萄牙人の始めてわが國に來りしは天文十二年（一五四三）にて彼等が支那に來航せしより約三十年後なり

蘭人の始めてわが國と通商を開きしは慶長十四年（一六〇九）にて、その臺灣占領に先だつこと十五年なり

葡萄牙人臥亞に據る（約四百年前）

葡萄牙人阿媽港に據る

西班牙人フィリッピン諸島を占領す（約三百五十年前）

東洋貿易に於ける蘭人の成功（約三百年前）

人ヴァスコ＝ダ＝ガマが喜望峰を廻りて印度に達せし（一四九八）より、東洋に航行する者頗る多く、遂に印度西海岸の臥亞（ゴア）を略して根據地とし（一五一〇）、更に南支那海に出で（一五一五年頃）、ついで阿媽港（カオ）（廣東省澳門）を占領して（一五五七）、盛に支那、日本（ちわが天川）と貿易せり。

㈢西班牙人。 西班牙人は葡萄牙人と反して、南亞米利加を廻りて太平洋に出で（一五二一）、ついでフィリッピン諸島を占領し（一五六五）、マニラを根據地として、東洋の貿易に從へり。

㈣蘭人。 蘭人は前二者に後れて東洋の貿易に從事せしかど（一五九六）、間もなく兩者を壓倒し、爪哇（ジャヴァ）のバタヴィヤを根據地とし（一六一九）、更に臺灣を占領し（一六二四年、わが德川家光の時）、盛にわが國及び支那と貿易し、遂に東洋貿易の覇權を握れり。

㈤耶蘇教の東漸。 東洋の航路開けてより、耶蘇教士の東方

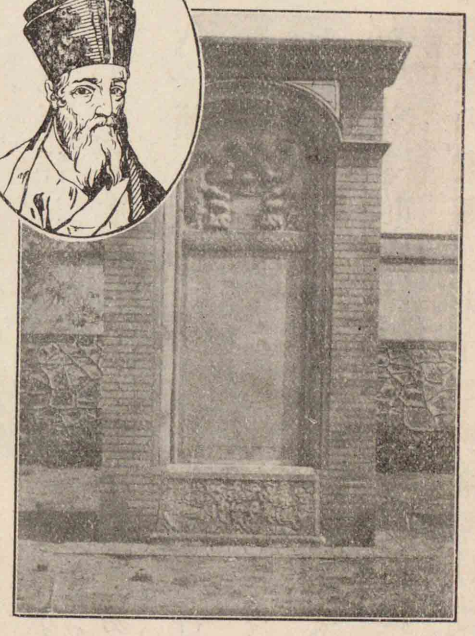
ジェスイット教士のわが京都に南蠻寺を建てしは永祿十一年（一五六八）にて、利瑪竇が北京に會堂を建てしより三十餘年前のことなり

沙末爾

利瑪竇及びその墓

（像は清初西洋にて刊行せし銅版に据る。墓は北京の西郊に在りて義和團亂後に修理せしもの）

利瑪竇

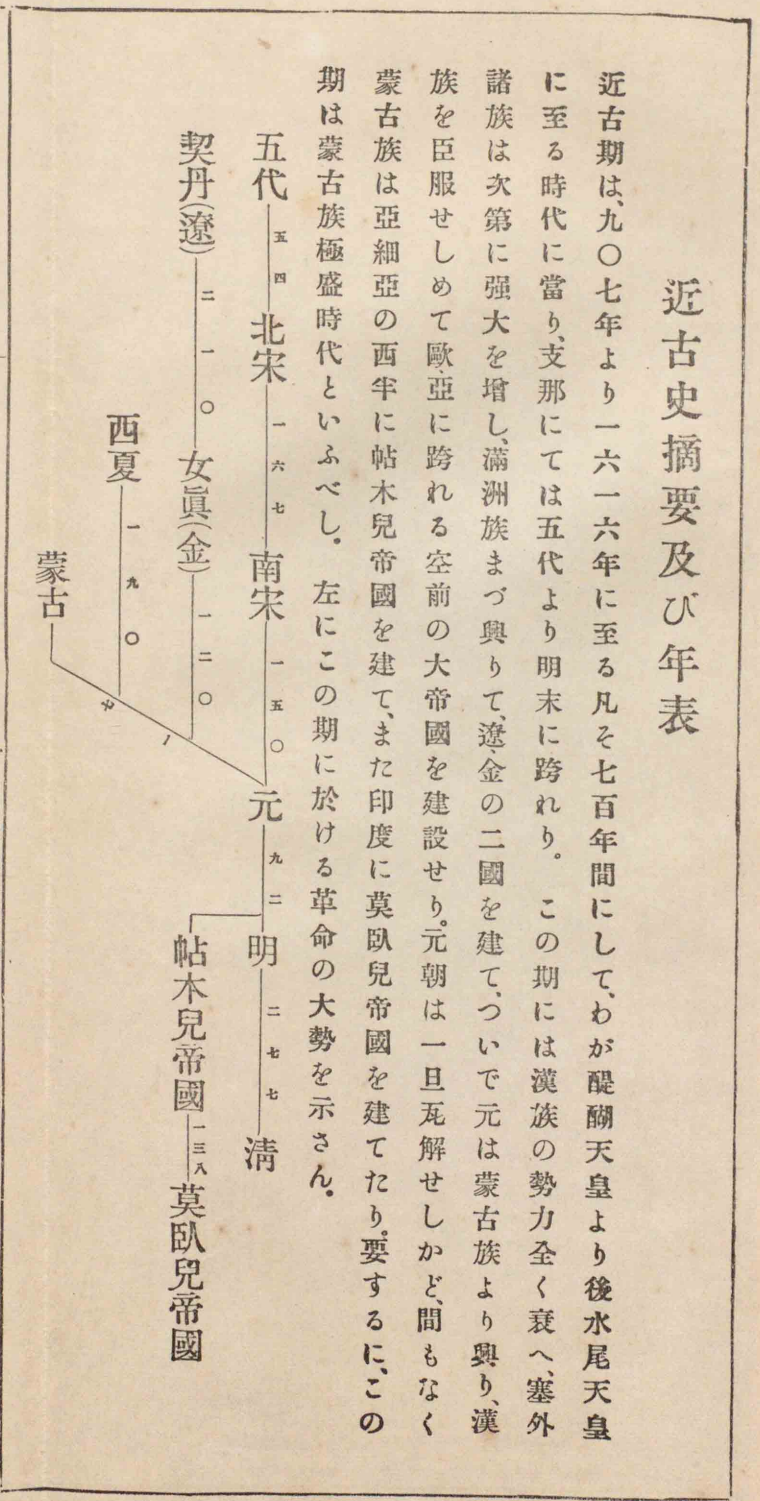


に布教を試みる者多かりしが、中にもジェスイット派（天主教）のフランシス＝サヴィエル（沙末爾）は印度、日本に布教して後、支那に向ひ、中途にして死せり（一五五二年、明の世宗の時）。

ついで同派のマテオ＝リッチ（利瑪竇）は支那に來り、明の神宗の許可を得て北京に會堂を建てしより（一六〇二）、ジェスイット教士多く支那に來れり。これらの教士は曆法、數學、砲術に達せしかば、明廷の信任を得、皇族、大官の歸依（キエ）する者多く、中にも徐光啓尤も世に聞えたり。

近古史摘要及び年表

近古期は、九〇七年より一六一六年に至る凡そ七百年間にして、わが醍醐天皇より後水尾天皇に至る時代に當り、支那にては五代より明末に跨れり。この期には漢族の勢力全く衰へ、塞外諸族は次第に強大を增し、滿洲族まづ興りて、遼、金の二國を建て、ついで元は蒙古族より興り、漢族を臣服せしめて歐亞に跨れる空前の大帝國を建設せり。元朝は一旦瓦解せしかど、間もなく蒙古族は亞細亞の西半に帖木兒帝國を建て、また印度に莫臥兒帝國を建てたり。要するに、この期は蒙古族極盛時代といふべし。左にこの期に於ける革命の大勢を示さん。



年代	年代	事蹟	東洋史	國史
唐	皇紀	西紀		
聖武	一三八八	七一三	大祚榮渤海國を建つ	
五代 後梁 醍醐	一五七六	九一六	契丹の耶律阿保機帝を稱す	
後唐 同	一五八六頃	九二六頃	契丹渤海國を滅す	
後晉 朱雀	一五九六	九三六	高麗新羅に代りて朝鮮半島を一統す	
同 同	一五九七	九三七	契丹國號を遼と改む	渤海國始めて入貢す
同 同	一六〇六	九四六	遼の太宗後晉を滅す	
太祖 村上	一六二〇	九六〇	宋興る	
太宗 圓融	一六三九	九七九	宋の太宗天下を一統す	
同 同	一六四〇	九八〇	宋安南を攻めて失敗す	

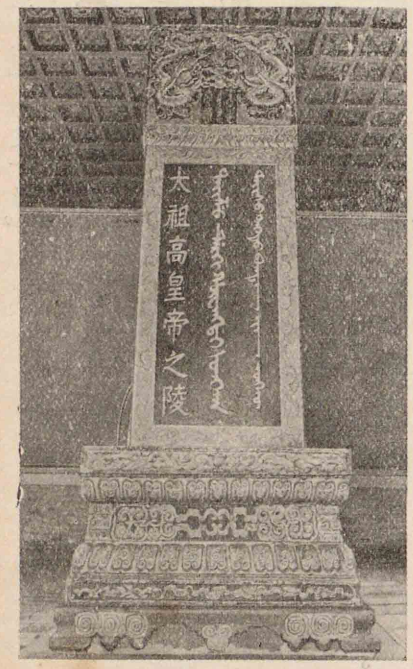
年代	年代	事蹟	東洋史	國史
元	皇紀	西紀		
世祖 帝昰	一九四一	一二八一	元日本に入寇して大敗す	弘安の役
同 後宇多	一九四三	一二八三	元緬甸を征す	
同 同	一九四四	一二八四	元占城を征す	
同 伏見	一九五二	一二九二	元爪哇を征す	
同 同	一九五四	一二九四	元の世祖死す	
成宗 後伏見	一九五九	一二九九	耶蘇教徒寺院を大都に建つ	
同 後二條	一九六六頃	一三〇六頃	窩闊台汗國の滅亡	
太祖 後村上	二〇二八	一三六八	明興り元滅ぶ	
同 後龜山	二〇三九	一三七九	帖木兒中央亞細亞を平	

		皇紀	西紀	東洋史	國史	東洋史	國史
唐	元明	一三七三	一三七六	大祚榮渤海國を建つ	渤海國始めて入貢す	南宋滅ぶ	弘安の役
	聖武	一三八八	七八				
五代	後梁	一五七六	九一六	契丹の耶律阿保機帝を稱す			
	醍醐	一五七六	九一六				
	後唐	一五八六頃	九一六頃	契丹渤海國を滅す			
	同	一五九六	九二六				
	後晉	一五九六	九三六	高麗新羅に代りて朝鮮半島を一統す			
	朱雀	一五九七	九三七	契丹國號を遼と改む			
	同	一六〇六	九四六	遼の太宗後晉を滅す			
	同	一六〇六	九四六				
北宋	太祖	一六一〇	九六〇	宋興る			
	太宗	一六二九	九七九	宋の太宗天下を一統す			
	圓融	一六二九	九七九				
	同	一六四〇	九八〇	宋安南を攻めて失敗す			
	同	一六五四	九九四	高麗遼に臣服す			
	一條	一六五四	九九四				
	眞宗	一六六四	一〇〇四	宋遼の和議			
	同	一六六四	一〇〇四				
	仁宗	一六九八	一〇三八	李元昊西夏國を建つ			
	後朱雀	一六九八	一〇三八				
	同	一七〇四	一〇四四	西夏宋と和す			
	同	一七〇四	一〇四四				
	神宗	一七二九	一〇六九	王安石の新法			
	後三條	一七二九	一〇六九				
	徽宗	一七七五	一一一五	女眞の阿骨打國を金と號す			
	鳥羽	一七七五	一一一五				
	同	一七八〇	一一二〇	宋金と同盟す			
	同	一七八〇	一一二〇				
	崇德	一七八五	一一二五	遼滅ぶ			
	同	一七八七	一一二七	北宋滅ぶ○南宋の高宗位に卽く			
	欽宗	一七九〇頃	一一三〇頃	耶律大石西遼國を建つ			
南宋	高宗	一七九八	一一三八	南宋臨安に都す			
	同	一八〇一	一一四一	宋金と和す			
	同	一八〇一	一一四一				
	二條	一八二一	一一六一	金の廸古乃宋を侵す	僧榮西宋より歸る		
	光宗	一八五一	一一九一				
	後鳥羽	一八五一	一一九一		賴朝征夷大將軍に任ぜらる		
	同	一八五二	一一九二				
	寧宗	一八六六	一二〇六	蒙古の鐵木眞成吉思汗と號す			
	土御門	一八六六	一二〇六				
	同	一八七一	一二一一	西遼滅ぶ			
	順德	一八七一	一二一一				
	同	一八七八	一二一八	乃滿の屈出律敗死す			
	同	一八八〇	一二二〇	花剌子模滅ぶ			
	同	一八八四	一二二四	蒙古の軍阿羅思に侵入す			
	後堀河	一八八四	一二二四				
	同	一八八七	一二二七	西夏滅ぶ○成吉思汗死す			
	理宗	一八九四	一二三四	金滅ぶ			
	同	一八九四	一二三四				
	四條	一八九六	一二三六	拔都の西征			
	同	一八九六	一二三六				
	同	一八九八	一二三八	高麗蒙古に降る			
	同	一八九八	一二三八				
	同	一九〇一	一二四一	蒙古軍歐洲內地に侵入す			
	同	一九〇一	一二四一				
	後深草	一九一四	一二五四	旭烈兀の西征			
	同	一九一四	一二五四				
	龜山	一九二〇	一二六〇	元の世祖の卽位			
	同	一九二九	一二六九	海都推されて蒙古の大汗となる			
	度宗	一九二九	一二六九				
	同	一九三一	一二七一	蒙古國號を建てて元といふ			
	同	一九三一	一二七一				
	帝昺	一九三五	一二七五	マルコ＝ポーロ元に來る			
	後宇多	一九三五	一二七五				
元	世祖	一九四一	一二八一	元日本に入寇して大敗す			
	同	一九四三	一二八三	元緬甸を征す			
	同	一九四四	一二八四	元占城を征す			
	同	一九四四	一二八四				
	同	一九五一	一二九一	元爪哇を征す			
	伏見	一九五一	一二九一				
	同	一九五四	一二九四	元の世祖死す			
	成宗	一九九九	一二九九	耶蘇教徒寺院を大都に建つ			
	後伏見	一九九九	一二九九				
	同	一九六六頃	一三〇六頃	窩闊台汗國の滅亡			
	後二條	一九六六頃	一三〇六頃				
明	太祖	二〇二八	一三六八	明興り元滅ぶ			
	後村上	二〇二八	一三六八				
	同	二〇二九	一三六九	帖木兒中央亞細亞を平定す			
	後龜山	二〇二九	一三六九				
	同	二〇三六	一三七六	トクタムシ欽察汗となる			
	同	二〇五二	一三九二	李成桂朝鮮王となる			
	同	二〇五二	一三九二				
	後小松	二〇五五	一三九五	帖木兒欽察汗國を定む			
	同	二〇五九	一三九九	帖木兒印度に侵入す			
	惠帝	二〇五九	一三九九				
	同	二〇六一	一四〇一		足利義滿明に通ず		
	同	二〇六一	一四〇一				
	成祖	二〇六二	一四〇二	明の成祖の卽位○帖木兒土耳古を破る			
	同	二〇六二	一四〇二				
	同	二〇六五	一四〇五	帖木兒死す○鄭和南洋に往く			
	同	二〇六五	一四〇五				
	同	二〇六七	一四〇七	明安南を併呑す			
	宣宗	二〇八七	一四二七	安南明より獨立す			
	稱光	二〇八七	一四二七				
	英宗	二一〇九	一四四九	瓦剌部明の英宗を擒にす			
	後花園	二一〇九	一四四九				
	憲宗	二一三〇	一四七〇	達延韃靼の可汗となる			
	後土御門	二一三〇	一四七〇				
	孝宗	二一五八	一四九八	ヴァスコ＝ダ＝ガマ印度に達す			
	同	二一五八	一四九八				
	武宗	二一七〇	一五一〇	葡萄牙人ゴアを占領す			
	後柏原	二一七〇	一五一〇				
	同	二一七五頃	一五一五頃	葡萄牙人支那海に來る			
	同	二一八一	一五二一	西班牙人太平洋に出づ			
	同	二一八一	一五二一				
	世宗	二二〇二	一五四二	韃靼の俺答明に寇す			
	後奈良	二二〇二	一五四二				
	同	二二〇三	一五四三		葡萄牙人日本に來る		
	同	二二〇九	一五四九		沙末爾日本に布教す		
	同	二二一二	一五五二	沙末爾支那布教の中途に死す			
	同	二二一七	一五五七	葡萄牙人阿媽港を占領す			
	正親町	二二二五	一五六五	西班牙人フィリッピン諸島を占領す			
	同	二二四二	一五八二	利瑪竇支那に來る			
	同	二二五二	一五九二	明朝鮮を援ふ			
	神宗	二二五三	一五九三				
	同	二二五三	一五九三				
	後陽成	二二五六	一五九六	わが國との講和談判破裂す○蘭人東洋に來る	日本朝鮮を伐つ		
	同	二二五六	一五九六		碧蹄館の戰		
	同	二二五八	一五九八	豐臣秀吉薨ず			
	同	二二六一	一六〇一	利瑪竇北京に會堂を建つ			
	同	二二六九	一六〇九		蘭人の通商開始		
	同	二二七九	一六一九	蘭人爪哇を根據地とす			
	後水尾	二二七九	一六一九				
	同	二二八四	一六二四	蘭人臺灣に據る			
	嘉宗	二二八四	一六二四				

第四篇　近世期（一六一六年より一八九四年まで）

第一章　清の興起

後金の太祖。 金の滅亡後、滿洲族の勢久しく振はざりしが、明末に努爾哈赤（ヌルハチ）といふ者赫圖阿拉（ホトアラ）（今の興京）附近より起りて次第に滿洲族を統一し、遂に國號を建てて後金といひ、皇帝を稱せり（一六一六）。これを太祖とす。明の神宗は朝鮮と協力してこれを夾撃せしが、太祖は明軍を薩爾滸（サルフ）山に破り、瀋陽（シンヤン）（奉天省瀋陽縣）を取りて都をこゝ



後金の太祖の陵前の碑（陵は奉天省瀋陽縣城の東に在りて俗に東陵と稱す。碑文の中央なるは滿洲文字、右なるは蒙古文字なり）

努爾哈赤皇帝を稱す（約三百年前）

に奠めたり。

後金國號を清と改む

清の太宗朝鮮を降す

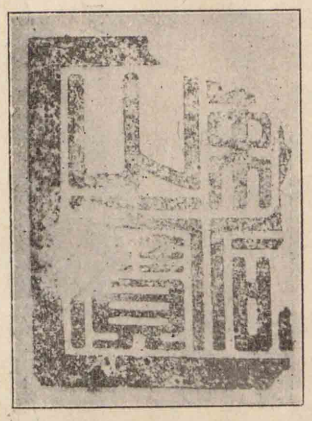
㈡太宗の事業。 太祖死して、子太宗嗣ぎ、西の方、漠南蒙古部を征服し、國號を改めて清（シン）といふ（一六三六）。この時朝鮮は、なほ明と通ぜしかば、太宗はこれを征服して封册を受けしめ（一六三七）また力を專らにして、南の方、明を侵す。明の毅宗（神宗の孫）は吳三桂を遣りてこれを防がしめたり。

流賊李自成

㈢明の滅亡。 明は神宗の時より課稅重く、國民その負擔に苦しみしが、李自成が陝西に反するに及びて（一六三二）、四方の流民これに響應し、明の北邊に事あるに乘じて北京に入れり。毅宗自殺し、明は二百七十七年にして滅べり（一六四四年、わが德川家光の時）。

清辮髮の命を下す

㈣清の一統。 清の世祖（太宗の子）はこれを機とし、明將吳三桂を助けて、李自成を伐つを名として支那の北部を定め、都を北京に遷し、辮髮の令を下してその風俗に從はしめたり（一六四五）。明の諸王は江南に據りて清軍の南下を防ぎ、また羅馬教皇及びわが國の援助を求めんとせしかど、皆成功せず。桂王（神宗の孫）は緬甸に入りしが、やがて清軍に獲られ、魯王（太祖十世の孫）は臺灣に退き、かくて支那本部は悉く清に歸せり。



敕命の寶（明の桂王の使用せし玉璽、明治四十一年雲南地方にて發掘す。璽の一邊は發掘の際缺損せり。實物は方四寸餘に及ぶ）

清臺灣を降す

㈤鄭成功。 明の遺臣に鄭成功といふ者あり。明人鄭芝龍の子にして、母はわが平戸の人なり。清が江南を平定するや、魯王を奉じて臺灣に退き、その地の和蘭人を逐ひてこれを占領せり（一六六一）。されど魯王、鄭成功相つぎて死し、世祖の子聖祖康熙帝の時、臺灣は遂に清の有となれり（一六八三）。

吳三桂の反亂

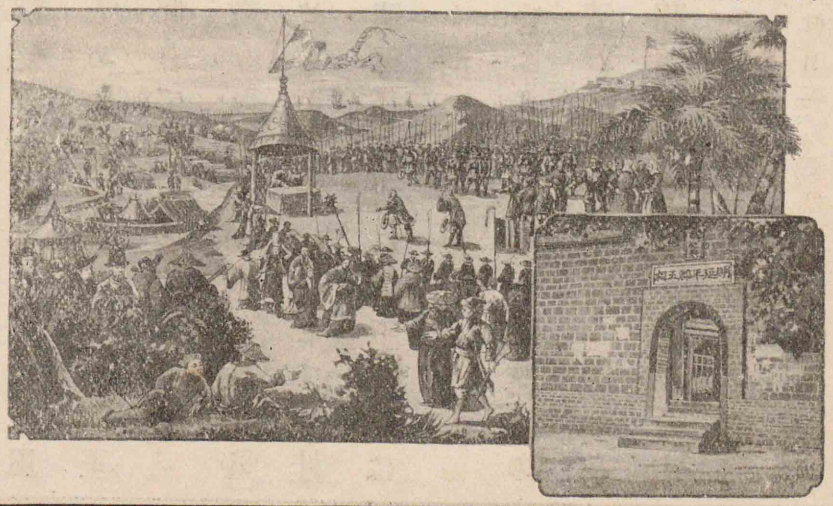
㈥三藩の亂。 曩に世祖は明の降將吳三桂を雲南に、尙可喜を廣東に、耿繼茂を福建に封じて、明の遺族を鎭壓せしめしに、天下平定の後、三藩自ら安んぜず、聖祖の時、吳三桂は遂に耿繼茂の子耿精忠、尙可喜の子尙之信と共に兵を擧げしが、數年の後、討ち平げられたり（一六八一）。

蘭人鄭成功に降服する圖及び鄭成功の祠

（祠は臺灣臺南に在り。圖は清初の銅版に據る）

第二章　清の塞外征略

征略



宗喀巴の喇嘛教革新

達賴喇嘛

達賴喇嘛の相續法

㈠紅教喇嘛及び黃教喇嘛。 西藏（即ち吐蕃）の喇嘛はもと紅衣、紅帽を著けしが故に、紅教喇嘛といふ。紅教喇嘛は元代より明初にかけて支那政府の尊信を受けしより、頗る驕惰となり、殊に妻子を蓄へ、弊害少からざりしかば、明の初に宗喀巴といふ者宗教改革を唱へ、新喇嘛教を建てたり。宗喀巴は黃衣、黃帽を著けしが故に、黃教喇嘛といふ。

㈡黃教喇嘛の勝利。 宗喀巴の死（一四一七）後、その後繼者は代々達賴喇嘛と號して、黃教喇嘛を總管せしが、黃教は次第に勢力を增し、後には西藏全土に遍く、また韃靼部長俺答の歸依を得てより、內外蒙古及び天山北路に流通するに至れり。

黃教は紅教に反對して妻帶を非認せしが故に、特異なる相續法を創設し、達賴喇嘛は世を辭するも、必ずその化身者出現して、衆生を濟度すとなせ

達賴喇嘛の選定（西藏探檢者の原圖に據る）

準噶爾部天山南路を併す

り。されば一達賴喇嘛入寂すれば、國中の小兒につきて化身者たるべき者を搜出して、達賴喇嘛とす。その候補者數人あるときは、各自の名を金瓶に納め、抽籤してこれを決定す。

㊂準噶爾部の强大。 衞拉（ウェラ）卽ち瓦剌部は、也先（イセン）の死後分裂して統一せざりしが、明末に至り、伊犂（イリ）地方の準噶爾（ジュンガル）部は衞拉部より起りて、遂にこれを統一し、更に西藏を威服し、また當時東察合台汗（チャガタイ）の衰微せしに乘じて、天山南路を併せたり。

内外蒙古清の版圖となる

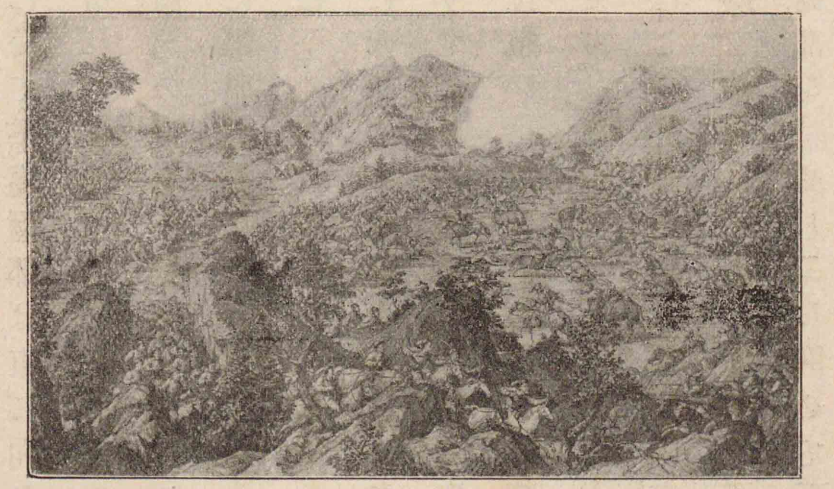
㊃清と準噶爾部との衝突。 是に於て準噶爾部は東に向ひて漠北蒙古部に侵入し、蒙古部敗れて、保護を清に請ひしかば、聖祖は親征して大いに準噶爾部の軍を土拉（ウラ）河畔に破れり（一六九六）。漠南蒙古部は曩に清に歸服し、漠北蒙古部も今また清に降服したれば、內外蒙古は全く清の版圖に入れり。

㊄西藏の征服。 準噶爾部は更に西藏の喇嘛の力を借りて恢復を圖りしが、清軍西藏に入りて喇嘛を征服し、ついで聖祖の子世宗（雍正帝）は駐藏大臣を拉撒（ラサ）西藏に置きてこれを鎭壓し（一七二四）、また青海地方をも占領せり。

㊅準噶爾部の討滅。 準噶爾部は、この失敗の後、なほ天山南路の回教徒と協力して、清の西邊を擾せり。清の世宗の子高宗（乾隆帝）は大軍を派して、準噶爾部を討滅し（一七五七）、併せて天

山南路を平定せり(一七六〇)。かくて天山南北兩路は全く清の有に歸したり。

⑦印度支那諸國の朝貢。 高宗は西北方面を平定し終ふるや、また西南方面の經略に從ひしかば、暹羅(シヤム)、緬甸(ビルマ)は皆清の封册を受けて、その朝貢國となれり。安南の大越國はその頃内亂起り、阮文惠といふ者、大越を滅して安南を一統せり(一七八六)。高宗はこの内亂に乘じて、安南を擊ちてこれを朝貢國たらしめたり(一七八九)。



得勝圖
(清軍の進嚕爾部征伐の實況を描きたるを、乾隆三七年歐洲にて銅版に附したるもの)

阮文惠安南を一統す

第三章　清の制度及び學術

①康熙乾隆時代。 清は滿洲より起り、次第に塞外を平定して大いに領土を拓きしが、この間にありて尤も功業の大なるは聖祖と高宗となり。聖祖は在位六十一年の久しきに亙り、外征の偉功に加へて、内治の績も甚だ大なり。高宗もまた在位六十年に及び、文武の功

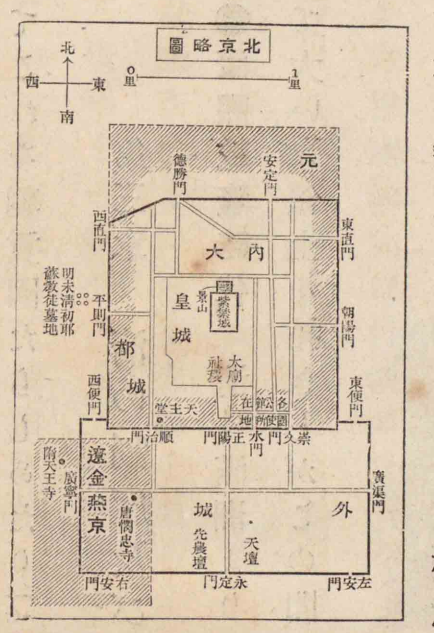
聖祖及び高宗の功業

高宗乾隆皇帝
(滿洲寫眞帖に收めたる奉天の宮城所藏の眞影による)

績の盛なることも聖祖に亞ぐ。世にこの二代を通稱して、康熙乾隆時代といふ。清の制度の備り、學術の盛となりしは、皆この時代のことなり。

㈡中央政府。 中央政府の組織は、上に內閣ありて、その大學士は天下の政務を總理し、軍機處ありて、その大臣は軍國の機務を議定せしが、やがて軍機處は天下の實權を握りて、大學士は閑職となれり。その下に吏、戶、禮、兵、刑、工の六部及び理藩院の尙書ありて行政を分擔す。六部の職掌は唐の六部に同じく、理藩院は藩部（內外蒙古、青海、西藏）を管す。

內閣及び軍機處



滿漢の調和

總督

巡撫、提督

八旗

これらの官吏は成るべく同數の滿人、漢人を併せ用ゐて、漢人の不平を避けたり。

㈢地方廳。 支那本部はこれを十八省（直隸、山東、山西、河南、江蘇、安徽、浙江、江西、福建、廣東、廣西、甘肅、陝西、四川、湖南、湖北、雲南、貴州）とし、天山南北兩路はこれを一省（新疆）とし、省の下に府、州、縣を置く。大抵二省毎に總督を置き、その管內に於ける文武の大權を統べしむ。その下に巡撫及び提督ありて、共に一省一人を常とし、巡撫は省內の民治を掌り、提督はその兵事を統ぶ。その下に知府、知州、知縣等ありて各、その管內を統治す。滿洲は三省（盛京、吉林、黑龍江）に分ち、各、將軍を置き、藩部は內蒙古のみ理藩院に直隸し、他は大臣を置きてこれを統ぶ。

㈣兵制。 清の兵制は八旗と綠旗とに分る。八旗は太祖の時、滿洲兵を八旗（正黃、正白、正紅、正藍、鑲黃、鑲白、鑲紅、鑲藍）に編制せしに始り、ついで蒙

古人、漢人を以て各、八旗を編制せり。八旗の兵は皇帝の親軍にして、滿洲及び京城を警衛するを主とし、また全帝國内の要地を守備す。各旗に都統ありてこれを統ぶ。綠旗は、明の滅亡後、專ら漢人を以て組織せし常備軍にして、支那本部の守備を主とし、各省の提督これを統ぶ。

綠旗

顧炎武

錢大昕

顧炎武等考證學を唱ふ

㊄考證學。 程朱學または陽明學の流行せし以來、學者は理論を尚び、事實の研究を忽にする弊ありしかば、清初に顧炎武出でて立論に證據を重んずる考證學を開けり。ついで閻若璩（エン）（學經）、錢大昕（キン）（史學）、段玉裁（字學）等の學者輩出せり。

聖祖、高宗は、大いに學術を奬勵し、學者を集めて有益なる書籍を敕撰せしめ、殊に高宗は天下の遺書を索め、圖書館を設くるなど、種々學者の便益を圖れり。

㊅耶蘇教士の任用。 明末よりジェスイット派の耶蘇教士の北京に來る者多かりしが、清の世祖の北京に入るや、アダム＝シャールを用ゐ、聖祖もフェルビースト（南懷仁）を用ゐて天文臺長となし、また同派の教士を用

湯若望及び南懷仁

湯若望（清初の銅版に據る）

曆法砲術數學繪畫の革新

て、始めて支那全國を測量製圖せり。その他、支那の曆法、砲術、數學、繪畫等もこれらの教士の力によりて大いに進歩せり。

㊐耶蘇教の禁止。 ジェスイット派はかく政府の信任を得し上に、その布教の方法は支那の舊慣と調和することを力めて、民間の好評を博せり。されど、他派の耶蘇教士は孔子及び祖先の祭を迷信として悉く排斥せしかば、世宗は耶蘇教を支那の國體に害ありと認めて、これを禁止し、政府任用外の教士を退去せしめたり（一七二三年、わが徳川吉宗の時）。

清の世宗の耶蘇教禁止はわが德川家光時代の島原の亂後八十六年に當る

清初印行の洋書

（康熙九年一六七〇年刊行の彌撒經典といふ書の口繪なり。北京にて木版に印刷せしもの）

第四章　莫臥兒帝國の興亡

英人の印度侵略

布哈拉及び基華二汗國の建設

㊀ウズベック族の南下。 明初に帖木兒の死して間もなく、その大帝國の分裂せしに乘じて、欽察汗に屬せしウズベック族南下し、中央亞細亞を占領して、布哈拉（ブカラ）、基華（キヴァ）の二汗國を建てたり。

莫臥兒帝國の建設

バベール

帖木兒五世の孫バベルは頻に恢復を圖りしが、成功せず、遂に印度に退き、こゝに莫臥兒（ムガール）帝國を興せり（一五二六年、明の世宗の世）。

㊁アクバル大帝。 印度の佛教は唐の中世より衰へ、これに代

印度の宗教上の爭

アクバル

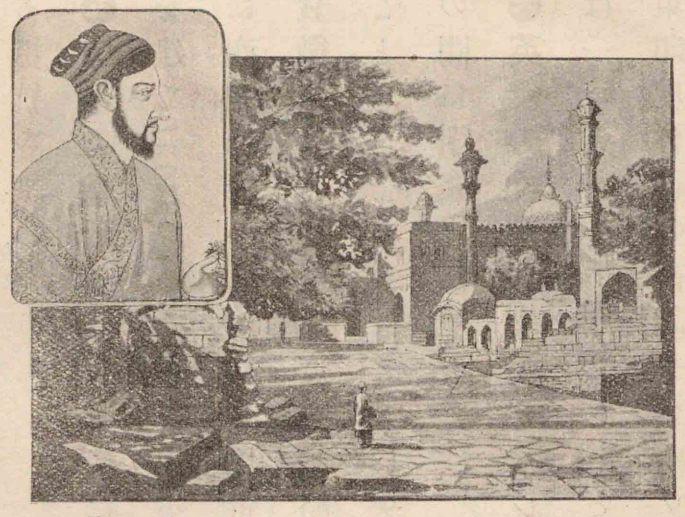
りて波羅門教の一新派なるヒンヅー教流行し、ついで宋初の頃より回教徒侵入して、次第に印度を占領せしかば、二教徒の爭絶えざりき。然るにバベルの孫アクバル位に卽くに及びて、自らヒンヅー教徒と婚を通じて、二教徒の感情を融和するに力めしかば、ヒンヅー教徒もこれに心服して、南印度の外、悉くその版圖に歸せり。

莫臥兒帝國の極盛（約三百五十年前）

㊂莫臥兒帝國の衰微。 アクバルの曾孫アウランゼブの時、始めて南印度を平定して、全印度を一統せり。されど、アウランゼブは回教を崇拜する餘り、ヒンヅー教徒を冷遇せし

アウランゼブの失政

アウランゼブ及びその廟（廟は印度デカン地方アウランガバッド市の西北に在り）



かば、かれらの反亂を企つる者多かりしに、アウランゼブの後嗣は概ね庸劣にして、これを鎭定すること能はざりき。かくて莫臥兒帝國の次第に衰微せしに乘じて、英人は印度侵略に著手せり。

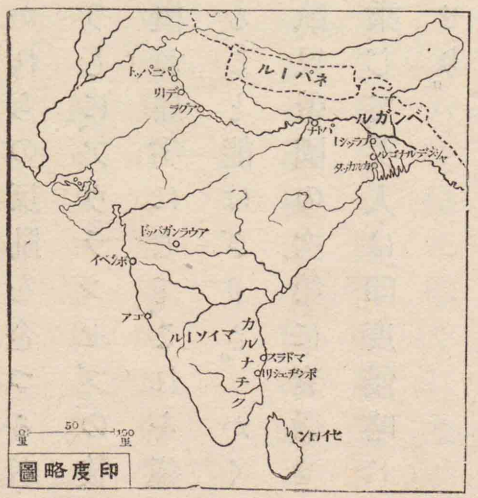
㊃英人の東漸。 葡萄牙人が東洋通商に成功せしより、英人もまた東印度會社を建て（一六〇〇）、東洋に來航せしかど、支那の貿易は蘭人に妨げられしかば、專ら印度に於ける商權の

印度に於ける英人の成功

擴張に從事し、マドラス、ボンベイ、カルカッタ等に順次に居留地を構へて、葡萄牙人、蘭人を壓倒せしが、獨り佛人は頑固なる抵抗を試みたり。

㊄佛人の東漸。 佛人もまた英人と殆ど同時に東印度會社を建て(一六〇四)、ついで印度のポンヂシェリー、シャンデルナゴル等に商館を構へしが、莫臥兒帝國の衰微を機として、印度を侵略せんことを企てしかば、こゝに英人との間に衝突起れり。

㊅英佛の攻爭。 佛人ヂュプレックスは一時英人を壓倒せしかど、英國東印度會社の書記クライヴは次



印度略圖

ヂュプレックス

プラッシーの勝利（約百五十年前）

クライヴ

第四章　英臥兒帝國の興亡　英人の印度侵略

第に英人の勢力を恢復し、ポンヂシェリー、シャンデルナゴルに據れる佛人を擊破せしかば、印度の商權は全く英人に歸せり。

クライヴは英國東印度會社の書記として印度に來りしが、勇敢なる彼は、久しからずして身を軍隊に投せり。ヂュプレックスが本國に歸りし後、クライヴはシャンデルナゴルを陷れ、僅に三千の兵を以て、佛人印度人の聯合軍七萬を大いにプラッシーに破れり(一七五七)。史家はこの勝利をさして印度に於ける英帝國建設の紀元とす。

㊆莫臥兒帝國の滅亡。 かくて英人

英人全印度を支配す

印度英國皇室の有に歸す

は佛人に代りて莫臥兒帝國の侵略に著手し、ヘースチングスが始めて印度總督となりてより(一七七四)、以後の總督皆この計畫を繼續し、遂に莫臥兒皇帝に年金を與へ、英人これに代りて全印度を支配せり(一八〇四)。莫臥兒皇帝は、後に印度傭兵の亂に與して位を奪はれ(一八五七)、莫臥兒帝國はこゝに滅べり。

(八)印度帝國。 この時に至るまで、印度は東印度會社の私有にして、會社の手にて印度の行政を統べしが、種々弊害を生ぜしかば、會社は廢止せられて、印度は英國皇室の有に歸せり(一八五八)。その後、英國は緬甸を併せ(一八八六年明治一九年)、また馬來半島の諸小國をも保護國とせり。

第五章　阿片戰役　長髪賊の亂

林則徐阿片の輸入を禁ず

南京條約締結の圖

(一八四二年(道光二二年)八月二十九日英國船中にて調印す。圖中の支那大官は全權委員伊里布、耆英等なり)

英清の開戰

(一)阿片問題。 英國の東印度會社は、印度に勢力を得てより、盛に印度の阿片(アヘン)を支那に輸入せり。これがために支那國民の身命を害するのみならず、正貨の流出多くして、物價騰貴せり。是に於て高宗の孫宣宗(道光帝)の時、林則徐は欽差大臣として廣東(カントン)に來り、外商の阿片を輸入するを嚴禁せしが(一八三九)、英商はなほ密賣を企てしかば、遂にその通商を禁ぜり。

(二)南京條約。 是に於て英國艦隊は貿易保護を名として、廣東、厦門(アモイ)福建、寧波(ニンポー)浙江

この開港はわが安政元年の開國に先だつこと十二年なり

等の諸港を封鎖し、更に南京に迫りしかば、清は遂に英國と南京條約を結びて、香港を割き、償金二千百萬弗を與へ、且上海・江蘇・寧波・廈門・福州福建・廣東の五港を開きて、和を請へり(一八四二)。

(三)長髮賊の興起。 阿片戰役後、清廷の威嚴の損ぜしに乘じて、洪秀全といふ者、亂を廣西に起し(一八五〇)、國を太平天國と號す。これを長髮剃頭辮髮せざるをいふ賊といふ。遂に湖南を取り、更に南京に據れり。八旗・綠旗の兵は已に老朽して、これを平定すること能はざりしかば、宣宗の子文宗咸豐帝は天下に詔して、勤王の兵を募れり。曾國藩・李鴻章・左宗

洪秀全の太平天國（約六十年前）

曾國藩及びその書

安政五年はわが井伊直弼が五國と假條約を結びし年なり

英佛同盟軍北京を陷る

洪秀全の策略

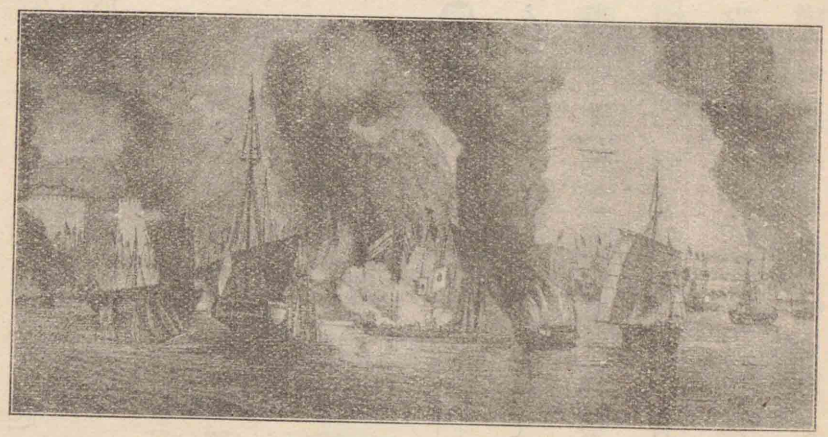
棠等所在に義勇兵を起して賊を破りしかど、賊勢なほ頗る盛なりき。

洪秀全は歐米人の同情を得んがために、耶蘇教を奉じて自ら耶蘇の弟と稱し、制度律令一に耶蘇教國に擬し、奴隸の賣買及び婦人の纏足を禁ぜり。また四方に檄を傳へて專ら滿人を排斥せし中に、「天下者中國之天下、非胡虜之天下也、寶位者中國之寶位、非胡虜之寶位也」の語あり。されば漢人のこれに響應する者、一時百萬に及び、十六省の地は賊の侵掠を被れり。

(四)英・佛の侵入。 この內亂の間に廣東の官吏は、罪人を捕へんとて英船に闖入して、紛議を起ししに、會佛國宣教師も廣西にて殺されしかば、英・佛聯合軍は天津に迫り、清國と假條約を結べり(一八五八年、安政五年)。されど清はその批准交換の使節を砲擊せしかば、兩國の兵は進んで天津・北京を陷れ、文宗は熱河直隸に遁れしが、遂に和を二國に請ひ(一八六〇)、償金千六百萬兩を出し、耶

蘇教の公布を許し、牛莊（ニューチャン）奉天、漢口（ハンカオ）湖北等の七港を開けり。

㊄長髪賊の平定。 かくて外國との葛藤解けたれば、清廷は專ら内亂の鎭定に從ひ、文宗の子穆宗（同治帝）の時、英人戈登（ゴルドン）等を招きて、洋槍隊（砲兵隊）を組織して屢賊徒を破り、遂に南京に逼りしかば（一八六四）、洪秀全自殺し、長髪賊全く平定せり。　されど、この内亂平定は主として漢人の力なるが故に、これより漢人の勢力强大となり、滿人の威光は衰へたり。



戈登の功業

南京攻撃（一八六三年（同治二年）六月官軍揚子江上より南京の賊軍を攻撃する實況）

戈登及び常勝軍

戈登の廉潔

戈登は初め英佛聯合軍に加りて北京に侵入せしが、和議成立の後、清國在留の歐米人が清廷の懇請によりて義勇兵を募りし時、その指揮官となれり。　戈登の陣に臨むや、常に彈丸雨注の間に立ちて、泰然自若たり。されば部下皆勇奮し、向ふ所勝たざるなく、常勝軍の名當時に高かりき。　後に清廷、戈登に酬ゆるに巨萬の財を以てせしに、辭して受けず。曰く「余は

戈登

たゞ不幸なる人民を塗炭の中より濟ふを目的とせり。國に歸らん日、一錢の蓄財あらしむるも、余の快とせざる所なり。」と。

第六章　露國の東亞及び中亞侵略

露國欽察汗國を滅す

㈠欽察汗國の滅亡。 帖木兒の死後、欽察汗國はその羈絆を脱せしかど、内訌繁くして、國勢漸く衰微せり。露西亞はこれを機として獨立し、更に欽察汗國を滅せり。

喀薩克兵の東侵

㈡露國の東侵。 この後、ドン河畔の喀薩克部長にエルマクといふ者あり、ウラル山を越え、シベリヤの地を略して、露國に獻ぜり(一五八三)。露國はこれより喀薩克をして益〻東進せしめ、遂に黑龍江流域に出でて、屢清兵と衝突せり。是に於て清の聖祖と露國のペートル大帝との使者は尼布楚外バイカル州に會合して、外興安嶺を兩國の境界と定めたり(一六八九)。

エルマク

尼布楚條約

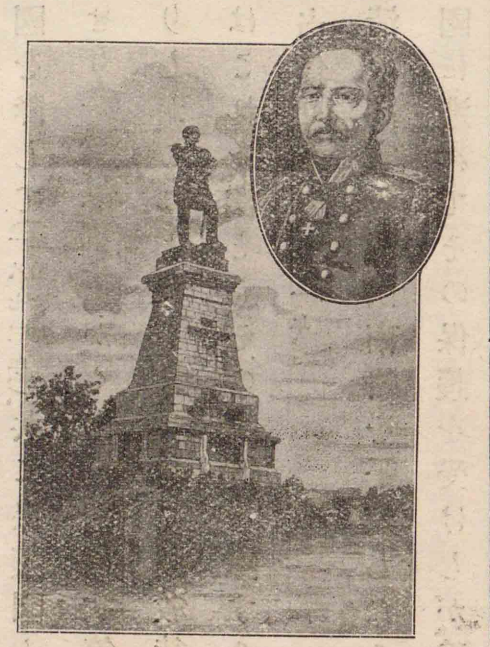
ムラヴィヨフ及びその銅像

㈢露國の滿洲侵略。 かくて聖祖はこの方面に屯田兵を置きて守備を嚴にせしが、長髮賊の内亂に乘じて露國は黑龍江以北を收め(一八五八)、英佛聯合軍侵入の時、更に烏蘇里江以東を獲得せり(一八六〇)。ついで露國はわが國と交渉して樺太島を得たり(一八七五年、明治八年)。

露國樺太を取る

ムラヴィヨフの功業

露國の滿洲侵略に最も功勞ありしはムラヴィヨフなり。ムラヴィヨフは一八四八年東部西伯利亞總督となりてより、頻に滿洲侵略を企て、一八五八年遂に清廷を脅迫し、愛琿條約を結びて、滿洲の東北半部を獲得せり。今ハ



バロフカに建設せられたるその銅像は、この偉業の記念なり。

四 三汗國の征服。 露國は東方侵略と共に中央亞細亞の侵略を企てたり。當時、中央亞細亞には基華(キワ)・布哈拉(ブハラ)の外、成吉思汗の後と稱する浩罕(コーカンド)汗國あり、三國鼎立して、相攻爭せしかば、露國は容易にその目的を達し、まづ布哈拉汗國を降し(一八六八年、明治元年)、ついで基華汗國を降して(一八七三年、明治六年)、共に保護國となし、更に浩罕汗國を滅せり(一八七六年、明治九年)。かくて、露國は次第に清と境を接するに至りしが、これよりさき、曾(ゾウ)清に回教徒の反亂起りしかば、露國はこれを機とし、その邊境を鎮するを名として伊犂(イリ)(天山北路)を占領せり(一八七一年、明治四年)。

五 回教徒の反亂。 曩に清の高宗の天山南路を平定したる時、回教徒は多く浩罕汗國に逃れて、その保護を受けしが、穆

露國伊犂を占領す

左宗棠及びその書

宗の時、清が內亂、外寇に疲弊せるに乘じて、天山南路に侵入せり。その地の回教徒もこれに響應して、勢頗る强かりしが、清將左宗棠は遂にこれを鎭定せり(一八七八年、明治一一年)。

六 伊犂條約。 是に於て清廷は露國にその軍を伊犂より退けんことを求めしかど、露國應ぜず、交渉、年を累ねしが、遂に清より償金(九百萬ルーブル)を支辨して、局を結べり(一八八一年、明治一四年)。

七 英露の衝突。 清との紛爭の落著したる後、露國は鋭意南侵を圖りて、メルフを取り、更にアフガニスタンに入り、ヘラットに迫れり。英國は露國の南下を以て印度の平和を害する

ヘラット及びパミール方面に於ける境界問題

ものとして、これに抗議し、遂に英露兩國より委員を派して境界を議定せり（一八八七年、明治二〇年）。露國は更にパミール方面を侵して印度に迫らんとし、英國との間にまた紛爭起りしが、兩國新に境界を議定して、局を結べり（一八九五年、明治二八年）。

第七章　佛國の印度支那侵略

耶蘇教士ピニョー

一越南の建國。 露國が中央亞細亞の侵略に從事する間に、佛國は著々印度支那方面にその勢力を扶植せり。明末、清初の頃より佛蘭西の耶蘇教士の安南に布教する者多かりしが、もとの王族に阮福映といふ者ありて、佛國宣教師ピニヨーの勸に從ひ、佛人の援助を求め、遂に阮文惠の子孫を滅し、清の封冊を受けて、安南に越南國を建てたり（一八〇二）。

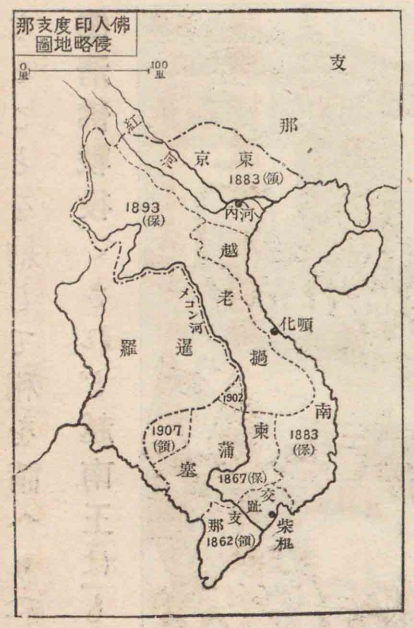
佛國の柴棍占領（約五十年前）

東蒲寨國佛國の保護に歸す（約五十年前）

越南佛國の保護國となる

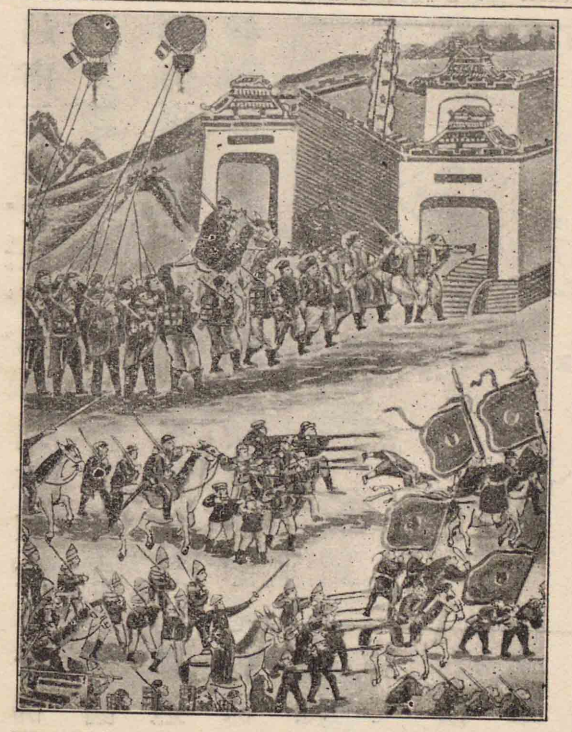
二佛國と越南との交渉。 然るに越南はこの後屢佛國の宣教師を虐待せしかば、佛國は兵を出して柴棍を占領し（一八五九）、越南王は交趾支那の地と償金とを佛國に與へて和を請へり（一八六二）。ついで東蒲寨國もまた佛國の保護に歸せり（一八六七）。

三佛越戰役。 やがて佛國は越南に迫りて、紅河航行の自由を承諾せしめ（一八七三年、明治六年）、ついでその保護を名として擅に東京地方に駐兵せり。是に於て越南王は佛人の不法を憤りて戰端を開きしが、佛軍が國都順化府を陷るに至りて、遂に東京地方を割き、且佛國の保護國と



なることを約して和を請へり（一八八三年、明治一六年）。

四 清佛戰役。 されど越南王は、もと清廷の封册を受けしが故に、清はこの講和に異議を唱へ、遂に清、佛の和親破れ、清の陸軍は東京に入り、佛の海軍は福建附近を攻撃し、更に臺灣の諸港を封鎖せしが、ついで兩國和を講じ、清は佛國が東京地方を占領することを承認せり（一八八五年、明治一八年）。



清佛交戰の圖（當時畫きたる東京地方に於ける二國交戰の有樣なり。銃を放ちて進擊するは佛兵にて、旗を持ちて退却するは清兵なり。圖の左側上邊に飛揚せるは佛軍の利用したる輕氣球なり）

清佛の講和

五 佛國と暹羅との交渉。 かくて佛國は交趾支那、東京を屬地とし越南、東蒲塞を保護國となししが、メコン河東岸の地は曾て東蒲塞及び越南に屬せしことを口實とし、暹羅を脅迫して、メコン河を境界となさしめたり（一八九三年、明治二六年）。

近世史摘要及び年表

近世期はわが後水尾天皇より明治二十七年に至り、支那にては清の興起より日清戰役に至るまで約二百八十年を包括す。この間最も注意すべきは、東西兩洋の交通大いに開け、その上歐人の勢力漸く東洋を壓したることにして、英國は印度及びバルマを併せ、佛國は安南、カンボヂャを從へ、露國はシベリヤ、中央亞細亞を占め、亞細亞大陸の大半は已に歐人の領土となれり。久しく東亞に覇を唱へし支那帝國もまた英、佛、露三國の壓迫を受けて大いにその國威を損せり。この期の末に亞細亞に於ける英、露、佛の領地の面積及びその亞細亞全土の面積に對する比例を示せば、大略左の如し。

	面積	比例
亞細亞大陸	約二百六十萬五千方里	一〇〇
英領地	約三十萬八千方里	一二
露領地	約百十二萬方里	四三
佛領地	約五萬方里	二

年代事蹟

年代			皇紀	西紀	東洋史	國史
明	成祖	稱光	二〇七七	一四一七	宗喀巴死す	
	世宗	後柏原	二二八六	一五二六	バベル莫臥兒帝國を興す	
	同	後奈良	二二二六	一五五六	莫臥兒帝アクバル卽位す	
	神宗	正親町	二二四三	一五八三	滿洲に弩爾哈赤出づ○露國シベリヤに出づ	
	同	後陽成	二二六〇	一六〇〇	英人東印度會社を建つ	
	同	同	二二六四	一六〇四	佛人東印度會社を起す	
	同	後水尾	二二七六	一六一六	弩爾哈赤皇帝を稱す	
	毅宗	明正	二二九一	一六三一	李自成亂を起す	
	同	同	二二九六	一六三六	後金國號を建てて清といふ	
	同	同	二二九七	一六三七	朝鮮清に降る	島原の亂起る
	同	後光明	二三〇四	一六四四	明滅ぶ	海外渡航を禁ず
	世祖	同	二三〇五	一六四五	清辮髮の令を下す	
	同	後西院	二三〇六	一六四六	莫臥兒帝アウランゼブ	

年代事蹟

年代			皇紀	西紀	東洋史	國史
	高宗	光格	二四五二	一七九二		
	仁宗	同	二四六二	一八〇二	越南國の設立	
	同	同	二四六四	一八〇四	莫臥兒帝國英人の保護に歸す	
	宣宗	仁孝	二四九九	一八三九	阿片問題起る	
	同	孝明	二五一〇	一八五〇	長髮賊起る	
	文宗	同	二五一三	一八五三		ペルリ來朝
	同	同	二五一四	一八五四		安政の開國
	同	同	二五一七	一八五七	莫臥兒帝國滅ぶ	
	同	同	二五一八	一八五八	露國黑龍江の北岸を占領す○印度英國皇室の有に歸す	露艦蝦夷に來る
	同	同	二五一九	一八五九	佛國柴棍を占領す	幕府米蘭露英佛の五國と假條約を結ぶ
	同	同	二五二〇	一八六〇	清英佛二國と和す○露國烏蘇里江の東岸を占領す	
	穆宗	同	二五二三	一八六三	越南佛國と和す	
	同	同	二五二三	一八六三	朝鮮王李熙立つ	櫻田の變
						英艦薩摩に寇す

近世史摘要及び年表

近世期はわが後水尾天皇より明治二十七年に至り、支那にては清の興起より日清戰役に至るまで約二百八十年を包括す。この間最も注意すべきは、東西兩洋の交通大いに開け、その上歐人の勢力漸く東洋を壓したることにして、英國は印度及びバルマを併せ、佛國は安南、カンボヂャを從へ、露國はシベリヤ、中央亞細亞を占め、亞細亞大陸の大半は已に歐人の領土となれり。久しく東亞に覇を唱へし支那帝國もまた英、佛、露三國の壓迫を受けて大いにその國威を損せり。この期の末に亞細亞に於ける英、露、佛の領地の面積及びその亞細亞全土の面積に對する比例を示せば、大略左の如し。

	面積	比例
亞細亞大陸	約二百六十萬五千方里	一〇〇
英領地	約三十萬八千方里	一二
露領地	約百十二萬方里	四三
佛領地	約五萬方里	二

年代事蹟

年代		皇紀	西紀	東洋史	國史
明	成祖	二〇七七	一四一七	宗喀巴死す	
同	世宗 稱光	二一八六	一五二六	バベル莫臥兒帝國を興す	
同	後奈良	二二一六	一五五六	莫臥兒帝アクバル即位す	
同	神宗 正親町	二二四三	一五八三	滿洲に弩爾哈赤出づ○露國シベリヤに出づ	
同	後陽成	二二六〇	一六〇〇	英人東印度會社を建つ	
同	同	二二六四	一六〇四	佛人東印度會社を起す	
同	後水尾	二二七六	一六一六	弩爾哈赤皇帝を稱す	
同	毅宗 明正	二二九一	一六二一	李自成亂を起す	
同	同	二二九六	一六二六	後金國號を建てて清といふ	海外渡航を禁ず
同	同	二二九七	一六二七	朝鮮清に降る	島原の亂起る
同	後光明	二三〇四	一六四四	明滅ぶ	
清	世祖	二三〇五	一六四五	清辮髮の令を下す	
同	後西院	二三一八	一六五八	莫臥兒帝アウランゼブ即位す	
同	聖祖	二三二一	一六六一	鄭成功臺灣に據る	
同	同	二三二九	一六六九		明人朱舜水來朝
同	靈元	二三三三	一六七三	三藩の亂起る	
同	同	二三三八	一六七八	準噶爾部天山南路を併す	
同	同	二三四一	一六八一	三藩の亂平ぐ	
同	同	二三四三	一六八三	臺灣清領に歸す	
同	同	二三四九	一六八九	尼布楚條約	
同	同	二三五六	一六九六	清の聖祖準噶爾部を破る	
同	同	二三八〇	一七一〇	佛人ヂュプレッグス印度に來る	
同	世宗	二三八四	一七一四	清駐藏大臣を置く	
同	高宗 櫻町	二四〇四	一七四四	英人クライヴ印度に來る	
同	桃園	二四一七	一七五七	清準噶爾部を滅す○プラッシーの勝利	
同	同	二四二〇	一七六〇	清天山南路を併す	
同	後桃園	二四三四	一七七四	ヘースチングス始めて印度總督となる	
同	光格	二四四六	一七八六	暹羅清に朝貢す	
同	同	二四四九	一七八九	安南清に朝貢す	
同	同	二四五〇	一七九〇	緬甸清に朝貢す	

年代事蹟

年代		皇紀	西紀	東洋史	國史
清	高宗 光格	二四五二	一七九二		露艦蝦夷に來る
同	仁宗 同	二四六二	一八〇二	越南國の設立	
同	同	二四六四	一八〇四	莫臥兒帝國英人の保護に歸す	
同	宣宗 仁孝	二四九九	一八三九	阿片問題起る	
同	孝明	二五一〇	一八五〇	長髮賊起る	
同	文宗	二五一三	一八五三		ペルリ來朝
同	同	二五一四	一八五四		安政の開國
同	同	二五一七	一八五七	莫臥兒帝國滅ぶ	
同	同	二五一八	一八五八	露國黑龍江の北岸を占領す○印度英國皇室の有に歸す	
同	同	二五一九	一八五九	佛國柴棍を占領す	
同	同	二五二〇	一八六〇	清英佛二國と和す○露國烏蘇里江の東岸を占領す	
同	穆宗	二五二二	一八六二	越南佛國と和す	
同	同	二五二三	一八六三	朝鮮王李熙立つ	
同	同	二五二四	一八六四	長髮賊の亂平定す	英艦薩摩に寇す
同	明治	二五二七	一八六七	佛國東蒲塞を保護國とす	英佛米蘭の四國長州に寇す
同	明治元	二五二八	一八六八	露國布哈拉汗國を降す	王政復古
同	同	二五二二	一八七二	露國基華汗國を降す	五條御誓文
同	同	二五二四	一八七四		征韓論起る
同	德宗	二五二五	一八七五	露國樺太島を得	臺灣征伐
同	同	二五二六	一八七六	露國浩罕汗國を滅す	朝鮮と通商條約を結ぶ
同	同	二五三七	一八七七	英國女王印度女帝の尊號を稱す	西南の役
同	同	二五四一	一八八一	伊犂問題定る	
同	同	二五四二	一八八二		朝鮮の亂民わが公使館を燒く
同	同	二五四三	一八八三	越南佛國の保護國となる	
同	同	二五四四	一八八四	朝鮮に於ける日清の守備隊衝突す	
同	同	二五四五	一八八五	天津條約成る○清佛戰役終る	
同	同	二五四六	一八八六	緬甸全く英領に歸す	
同	同	二五四七	一八八七	ヘラット方面に於ける境界問題定る	
同	同	二五五二	一八九二	佛國メコン河岸の地を占領す	

第五篇　現代期（一八九四年以後）

第一章　日清戰役

西太后

日本と朝鮮との關係

㊀西太后と德宗。 清の穆宗死して嗣子なく、その從弟德宗光緒帝立ち（一八七四年、明治七年）、年僅に四歲なりしかば、穆宗の母西太后は垂簾の政を行ふこと十五年にして、政を還せり（一八八九年、明治二二年）。德宗政を親らすると間もなく、日清戰役起れり。

㊁朝鮮の開國。 わが國と朝鮮との通交は、德川時代の初よ

り舊に復せしが、維新の後、わが國は朝鮮に迫りて通商條約を結ばしめ（明治九年一八七六年）、ついで歐米諸國もこれに倣ひしかば、朝鮮は始めて世界に開放せられたり。かくてわが國は、朝鮮の獨立を保護するに力を盡くしに、清は依然その國政に干渉せしかば、日清兩國は朝鮮問題に關して多く意見の一致を缺けり。

日本と清國との葛藤

㊂日清開戰。 明治二十七年（一八九四）朝鮮に東學黨の亂起るや、この内亂の處置について日清兩國の間に異議生じ、わが國は清が朝鮮の獨立を危くするを恐れ、その年八月遂に戰を宣して、連りに清軍を破れり。

㊃日清講和。 是に於て清は和を請ひ、翌年（一八九五）四月清の李鴻章は、來りてわが伊藤博文と下關に會議し、清は朝鮮の獨立國なることを承認し、償金二億兩（約三億圓）を出し、遼東半島及び臺灣、澎湖島を割讓し、沙市（湖北）、重慶（四川）、蘇州（江蘇）、杭州（浙江）を開放することを約せり。

下關條約

李鴻章及び上海に建設せるその銅像

㊄三國の抗議。 然るに當時露西亞は、ウラヂウォストックを建てて太平洋方面の根據地となし（一八六一）、ついで西伯利亞鐵道の敷設に從ひ、專ら力を東亞の侵略に用ゐしかば、わが國が遼東半島を領有するを好まず、獨逸及び佛蘭西を連ねて異議を唱へしかば、わが國はこれを納れ、代償金三千萬

露國の東亞經略

遼東還附

兩（約四千五百萬圓）を受けて遼東半島を清に還附せり。

第二章　義和團の亂

諸強國支那の要港を占領す

㊀諸外國の强請。 清はわが國との戰に敗れて多大の損害を蒙りしのみならず、諸外國にその弱勢を觀破せられて、種種の强請を受けたり。佛國は遼東還附に干涉せし報酬として廣東・廣西・雲南の鑛山採掘權を得（一八九五年、明治二八年）、露國は滿洲を貫きて西伯利亞鐵道を敷設することを許され（一八九六年、明治二九年）、獨逸は宣教師の殺されしを口實として膠州灣（山東）を租借し、併せて山東省内の利權を得（一八九八年、明治三一年）、ついで露國は旅順口及び大連灣（奉天）を含める遼東半島の租借權と、滿洲南部を貫く鐵道の敷設權とを得（同年）、佛國は廣州灣（廣東）を借り受けた

り（一八九九年、明治三二年）。この間に英國もまた威海衞を借りて權衡を保てり（明治三一年）。かくて支那分割の說行はるゝに至れり。

康有爲の改革計畫

㊁戊戌の政變。 されば清人の志あるものは時事に感憤して變法自强の必要を唱へ、中にも廣東の儒者康有爲の如きは屢改革意見を上疏せしかば、德宗はこれを登庸して、共に種種の急激なる改革を企てたり。されど西太后はこれを喜ばず、遂に德宗を幽して再び國政を執り、康有爲は海外に遁れ、改革黨は多く殺戮せられたり（明治三一年、戊戌年）。こは戊戌（じゅつ）の年の事件なれば、世に戊戌の政變といふ。

西太后再び政權を握る

清人の外國人を排斥する由來

㊂義和團の亂。 曩に耶蘇教の公許せられてより、その教士の清國に布教するもの多かりしが、往々官民と衝突を起し、清人は一般に耶蘇教を嫌へり。殊に諸外國が清國に强迫

を加へし以來、清人の外人に對する反感益〻高く、遂に西教撲滅、外人排斥を主意とせる義和團といふ暴徒、山東省に起れり（明治三二年）。彼等はやがて清の皇族、大臣の保護を受けて北京に入り、清軍と協力して、列國の公使館を攻撃せり（一九〇〇年、明治三三年）。

義和團及び清兵の列國公使館攻撃の圖
（圖中の獅子は各國公使館等の門前に安置せる石獅子なり。左方石獅子の下に銃の臺尻を振りあげ居るは日本兵なるべし）

四 聯合軍の北京占領。 是に於て日、英、米、露、佛、獨等の聯合軍は大沽（タイクー）（直隸）を陷れ、天津を取り、北京に入りて公使館を救へり。德宗は西太后と共に一時西安府（陝西）に出奔せしが、慶親王、李鴻章をして和を請はしめ、列國は四億五千萬兩（六億千萬圓餘）の賠償金、暴擧主謀者の嚴刑等を命じて、これを許せり（一九〇一年、明治三四年）。

第三章　日露戰役

一 門戸開放、領土保全。 支那通商に熱心なる米國は、曩に支那に於ける門戸開放を唱へて列國の同意を得（明治三二年）、支那の領土保全もついで英獨協商によりてまた列國に承認せられたれば（明治三三年）、支那分割の說漸くやみたり。

二 日露開戰。 然るに露國は義和團の亂に乘じて滿洲を占領し、平和に復したる後も滿洲より撤兵せざるのみならず、更に韓の北境を威迫してその主權を蹂躪せしかば、わが國は自國の安全と東亞の平和とのために、遂に露國に對して

戰を宣するに至れり。實に明治三十七年(一九〇四)二月なり。

㊂日露講和。 これより兩國の交戰一年半に亙り、わが國は海に陸に連勝せしが、米國大統領ルーズヴェルトの勸告を容れ、全權委員小村壽太郎等を派して、露國の全權委員ウィッテ等と米國ポーツマスに會せしめ、明治三十八年(一九〇五)九月、(一)露國をして韓に對する日本の宗主權を承認せしめ、(二)滿洲より撤兵せしめ、(三)その清より受けたる遼

ポーツマス講和會議

東半島の租借權及び長春(吉林)より旅順口に至る間の鐵道を日本に讓與せしめ、(四)樺太の南半を日本に割讓せしめて、和を講ぜり。

わが國と英國との關係

㊃日英同盟。 曩に露國の滿洲を占領せし時より、日英兩國は東亞の平和を目的とせる同盟を結びしが(一九〇二年明治三五年)、日露戰役中に兩國は東亞及び印度の平和を保ち、この方面に於ける兩國の利益を全くせんがために、前の同盟を擴張して、一層鞏固なる新同盟を結べり(明治三八年八月)。

亞細亞人の亞細亞

㊄黃禍說。 わが國の戰勝は少からず亞細亞人を刺戟(しげき)し、東亞に關係深き諸強國をして不安を感ずるに至らしめ、はては黃禍として、日本を中心とせる黃色人種が勃興して白人種を迫害すべしといふ說、流行するに至れり。

わが國と佛露との關係

わが國と米國との關係

㈥佛露との協約。 是に於てわが國は東亞に領土を有する歐洲強國との關係の親善を圖り、まづ佛國との間に相互及び清の領土の保全を目的として日佛協約を結び（一九〇七年、明治四〇年六月）、ついで露國とも同じ目的の日露協約を結べり（同年七月）。

㈦日米覺書。 米國はもと領土を海外に拓かざりしが、後にハワイを併せ（一八九八年、明治三一年）、またフィリッピン諸島を領し（同年）、その太平洋上に於ける關係深きを加へしかば、わが國は更に米國とも覺書を交換して、相互及び清の領土の保全と、清國に於ける商工業の均等主義とを約せり（一九〇八年、明治四一年十一月）。

㈧日本の韓國併合。 朝鮮は曩に國號を韓と改め（明治三〇年）、日露戰役の後、わが國はその宗主國となりて、國政の改善に力を盡くししが、十分の效果を得ること能はざりしかば、これを

清の國會開設の準備

併合して、一切の統治權を繼承し、韓國を改めて朝鮮と稱し、總督府を開きてその政務を統べしめたり（明治四三年八月）。

第四章　清の滅亡

㈠清國の覺醒。 これよりさき、清はわが國の成功と發展とに鑑みて、政體革新の必要を覺り、遂に國內に立憲豫備の上諭を發し（明治三九年）、ついで十年の後に國會を開設すべきことを豫約せり（明治四一年）。やがて德宗、西太后共に世を辭し、宣統帝（德宗の從子）の位に卽きたり。年僅に三歲。その父醇

宣統帝及びその父醇親王

（中央なるは醇親王、側に立てるは宣統帝、醇親王の抱けるは宣統帝の弟）

西太后の辭世

親王國政を攝し、民間の輿論に聽きて國會開設の期限を早め、ついで從來の內閣、軍機處を廢して、新に內閣官制を定めたり（明治四四年五月）。

㈡革命黨の憤起。 漢人のうちには、かねて滿人に反抗して清朝を覆さんと志すものあり、これを革命黨といふ。孫文（逸仙）その黨首たり。清の外交、內治の振はざると共に、革命黨の勢漸く盛となり、會（たまゝ）清廷が鐵道國有を計畫して人心の動搖を起したるに乘じて、彼等は兵を武昌（湖北）に擧げ（明治四四年十月）、黎元洪を推して都督となせり。南部、中部の各省相ついでこれに應じ、

孫文及びその書

孫文臨時大總統となる

宣統帝の退位

遂に假共和政府を南京に建て、孫文を推して臨時大總統となせり（同年十二月）。

㈢清の滅亡。 清廷は滿人の不人望を察し、醇親王の攝政をやめ、專ら袁世凱をして時局に當り、孫文と交渉せしめしが、遂に袁世凱の勸告により、民意に從ひて共和政體を認め、宣統帝は皇帝の尊號と年金とを得て、その統治權を棄てたり（明治四五年二月）。清は中國に君臨すること二百六十八年にして滅べり。かくて有史以來の大君主國倒れて、東洋に始めて共和國を見るに至れり。

第五章　中華民國（上）

㈠支那共和國。 孫文はやがてその職を辭し、袁世凱は當時

袁世凱中華民國の假大總統となる

第二回革命軍起る

袁世凱及びその書

南京に開かれたる全國各省代表者の會合と稱する參議院より推されて、中華民國の假大總統となり、翌年民國第一回の國會を開けり。されど舊革命黨は袁世凱の施政に平ならずして、第二回の革命軍を起したれど、失敗し、その首領は多く海外に遁れ去れり。

是に於て袁世凱は改めて第一期の大總統に、黎元洪は副總統に當選し、同時に支那共和國は正式に列國の承認を得たり（大正二年十月）。

㈡日獨開戰。 大正三年に世界戰役起り、英、獨二國戰を開くや（一九一四年、大正三年八月）、わが國は東亞の平和を保たんがために、獨逸に

膠州灣占領

日支條約成る

袁世凱の國體變更の計畫

對して、その艦艇の日本海及び支那海方面より退去し、且膠州灣租借地を支那に還附せんことを勸告せり。されど獨逸は應ぜざりしかば、わが國は遂に戰を宣して、膠州灣を占領せり（大正三年十一月）。

㈢日支交渉。 是に於てわが國は支那政府に交渉を開き、(一)わが國が山東省に於ける獨逸の利權を繼承すること、(二)遼東半島の租借年限を延長すること、(三)わが國が南滿洲及び東部內蒙古に優越權を有することを承認せしめて、膠州灣を支那に還附することを約せり（大正四年五月）。

㈣袁世凱の失敗。 この間に袁世凱はその權力を擴張することに力を盡くし、まづ國會議員中の反對者を放逐し（大正二年十二月）、ついで國會を停止し（同三年一月）、最後にわが國及び英、露、佛、伊

諸國の忠告を無視し、國民の勸進に從ふと稱して、民國を廢して帝制を起し、自らその帝位に卽くべきことを宣言せり(同四年十二月)。かねて袁世凱に反對せる舊革命黨は、この機に乘じて、共和擁護を名として兵を雲南に擧げ、貴州、廣西、廣東、江西の南方の諸省、前後これに應じ、討袁軍の勢日に强くなれり。

討袁軍起る

袁世凱はやむことを得ずして帝制を撤回し、間もなく憤悶の裡に死せり(同五年六月)。

黎元洪大總統となる

㊄黎元洪時代。 是に於て副總統黎元洪は大總統となり、帝制首唱者を黜罰(ちゅつばつ)し、國會を再興したれば、討袁軍も兵を戢(をさ)め、南北暫く融合の姿をなせり。されど間もなく參戰問題起り、國務總理段祺瑞が聯合國に與(くみ)して獨逸、墺太利に宣戰せんとするや、國會はこれに反對して、內閣と國會と兩立し難

國會と內閣との確執

黎元洪及びその書

督軍の獨立と張勳の復辟

き有樣となれり。依りて黎元洪は段祺瑞の職を免ぜしに、北方の督軍等これに不平を懷き、各〻兵を擧げて北京に逼れり(同六年五月)。黎元洪狼狽して安徽の督軍張勳に時局の收拾を依賴せしに、張勳は黎元洪を强ひてまづ國會を解散せしめ、ついで北京に入りて清朝を再興せしが(同年七月)、僅に十二日にして失敗し、民國復活せり。この間に黎元洪は責を負ひて、大總統を辭せしかば、副總統馮國璋は大總統の職を代行せり。

㊅南北對抗。 馮國璋はまづ獨、墺に宣戰し(大正六年八月)、ついで新國

徐世昌大總統となる

徐世昌及びその書

廣東の軍政府

會を召集せり（同七年八月）。第一次大總統の期限盡くるや、徐世昌はこの新國會より選ばれて大總統となれり（同年十月）。曩に國會の解散せられたるとき、議員の多數は難を南方に避けしが、民國の復活するに及んで、彼等は舊國會の再興を主張し、遂に廣東に軍政府を建て、孫文を擁して大元帥となし（同六年九月）、西南五省（廣東、廣西、雲南、貴州、四川）、これに味方せり。かくて民國に南北の兩政府と新舊の兩國會と對立の姿をなせり。

第六章　中華民國（下）

孫文南方の大總統となる

活佛

（一）和平會議。 間もなく世界戰役の休止となるや、南北政府は日、英、米、佛、伊五國の勸告に聽き、各代表を選出して、上海に和平會議を開けり（大正八年二月）。されど雙方の主張一致せざるが上に、南北共に內訌多く、二年又半を經て未だ和平成立せず。この間に孫文の南方の大總統に就任するありて（同十年五月）、國內の統一は一層困難となれり。

（二）外蒙古と西藏。 外蒙古は清朝の滅ぶると間もなく、露國の後援を得て獨立を企て、ついで露、支の交渉によりて外蒙古は支那の宗主權を認むる代りに自治權を得（大正四年）、一旦落著せしが、その後、反過激派の露人、外蒙古に入り來り、支那の

露國と外蒙古の獨立運動

達賴喇嘛

英國と西藏の獨立運動

官吏を放逐し、庫倫の活佛を擁して獨立を宣言せり（同十年二月）。西藏も畧同時に英國の後援によりて獨立を企て、爾來この問題は英・支の懸案として今日に至り、その間西藏は達賴喇嘛の下に獨立の姿をなせり。内には統一成らず、外には領土の解體するあり、民國の前途多事なりといふべし。

㊂山東問題。 かねて支那は大正四年の日支條約に不滿を懷きしが、大正八年一月巴里に列國講和會議の開かれたる時、支那はその獨逸に宣戰せしを口實に、この條約を破棄して獨逸より直接に山東の還附を求めんことに努力せり。この努力の失敗するや、支那國内に激しき排日運動起り（大正八年五月）、

支那に於ける排日運動

日米の紳士協約

爾來日支の關係頗る圓滿を缺き、わが國が講和條約にて獨逸より繼承せる山東を支那に還附せんとする再三の交渉をも、支那政府は常に拒絶せり。

㊃日・米・支の關係。 米國は義和團の亂後、常に支那の歡心を得るに努め、殊に山東問題につきて終始支那に後援せしかば、支那人の米國に信賴すること日に厚きを加へ來れり。これに反して日露戰役後、わが國人の米國に移住するもの多きを加ふると共に、米國諸地方に排日運動始れり。わが國は米國との間に所謂紳士協約を結びて（一九〇八年、明治四一年）、その緩和に努めしかど、十分に成功せず、またわが國の滿・蒙に於ける發展について、時に米人の誤解を招きたれば、兩國は新に覺書を交換して（一九一七年、大正六年十一月）、その疏通を圖れり。されどその效

米國の排日親支

果十分ならず。かくて米國に於ける排日、親支の傾向頗る顯著となれり。

㊄東亞の現狀。 わが國は世界戰役によりて一段の發展を加へ、講和會議には英、米、佛、伊と共に五大强國の一に列せり。米國はこの戰役の間に尤も目覺しき發展を遂げ、その偉大なる富力と海軍とを以て今後太平洋方面に活動せんとす。

太平洋方面の四大勢力

これに英、佛を加へたる四大强國にて東亞の大勢は左右せらるゝこととなれり。露國は國情不安のため、獨逸は戰敗のため、共に東亞に於ける從前の勢力を失へり。

軍備制限

㊅華盛頓會議。 米國の大統領ハーヂングは最近の戰禍に鑑み、將來の平和のために列强の軍備を制限し、併せて太平洋問題及び極東問題を討議せんとて、日、英、米、佛、伊五大强國の會議を開かんことを提議して（一九二一年、大正十年八月）、各國の贊同を得たり。かくてこの十一月に五國は米國の華盛頓（ワシントン）に會合し、支那もこれに參列することとなれり。

現代史摘要及び年表

現代期は日清戰役より現今に至る約三十年間を包む。この期間に於ける重要事件はわが國の勃興なり。日清戰役、日露戰役を經て國威を揚げ來りし日本は、最近の大戰役によりて、遂に世界の五大强國の一に列するを得たり。東亞の小國たりし日本が三十年の間に世界の大國となりしは、目覺しき發展といはざるべからず。かくて支那の立憲政體採用といひ、その共和政體の成立といひ、朝鮮の併合といひ、亞細亞人の間に亞細亞人の亞細亞といふ思想の發生せることといひ、米、支二國の排日運動といひ、この期間に起れる事件は皆わが國の勃興の影響といふべし。されど飜つてわが國の實際を見れば、あらゆる方面に於て、未だ遠く英、米二國に及ばざるを覺ゆ。わが國民たるもの決して今日の小成に安んぜず、更に一段の努力によりて、平和の裡に國力の發展を期せざるべからず。

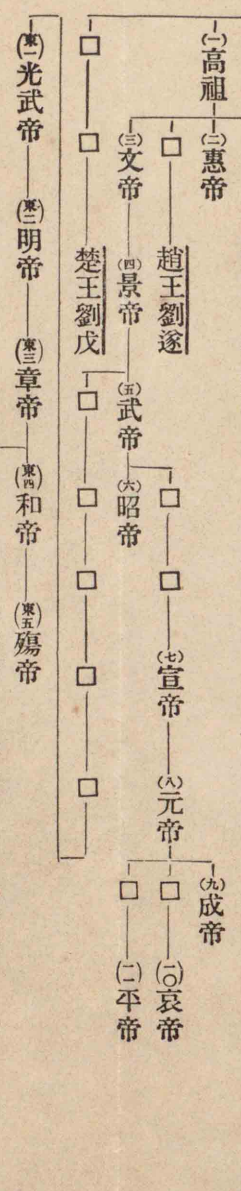
年代		皇紀	西紀	東洋史	國史
清					
德宗	明治九	二五二六	一八七六		朝鮮と通商條約を結ぶ
同	同 一三	二五四九	一八八九		憲法發布
同	同 一七	二五五四	一八九四	東學黨の亂起る○日清戰役起る	
同	同 二八	二五五五	一八九五	下關條約成る○パミール問題定る	
同	同 三〇	二五七七	一八九七	朝鮮國號を韓と改む	
同	同 三一	二五五八	一八九八	獨露英の三國清の港灣を租借す○清の改革黨の失敗	
同	同 三二	二五五九	一八九九	佛國廣州灣を租借す○義和團の亂起る	
同	同 三三	二五六〇	一九〇〇	列國軍北京を占領す○露國滿洲を占領す	
同	同 三四	二五六一	一九〇一	清列國と和す	
同	同 三五	二五六二	一九〇二	露國滿洲撤兵を宣言す	日英同盟成る
同	同 三七	二五六四	一九〇四	日露の開戰	
同	同 三八	二五六五	一九〇五	日露講和成る	日英同盟の擴張○日韓協約成る
同	同 四〇	二五六七	一九〇七		日韓協約の擴張○日佛協約及び日露協約成る
同	同 四一	二五六八	一九〇八	西太后及び德宗の辭世	日米覺書の交換○紳士協約成る

年代		皇紀	西紀	東洋史	國史
清					
宣統帝	明治四三	二五七〇	一九一〇		韓國併合
同	同 四四	二五七一	一九一一	革命黨の憤起	
同	同 四五	二五七二	一九一二	清の滅亡○袁世凱中華民國の假大總統となる	明治天皇崩御
支那共和國	大正二	二五七三	一九一三	第二回革命軍起る○袁世凱大總統となる○支那共和國の承認	
	同 三	二五七四	一九一四	日獨戰役	
	同 四	二五七五	一九一五	日支條約成る○討袁軍起る	世界戰役開く
	同 五	二五七六	一九一六	袁世凱死す○黎元洪大總統となる	
	同 六	二五七七	一九一七	張勳清朝を再興して失敗す○軍政府の開設○支那參戰	日米共同宣言
	同 七	二五七八	一九一八	徐世昌大總統となる	世界戰役休止
	同 八	二五七九	一九一九	南北和平會議を開く○排日運動起る	巴里に講和會議開かる
	同 一〇	二五八一	一九二一	外蒙古の獨立宣言○孫文南方大總統となる	華盛頓會議開く

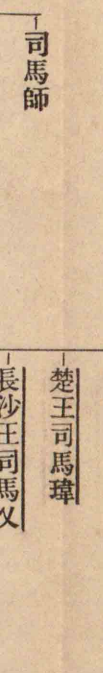
附錄

歷代世系 その一

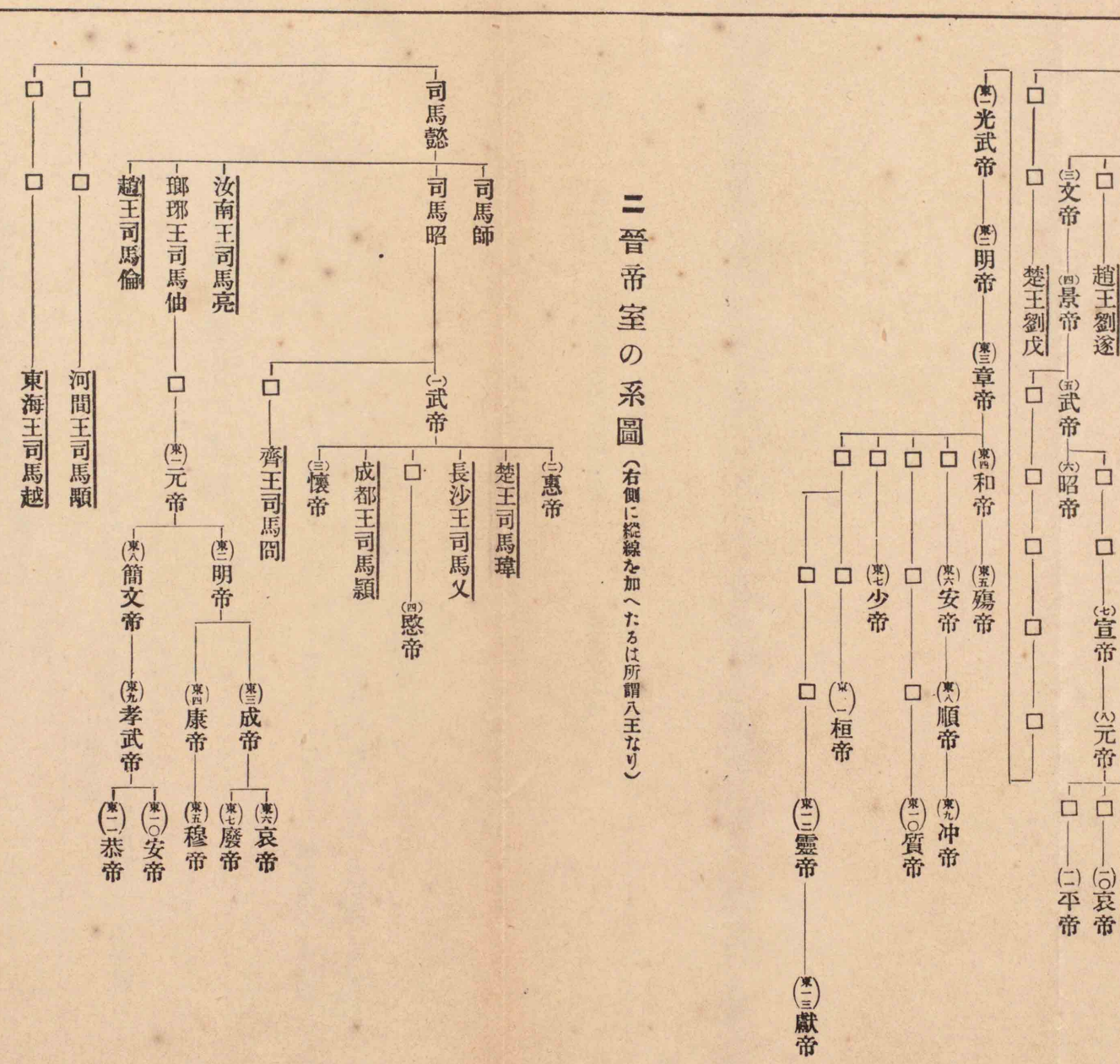
一 漢帝室の系圖（右側に縱線を加へたるは吳楚七國の王なり）



二 晉帝室の系圖（右側に縱線を加へたるは所謂八王なり）

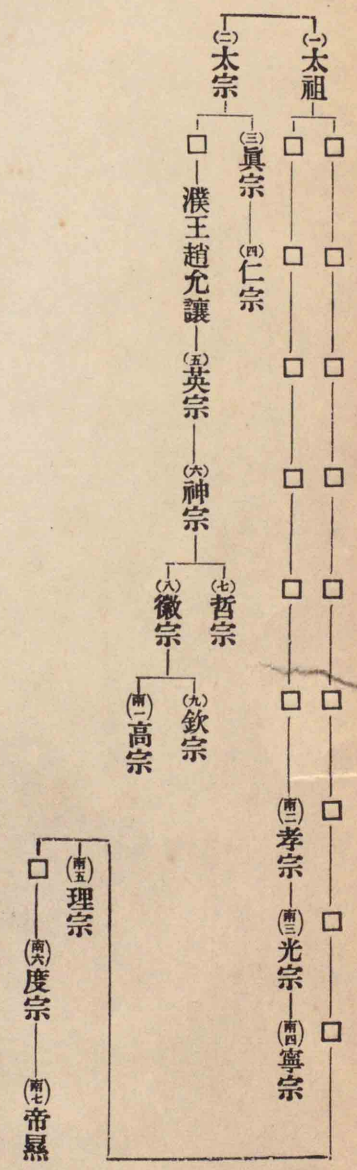


二 晉帝室の系圖（右側に縱線を加へたるは所謂八王なり）


司馬懿
司馬師
司馬昭
(一)武帝
(二)惠帝
楚王司馬瑋
長沙王司馬乂
□
(四)愍帝
成都王司馬穎
(三)懷帝
齊王司馬冏
□
(東一)元帝
(東二)明帝
(東三)成帝
(東四)康帝
(東五)穆帝
(東六)哀帝
(東七)廢帝
(東八)簡文帝
(東九)孝武帝
(東一〇)安帝
(東一一)恭帝
□
□
□
東海王司馬越
河間王司馬顒
□
□
趙王司馬倫
瑯琊王司馬伷
汝南王司馬亮
趙王劉遂
(三)文帝
(四)景帝
(五)武帝
(六)昭帝
□
□
□

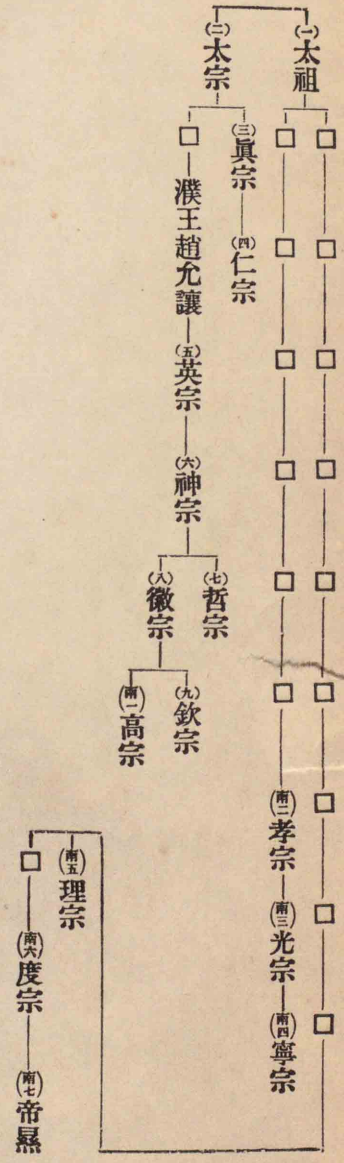
歴代世系 その二

四 宋帝室の系圖


(一)太祖
□
□
□

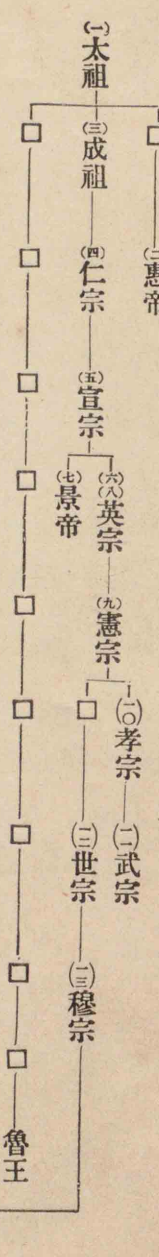
歴代世系 その二

四 宋帝室の系圖

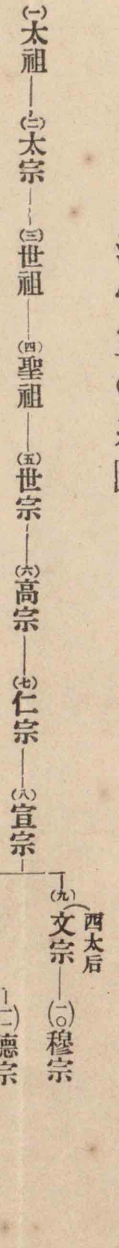

(一)太祖
□
□
□

歷代世系 その三

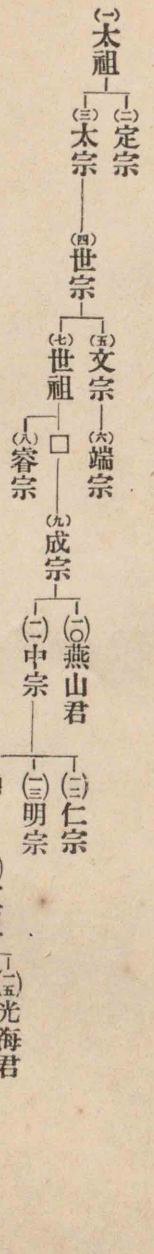
六 明帝室の系圖



七 清帝室の系圖

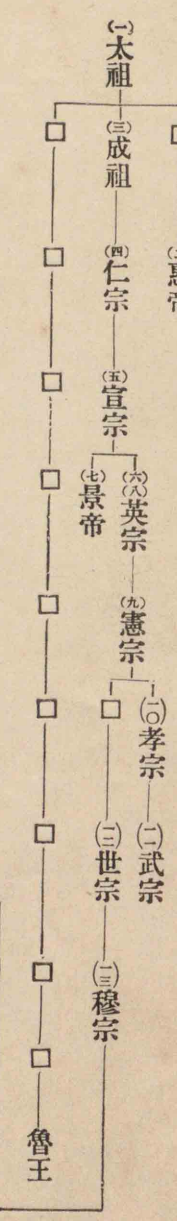


八 朝鮮(韓)王家の系圖

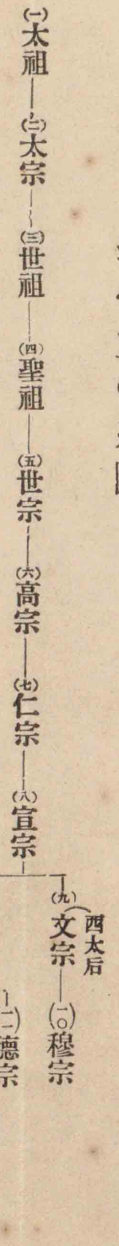


歷代世系　その三

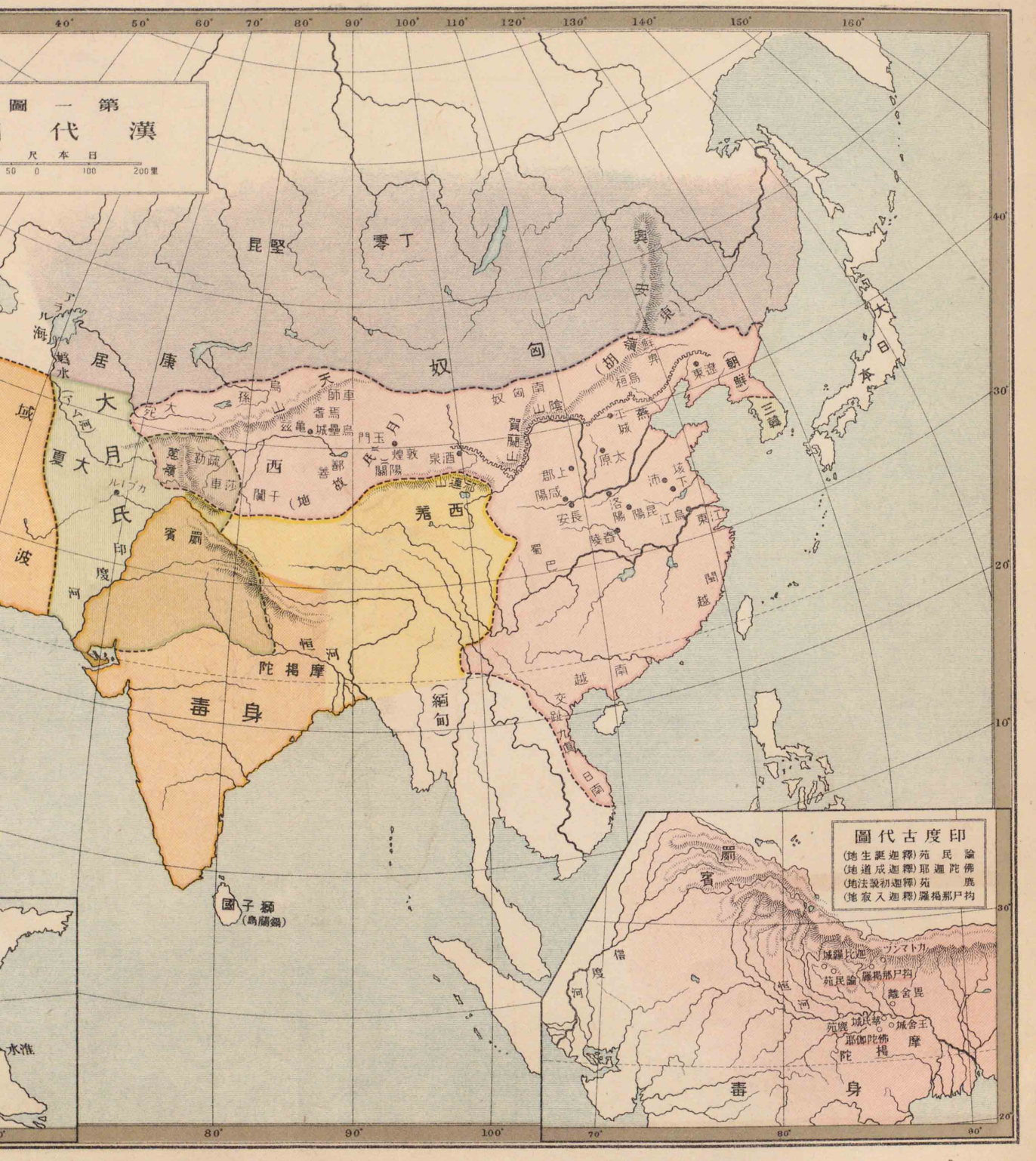
六　明帝室の系圖

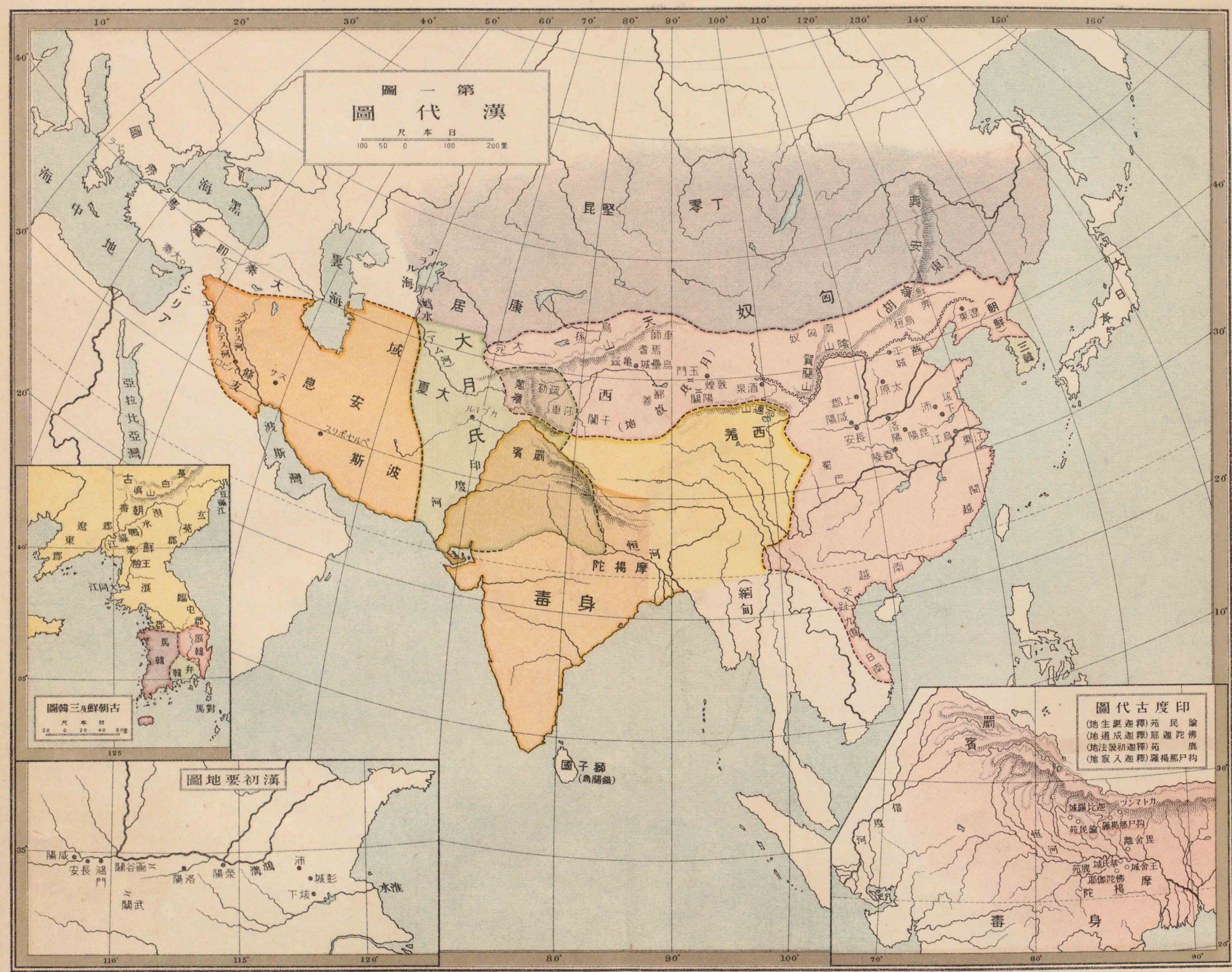


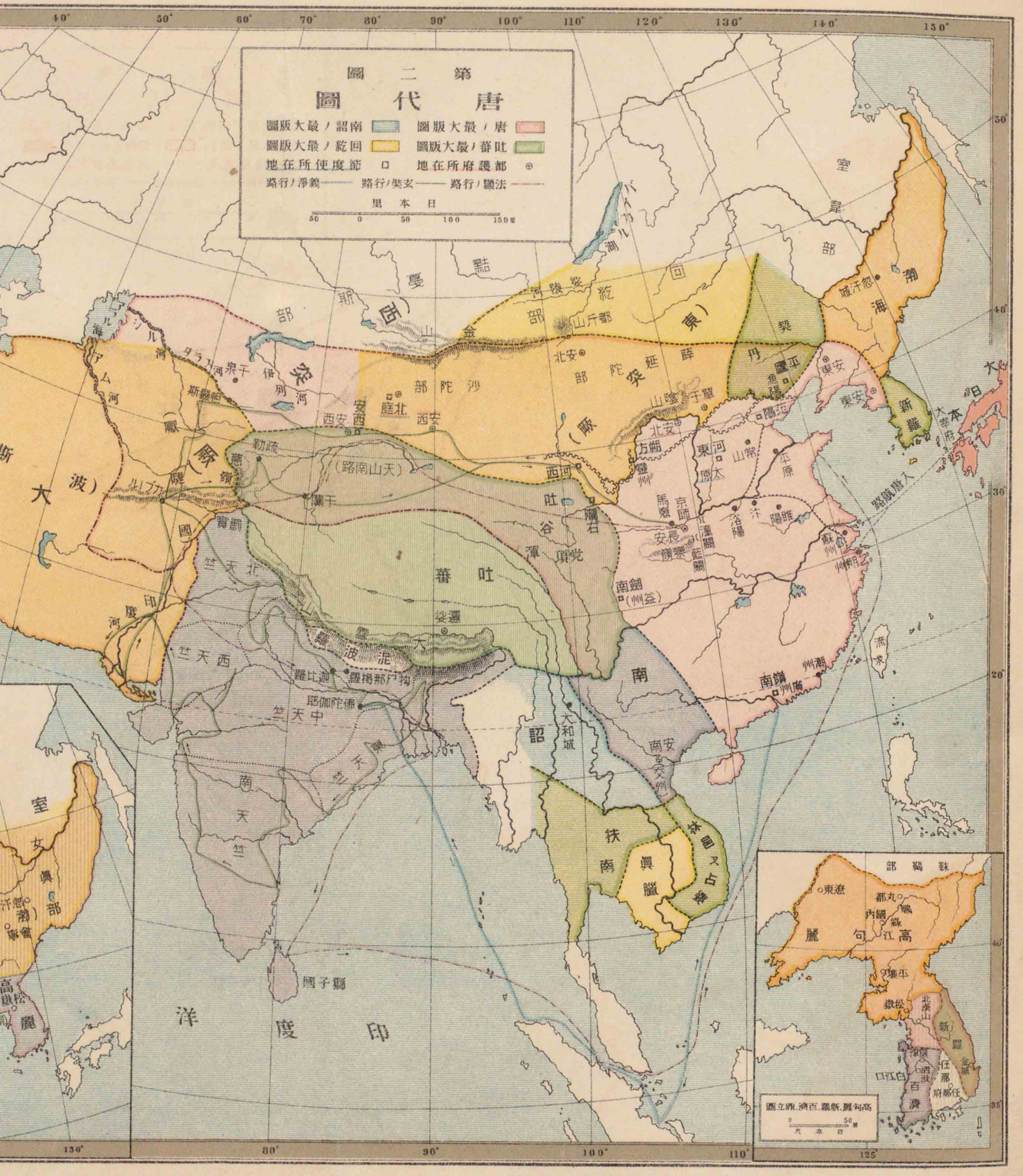
七　清帝室の系圖

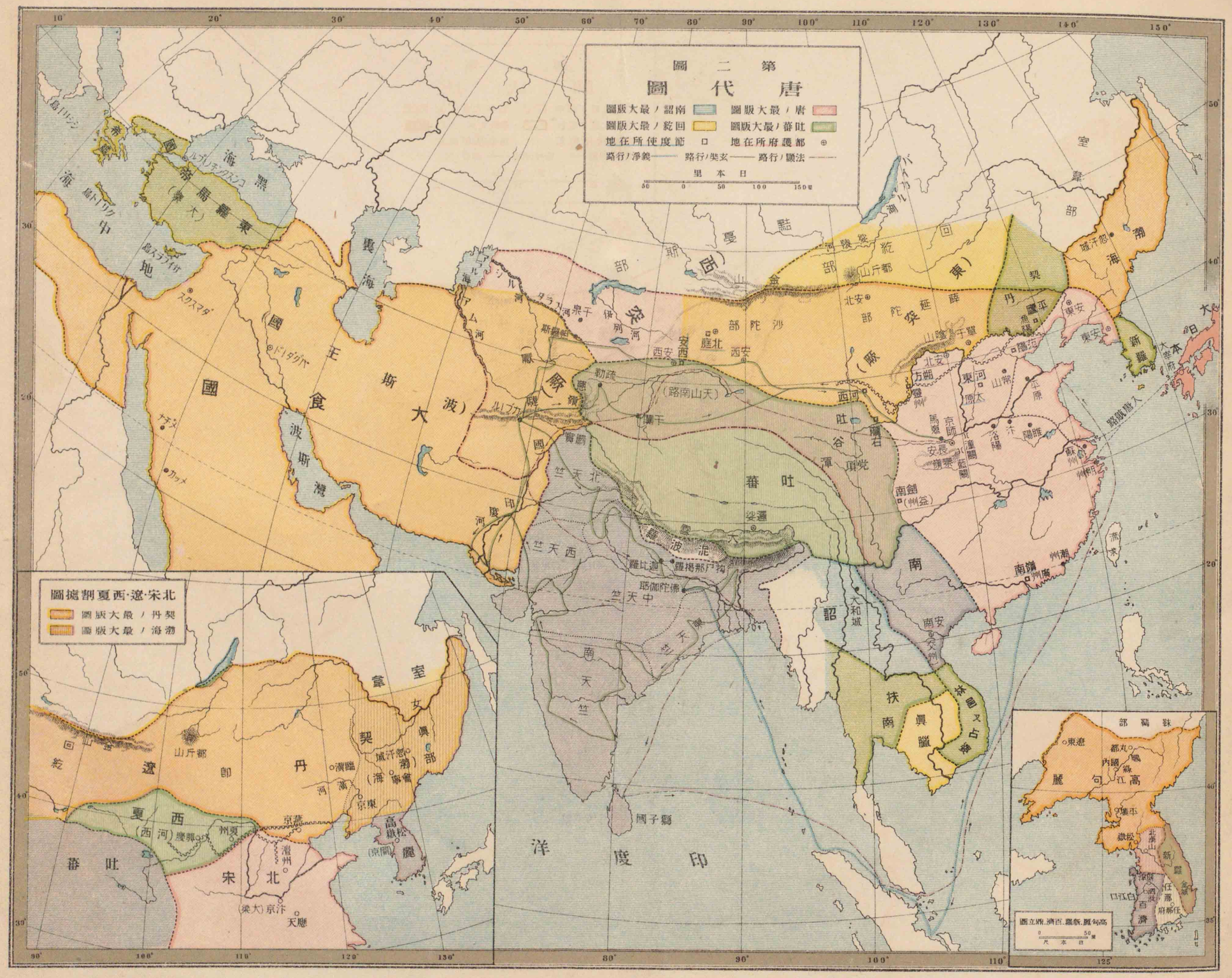


八　朝鮮(韓)王家の系圖

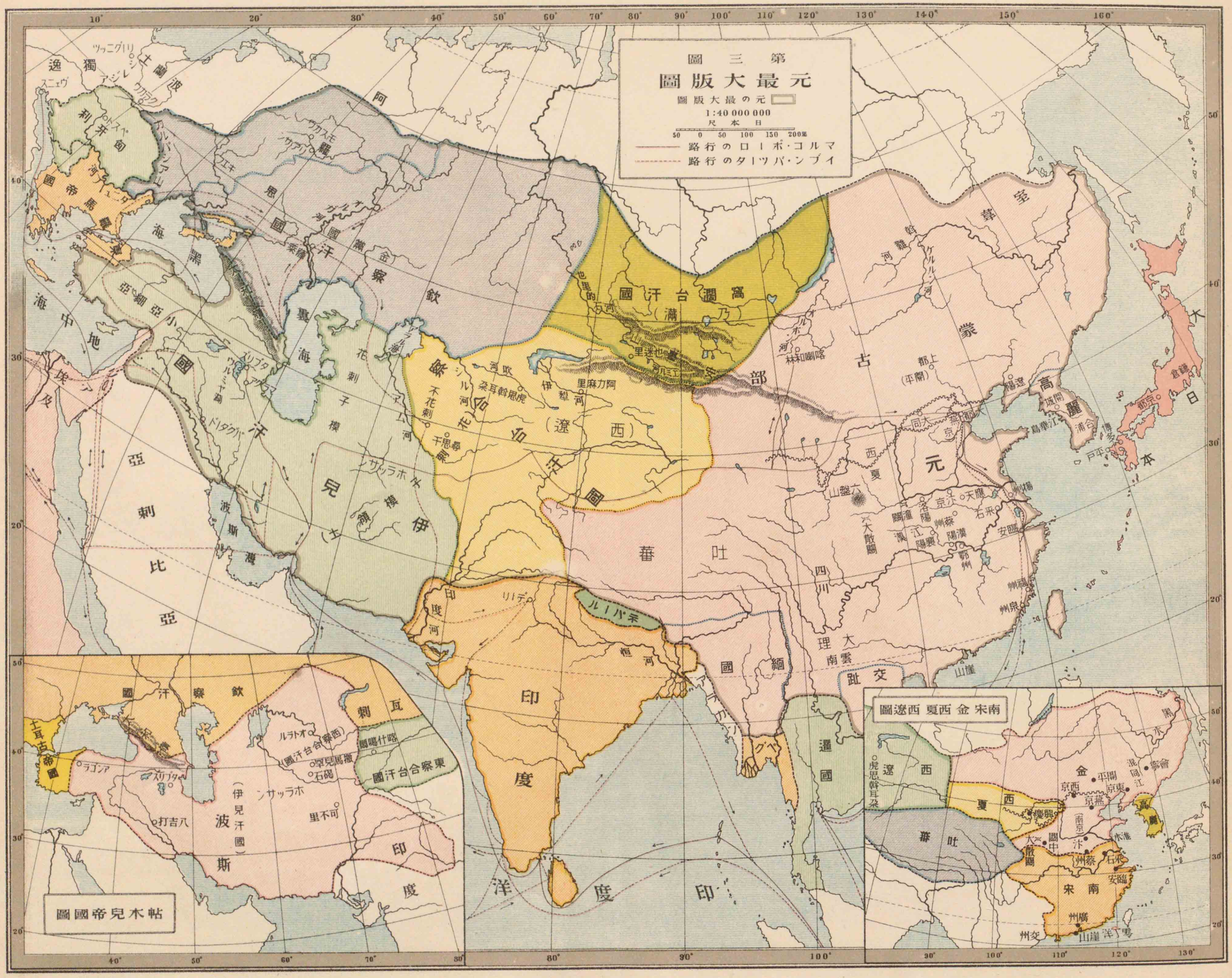

第一圖
漢代
日本尺
50 0 100 200里
昆堅
零丁
匈奴
康居
烏孫
大月氏
夏
波
毒身
罽賓
西羌
(緬甸)
恒河
摩揭陀
獅子國
(錫蘭島)
朝鮮
三韓
日本
東遼
遼東
遼西
上郡
陽翟
安長
洛陽
陵舂
蜀
巴
閩越
越南
交趾
九真
日南
敦煌
酒泉
玉門
關
鄯善
于闐
疏勒
葱嶺
車師
烏壘城
龜茲
焉耆
師古
天山
賀蘭山
匈奴南
雲中
代
燕
上谷
原太
沛
坂下
江陵
東江
閩越
印度古代圖
(地生誕迦釋)苑民論
(地道成迦釋)耶迦陀佛
(地法說初迦釋)苑鹿
(地寂入迦釋)羅揭那尸拘
城羅比迦
ブシマトカ
苑民論
羅揭那尸拘
離舍毘
苑鹿
城氏摩
城舍王
耶伽陀佛
摩揭陀
毒身
罽賓
信度河
恒河


第一圖
漢代圖
尺本日
100 50 0 100 200里
黑海
中地海
羅馬帝國
敘利亞
裏海
烏孫
大月氏
康居
匈奴
崑崙
丁零
興安嶺
朝鮮
三韓
日本
安息
斯波
波斯灣
亞拉比亞灣
印度河
罽賓
身毒
恒河
摩揭陀
緬甸
羌
西域
敦煌
酒泉
玉門
鄯善
烏壘城
龜茲城
疏勒
莎車
于闐
武威
張掖
上郡
咸陽
安長
洛陽
昆陽
江夏
東江
蜀
巴
閩越
南越
交趾
九眞
日南
遼東
樂浪
玄菟
臨屯
馬韓
辰韓
弁韓
對馬
古朝鮮及三韓圖
尺本日
漢初要地圖
關谷函
關武
鴻門
陽洛
陽榮
滿鴻
沛
城彭
下坟
水淮
獅子國
(島關錫)
印度古代圖
(地生誕迦釋)苑民論
(地道成迦釋)耶迦陀佛
(地法說初迦釋)苑鹿
(地寂入迦釋)羅揭那尸拘
罽賓
恒河
城羅比迦
苑民論
羅揭那尸拘
離舍毘
苑鹿
城氏摩
耶伽陀佛
城舍王
摩揭陀
身毒

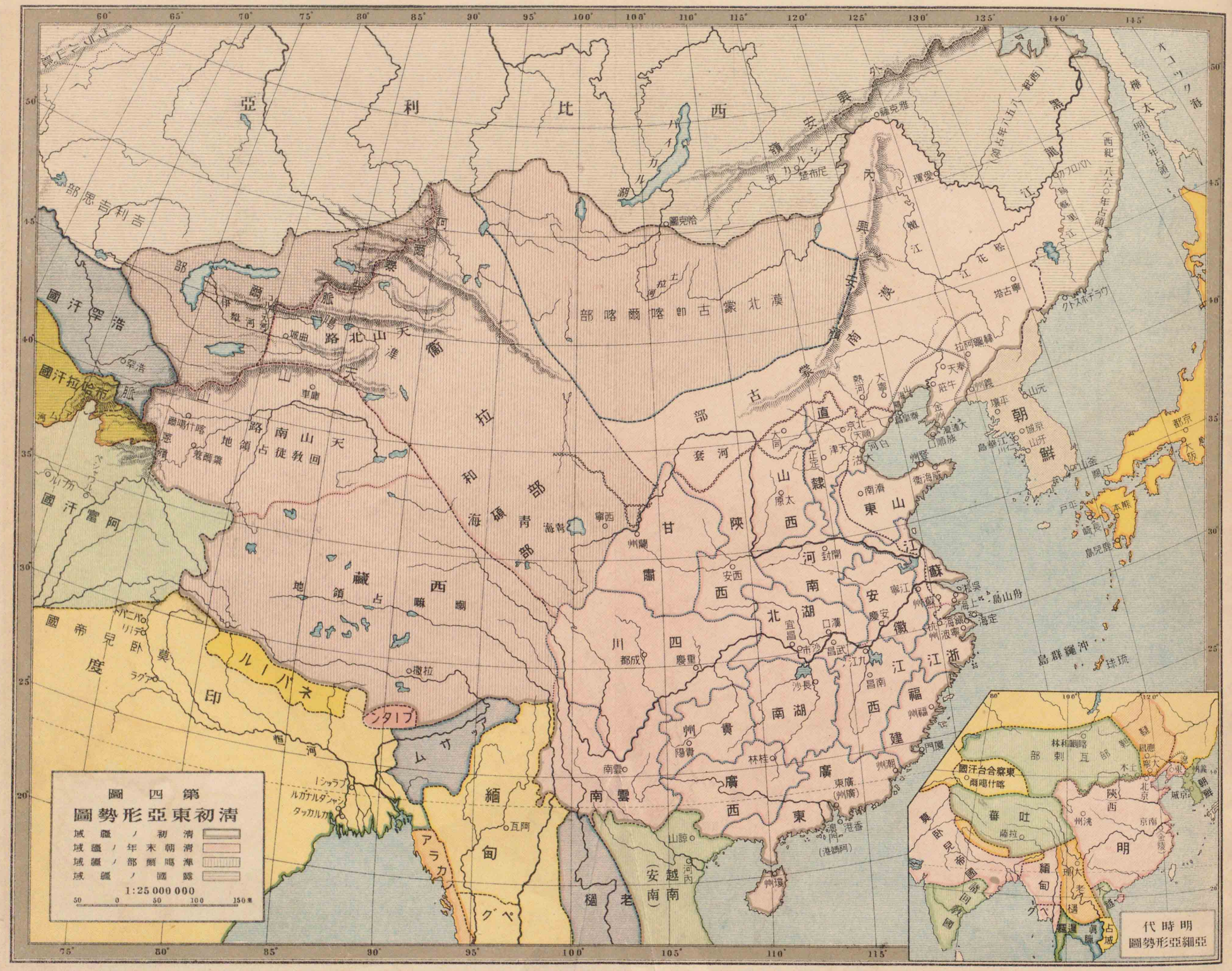

第二圖
唐代圖
圖版大最ノ詔南
圖版大最ノ唐
圖版大最ノ紇回
圖版大最ノ蕃吐
地在所使度節
地在所府護都
路行ノ淨義
路行ノ奘玄
路行ノ顯法
里本日
50 0 50 100 150
室韋部
渤海
日本
大和
新羅
高麗
高句麗
靺鞨部
遼東
都丸
鴨綠
內國
江
平壤
松嶽
北漢山
新羅
金城
任那府都
百濟
白江
泗沘
高句麗、濟百、羅新、麗立唐
0 50
尺本日
回紇
突厥
東突厥
西突厥
吐蕃
南詔
南蠻
南海
交州
安南
大和城
扶南
眞臘
林邑
古代
印度洋
國子獅
天竺
西天竺
中天竺
南天竺
北天竺
恒河
印度
大波斯
波斯
大食
曼陀羅
金山
安西
庭州
北庭
西安
長安
東都
洛陽
汴州
揚州
蘇州
明州
京師
馬嵬
安長
關潼
關蒲
關函
關武
關散
關蘭
關秦
關隴
關函
關石
關關
關關
關關


第二圖
唐代圖
圖版大最ノ唐
圖版大最ノ南詔
圖版大最ノ吐蕃
圖版大最ノ回紇
地在所府護都
地在所使度節
路行ノ懸法
路行ノ柴玄
路行ノ淨義
里本日
北宋·遼·西夏割據圖
圖版大最ノ海渤
圖版大最ノ丹契
波斯灣
印度洋
吐蕃
南詔
室韋
高麗
日本
新羅
渤海
丹契
遼
西夏
北宋
回紇
突厥
安西
北庭
長安
洛陽
太原
京師
成都
廣州
交州
大和城
國子廟
天竺
中天竺
西天竺
南天竺
北天竺
東天竺
恒河
印度河
阿姆河
錫爾河
伊別河
泉干
斯德健
疏勒
于闐
(天山路)
(路南路)
(路北路)
(路大唐)
(路新羅)
(路渤海)
(路契丹)
(路室韋)
(路高麗)
(路日本)
(路大食)
(路波斯)
(路拂菻)
(路天竺)
(路吐蕃)
(路南詔)
(路回紇)
(路突厥)
(路安西)
(路北庭)
(路長安)
(路洛陽)
(路太原)
(路京師)
(路成都)
(路廣州)
(路交州)
(路渤海)
(路新羅

第三圖
元最大版圖
元の最大版圖
1:40 000 000
尺本日
50 0 50 100 150 200粁
路行のロ・ポ・コルマ
路行のタ・ツパ・ンブイ
高麗
國汗台濶
蒙古
大日本
吐蕃
印度
緬國
暹國
交趾
洋度印
南宋金西夏西遼圖


第三圖
元最大版圖
元の最大版圖
1:40 000 000
尺本日
路行のロ・ポ・コルマ
路行のタ・ツパ・ンブイ
高麗
蒙古
元
日本
吐蕃
印度
印度洋
緬甸
暹羅
安南
交趾
西遼
西夏
金
宋南
遼
帖木兒帝國圖
遼西金西夏宋南圖

代時明
圖勢形亞細亞
西比利亞
蒙古
部喀爾喀即古蒙北漢
部和碩青海
西藏
甘肅
陝西
四川
雲南
貴州
廣西
廣東
福建
浙江
江蘇
安徽
湖北
湖南
山西
直隸
山東
河南
朝鮮
緬甸
越南
老撾
暹羅
眞臘
占城
琉球
沖繩島群
東京
大阪
京都
北京
城京
金陵
瑷琿
庫倫
恰克圖
烏蘭巴托
塔古拿
天津
上海
香港
海防
河內
仰光
曼谷
東京
大阪
長崎
馬關
釜山
仁川
平壤
漢城
奉天
旅順
大連
青島
濟南
太原
開封
西安
蘭州
寧夏
成都
重慶
貴陽
昆明
桂林
廣州
福州
杭州
南京
蘇州
武昌
漢口
宜昌
沙市
長沙
九江
南昌
廈門
潮州
海口
海定
海上
烏山
舟山
寧波
紹興
吳淞
天津
北京
西安
蘭州
寧夏
太原
濟南
開封
南京
上海
杭州
福州
廣州
昆明
成都
重慶
貴陽
長沙
武昌
漢口
南昌
廈門
海口
河內
仰光
曼谷
東京
大阪
長崎
馬關
釜山
仁川
平壤
漢城
奉天
旅順
大連
青島
濟南
太原
開封
西安
蘭州
寧夏
成都
重慶
貴陽
昆明
桂林
廣州
福州
杭州
南京
蘇州
武昌
漢口
宜昌
沙市
長沙
九江
南昌
廈門
潮州


第四圖
清初東亞形勢圖
域疆ノ初清
域疆ノ年末朝清
域疆ノ部爾喀準
域疆ノ國俄
1:25 000 000
明時代
亞細亞形勢圖
亞利比西
吉利吉思部
國汗罕浩
國汗拉哈布
國汗富阿
國帝兒臥莫
度印
ルーパネ
ンタイブ
ムサッ
緬甸
アラカ
グペ
暹羅
老撾
越南(安南)
廣東
廣西
雲南
貴州
四川
湖北
湖南
安徽
江蘇
浙江
福建
山東
直隸
河南
山西
陝西
甘肅
青海
新疆
西藏
蒙古
滿洲
朝鮮
日本
琉球
島群繩沖
部喀爾喀準
部古蒙北漠
部和碩青海
路南山天
路北山天
回教徒
地領占
地領占嘛喇
部斯哈克
部爾喀什
部拉哈
部布尼楚
部烏梁海
部科布多
部伊犁
部塔爾巴哈台
部阿爾泰
部烏魯木齊
部吐魯番
部喀什噶爾
部和闐
部葉爾羌
部阿克蘇
部庫車
部喀什噶爾
部烏魯木齊
部吐魯番
部和闐
部葉爾羌
部阿克蘇
部庫車
部科布多
部烏梁海
部塔爾巴哈台
部伊犁
部布尼楚
部斯哈克
部烏魯木齊
部吐魯番
部喀什噶爾

第五圖
現代亞細亞圖
道鐵成未
道鐵成既
領蘭
領露
領英
領米
領佛
領蘭
領獨
1:50 000 000
尺本日
50 0 100 200 300哩
北極洋
太平洋
印度洋
支那
蒙古
滿洲
朝鮮
日本
海
黃海
東海
南海
西藏
緬甸
暹羅
安南
馬來
蘭印
英領海峽植民地
新加坡
ボルネオ
ニューギニア
ルソン
ルモチ
クッポンロ
アイウタバ
哇瓜
小スンダ島諸
ジャワ島諸
琉球諸島
小笠原島
マリアナ諸島
カムチャツカ
ウラル
ヴォルガ
ヴェルホヤンスク
ヴェルヌイ
ウスリー
ハバロフスク
ブラゴヴェシチェンスク
ニコラエフスク
ウラジヴォストク
ペトロパヴロフスク
ヴェルヌイ
ヴェルホヤンスク
ヴェルヌイ
ヴェルホヤンスク
ヴェルヌイ
ヴェルホヤン

第五圖
現代亞細亞圖
道鐵成未
道鐵成既
領蘭
領露
領米
領蘭
領英
領佛
領獨
1:50 000 000
尺本日
現代南滿洲圖
北極洋
太平洋
印度洋
黃海
日本海
東海
南海
亞拉比亞海
波斯灣
紅海
黑海
里海
咸海
巴爾喀什湖
貝加爾湖
咸海
亞拉比亞
加利
地中海
歐羅巴
西伯利亞
中亞細亞
蒙古
支那
滿洲
朝鮮
日本
印度
緬甸
暹羅
安南
馬來半島
蘭印
菲利賓諸島
婆羅洲
新幾內亞
澳大利亞
新西蘭
馬來半島
蘭印
婆羅洲
新幾內亞
澳大利亞
新西蘭
錫蘭
新加坡
海峽殖民地
英領海峽殖民地
新加坡
北海道
樺太
千島諸島
琉球諸島
小笠原島

大正十一年度臨時定價　金壹圓六拾七錢

明治卅六年二月八日印刷
明治卅六年五月十日訂正再版發行
大正四年十月廿日修正第十版發行
大正八年十月廿七日訂正第十九版印刷
大正八年十月廿日修正第十八版印刷
大正五年三月廿八日訂正第十五版發行
大正三年一月七日訂正第十三版發行
明治卅六年二月十日發行
大正九年一月十五日訂正第十九版印刷
大正十年十月二十四日修正二十版發行
大正十年十月二十七日修正二十版發行

中等教育 東洋史教科書

定價金八拾八錢

著作權所有
本書原圖
嚴禁轉載
不許複製

著作者　桑原隲藏
東京市小石川區小日向水道町八十四番地

發行者　株式會社東京開成館
代表者　渡邊良助
東京市小石川區久堅町百八番地

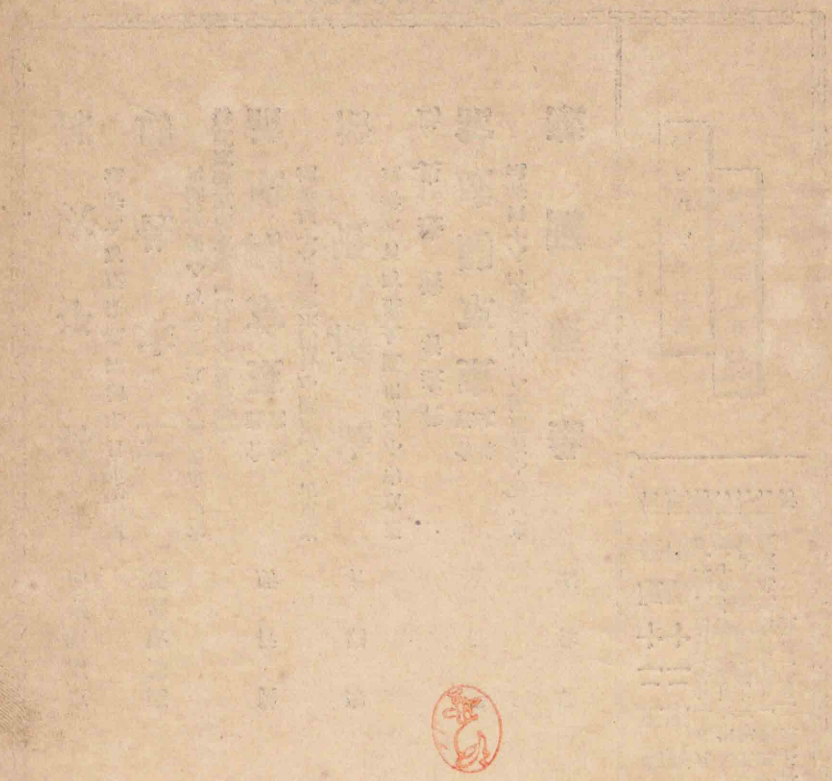
印刷者　高橋賢治
東京市小石川區小日向水道町八十四番地

發行所　株式會社東京開成館
【振替貯金口座】東京第五參貳貳番
大阪市東區北久寶寺町心齋橋筋角

西部販賣所　三木佐助
東京市日本橋區數寄屋町九番地

東部販賣所　林平次郎

(株式會社博文館印刷所印刷)



東京開成館

広島大学図書
2000085174